

日本昔話の世界

はじめに

さて、今回の『日本昔話の世界』（浦島太郎と桃太郎その他）という作品は、われわれ日本人であれば、もう誰でもよく御存知の作品ばかりであります。それは、例えば、浦島太郎をはじめ、金太郎、かちかち山、さるかに合戦、舌切りすずめ、こぶとり爺さん、桃太郎、一寸法師、花咲か爺さん、笠地蔵、鶴の恩返し、竹取物語、その他になります。

ところで、「昔話」と言えば、その「原典」のあるものと曖昧なものがあり、しかも、今日では実に多彩な「絵本やアニメ或いは動画その他」の数だけその内容の「派生」（パリエーション）があるというように、むろん、どの「内容」が正しいというよりは、それはどこか「子供の遊び」にも似て、まさに「その時代その地域或はその時々」の語り部（書き手）によって、（話の内容の基本は何かか踏まえながらも）変幻自在と多様化していくものである。それゆえ、ここに載っている幾つかの「昔話」が、かつて自分が読んだ「昔話」の内容とは「全然違う」ということも十分あり得ることですが、その基本的な「内容」は、大体こういう感じのものということであり、また、御伽草紙（一寸法師と浦島太郎）それに「竹取物語」などは、その「原典」がはっきりと存在し、それゆえ、その「原文」と今日の「昔話」の内容とを比較対照しながら読むことによって、その時代の内容とどこがどのように「変化・発展」して来たかを知ることができ、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和五年一月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

はじめに

日本昔話の世界

- 一、 分福茶がまぶんぷくちや
- 二、 浦島太郎
- 三、 金太郎
- 四、 かちかち山
- 五、 さるかに合戦
- 六、 舌切りすずめ
- 七、 こぶとり爺さん
- 八、 桃太郎
- 九、 一寸法師
- 十、 花咲か爺さんかき
- 十一、 笠地藏かさ
- 十二、 鶴の恩返しがえ
- 十三、 御伽草紙おとぎぞうし
- 十四、 竹取物語

※ 参考文献

分福茶がま

分福茶がま

一、和尚さんと或る茶がま

昔、上野国の館林に、茂林寺というお寺がありました。このお寺の和尚さんは、たいそうお茶の湯が好きで、いろいろと変わったお茶道具を集めて、毎日、それをいじっては楽しみにしていました。——ある日、和尚さんは、用事があって町へ行った帰りに、一軒の道具屋で気に入った形の茶がまを見つけました。和尚さんは、さっそくそれを買って帰って、自分のお部屋に飾って、「……どうです、なかなかいい茶がまでしょう」と、来る人ごとに見せて、自慢していました。ある晩、和尚さんは、いつもの通り、居間に茶がまを飾ったまま、その傍でうとうとと居眠りをしていました。そのうちほんとうにくっすり寝込んでしまいました。

和尚さんのお部屋があんまり静かなので、小僧さんたちは、どうしたのかと思って、そつと障子の透き間から中を覗いてみました。すると和尚さんのそばに布団を敷いて座っていた茶がまが、独りでにむくむくと動き出しました。「おや」と思ううちに、茶がまからひよっこり頭が出て、太いしっぽが生えて、四本の足が出て、やがてのそのそとお部屋の中を歩き出しました。小僧さんたちはびっくりして、お部屋の中へ飛び込んで来て、「……やあ、大変だ。茶がまが化けた」と叫び、「……和尚さん、和尚さん。茶がまが歩き出しましたよ」と、てんでんにとんきような声を立てて騒ぎ出しました。その音に和尚さんは目を覚まして、「……やかましい、何を騒ぐのだ」と目をこすりながら叱ると、「……でも和尚さん、ご覧なさい。ほら、あの通り茶がまが歩きますよ」と言うのでした。こうてんでんに言うので、和尚さんも小僧さんたちの指さす方を見ますと、茶がまにはもう頭も足もしっぽもありません。ちゃんと元の茶がまになって、いつの間にか布団の上に乗ってすましていました。和尚さんは怒って、「……何だ。馬鹿なことを言うにもほどがある」と叱り、「……でも変だなあ。確かに歩いてたのに」と、こう言いながら小僧さんたちは不思議そうに寄って来て、その茶がまを叩いてみました。茶がまは、「かん」と鳴るだけで、「……それ見ろ。やつぱりただの茶がまだ。くだらないことを言つて、せつかくいい心持ちに寝ているところを起こしよつて」と、和尚さんにひどく叱られると、小僧さんたちはすっかりしよげて、ぶつぶつ口小言（不平や不満）などを言いながら引込んで行きました。

二、突然、茶がまが……

その翌る日、和尚さんは、「……せつかく茶がまを買って来て、ながめてばかりいてもつまらない。今日はひとつ使いだめしをしてやろう」と言つて、茶がまに水をくみ入れると、小さな茶がまのくせに、いきなり手桶に一杯の水をがぶりと飲んでしまいました。

和尚さんは、少し「変だ」と思いましたが、ほかに変わったこともないので、安心してまた水を入れて、いろいろにかけました。すると、しばらくしてお尻が暖まって来ると、茶がまは出し抜けに、「あつい」と言つて、いろいろの外へ飛び出しました。おやと思つた間にたぬきの頭が出て、四本の足が出て、太いしっぽが生えて、のこのことお座敷の中を歩

き出しましたから、和尚さんは、「わあっ」と言つて、思わず飛び上がりました。「……大変だ、大変。茶がまが化けた。誰か来てくれ」と、和尚さんがびつくりして大きな声で呼び立てますと、小僧さんたちは、「……そら来た」と言つて、向こう鉢巻きで、ほうきやはたきを持って飛び込んで来ました。でも、もうその時分には元の茶がまになつて、布団の上ですましていました。叩けば、また「かん、かん」と鳴るのでした。

和尚さんはまだびつくりしたような顔をしながら、「……どうもいい茶がまを手に入れたと思つたら、とんだものをしよい込んだ。どうしたものだろう」と考えていると、門の外で、「……くずい、くずい」と言う声がしました。「……ああ、いいところへくず屋が来た。こんな茶がまはいっそくず屋に売つてしまおう」と、和尚さんはそう思つて、さっそくくず屋を呼びせました。くず屋は和尚さんの出した茶がまを手にとつて、撫でてみたり、叩いてみたり、底を返して見たりしたあとで、「……これは結構な品物です」と言つて、茶がまを買つて、くずかごの中に入れて持つて行きました。

三、狸は、なぜ茶がまに……

茶がまを買つたくず屋は、家へ帰つてもまだニコニコして、「……これはこの頃のない掘り出しものだ。どうかして道具好きなお金持ちをつかまえて、いい価に売らなければならぬ」と、こう独り言を言いながら、その晩は大事そうに茶がまをまくら元に飾つて、ぐつすり寝ました。すると真夜中過ぎになつて、どこかで、「……もしもしくず屋さん、くず屋さん」と呼ぶ声がありました。はっとして目を覚ましますと、まくら元にさっきの茶がまがいつの間にか毛むくじやらの頭と太いしつぽを出して、ちよこなんと座つていました。くず屋はびつくりして、はね起きました。「……やあ、大変。茶がまが化けたぞ」と叫ぶと、「……くず屋さん、そんなに驚かないでもいいですよ」と言うので、「……だつて驚かずにいられるものかい。茶がまに毛が生えて歩き出せば、誰だつて驚くだろうじやないか。一体、お前は何だい」と聞くと、「……わたしは文福茶がまと言つて、ほんとうは狸の化けた茶がまですよ」と言うのでした。

実は、「……ある日、野原へ出て遊んでいるところを五、六人の男に追いまわされて、仕方なしに茶がまに化けて草の中に転がっていると、またその男たちが見つけて、今度は茶がまだ、茶がまだ、いいものが手に入った。これをどこかへ売り飛ばして、みんなで美味しいものを買つて食べようと言うのでした。それでわたしは古道具屋に売られて、店先にさらされて、さんざん窮屈な目に遇いました。その上何も食べさせてくれないので、お腹が空いて死にそうになつたところを、お寺の和尚さんに買われて行きました。お寺では、やつと手桶に一杯の水をもらつて、一口にがぶ飲みしてほつと息をついたところを、いきなりいろりに乗せられて、お尻から火あぶりにされたのはさすがに驚きました。もうあなたな所はこりこりです。あなたは人のいい、親切な方らしいから、どうぞしばらくわたしを家に置いて養つて下さいませんか。きつとお礼はしますから」と言うのでした。

くず屋は、「……うん、うん、置いてやるぐらいわけのないことだ。だがお礼をするつてどんなことをするつもりだい」と聞くと、「……へえ。見世物でいろいろ面白い芸当をして見せて、あなたにたんとお金儲けさせて上げますよ」と言うので、「……ふん、芸つて一体どんなことをするのだい」と聞くと、「……さあ、さし当たり綱渡りの軽わざに、

文福茶がまの浮かれ踊りをやりましょう。もうくず屋なんかやめてしまつて、見世物師におんななさい。明日からたんとお金が儲かりますよ」と言うのでした。

六、文福茶がまの綱渡りと浮かれ踊り

こう言われて、くず屋はすっかり乗り気になつてしまい、そして、茶がまの勧める通りくず屋をやめてしまいました。——その翌る日、夜が明けると、くず屋はさつそく見世物の支度にかかりました。まず町の盛り場に一軒見世物小屋を拵えて、文福茶がまの綱渡りと浮かれ踊りの絵を描いた大看板を挙げ、太夫元と木戸番と口上言いを自分一人で兼しました。そして木戸口に座つて大きな声で、「……さあ、さあ、大評判の文福茶がまに毛が生えて、手足が生えて、綱渡りの軽わざから、浮かれ踊りの不思議な芸当、評判じゃ、評判じゃ」と呼び立てました。

往來の人たちは、不思議な看板と面白そうな口上に釣られて、ぞろぞろ見世物小屋へ詰めかけて来て、たちまち満員になつてしまいました。やがて、拍子木が鳴つて、幕が上がりますと、文福茶がまが、のこの楽屋から出て来て、お目見えのご挨拶をしました。見るとそれは思いもつかない、大きな茶がまに手足の生えた化け物でしたから、見物客は、みんな「あつ」と言つて目を丸くしました。

それだけでも不思議なのに、その茶がまの化け物が両方の手に唐傘をさして扇を開いて、綱の上に両足を掛けました。そして重い体を器用に調子を取りながら、綱渡りの一曲を首尾よくやつてのけましたから、見物客はいよいよ感心して、小屋も割れるほどの大喝采を浴びるのでした。——それから、何をして、文福茶がまが変つた芸当をやつて見せるたびに、見物客は大喜びで、「……こんな面白い見世物は生まれて始めて見た」と、てんでんに言い合つて、またぞろぞろ帰つて行きました。それからは文福茶がまの評判は、方々に広がつて、近所の人は、言うまでもなく、遠国からもわざわざ草鞋がけで見に来る人で毎日毎晩大變な大入りでしたから、僅かの間にくず屋は大金持ちになりました。

七、文福茶がまは、再びお寺へ……

さて、そのうちにくず屋は、「……こうやつて文福茶がまのお蔭でいつまでもお金儲けをしていても際限のないことだから、ここらで休ませてやりましょう」と考えました。そこで、ある日、文福茶がまを呼んで、「……お前をこれまで随分働かせるだけ働かして、お蔭でわたしも大したお金持ちになつた。人間の欲には限りがないと言うが、そうそう欲張るのは悪いことだから、今日限りお前を見世物に出すことは止めて、元の通り、茂林寺に納めることにしよう。その代わり、今度は和尚さんに頼んで、ただの茶がまのようにいろいろに掛けて、火あぶりになんぞしないようにして、大切にお寺の宝物にして、錦の布団に乗せて、しごく安樂な御隠居の身分にして上げるがどうだね」と尋ねると、文福茶がまは、「……そうですね。わたしも草臥れましたから、ここらで少し休ませてもらいましうか」と言うのでした。

そこで、くず屋は、文福茶がまに見世物で儲けたお金を半分添えて、茂林寺の和尚さんの所へ持つて行きました。和尚さんは、「……ほう、ほう、それは奇特なこと」と

言いながら、茶がまとお金を受け取りました。文福茶がまもそれきり草臥れて寝込んで
もしまったのか、それからは別段手足が生えて踊り出すというようなこともなく、このお寺
の宝物となつて、今日まで伝わっているとのこと。 (完)

* * *

浦島太郎

浦島太郎

一、ある日、亀の子を助ける

昔々、丹後の国水の江の浦に、浦島太郎という漁師がありました。浦島太郎は、毎日、釣竿をかついで海へ出かけて、鯛や鯉などのお魚を釣って、お父さんやお母さんを養っていました。

ある日、浦島は、いつもの通り海へ出て、一日お魚を釣って、帰って来ました。途中、子供が五、六人往來に集まって、がやがや言っていました。何かと思って浦島が覗いてみると、小さい亀の子を一匹捕まえて、棒で突ついたり、石で叩いたり、さんざんに苛めているのです。浦島は見かねて、「……まあ、そんな可哀想なことをするものではない。いい子だから」と、止めましたが、子供たちは聞き入れようもしないで、「……なんだい。なんだい、かまうもんかい」と言いながら、また亀の子を仰向けにひっくり返して、足で蹴つたり、砂のなかに埋めたりしました。浦島はますます可哀想に思つて、「……じゃあ、おじさんがお足を上げるから、その亀の子を売っておくれよ」と言うと、子供たちは、「……うんうん、お足をくれるならやってもいい」と言つて、手を出しました。そこで浦島は、お足をやって亀の子をもらい受けました。子供たちは、「……おじさん、ありがとう。また買つておくれよ」と、わいわい言いながら、行つてしまいました。

二、お礼に竜宮城へ

そのあとで浦島は、甲羅からそつと出した亀の首をやさしく撫でてやつて、「……やれやれ、あぶないところだった。さあもうお帰りお帰り」と言つて、わざわざ、亀を海ぼたまで持つて行つて離してやりました。亀はさも嬉しそうに、首や手足を動かして、やがて、ぶくぶく泡を立てながら、水の中に深く沈んで行つてしまいました。

それから二、三日経つて、浦島はまた舟に乗つて海へ釣りに出かけました。遠くの方までも漕ぎ出して、一生懸命お魚を釣っていますと、ふと後ろの方で、「……浦島さん、浦島さん」と呼ぶ声がありました。おやと思つて振り返つてみますと、誰も人の影は見えませんが、その代わり、何時の間にか、一匹の亀が舟のそばに来ていました。浦島が不思議そうな顔をしていると、「……わたくしは、先日助けて頂いた亀でございます。今日はちよつとそのお礼に参りました」と、亀がこう言つたので、浦島はびっくりしました。

そこで、「……まあ、そうかい。わざわざ礼なんぞ言いに来るには及ばないのに」と言ううと、「……でも、本当にありがとうございました。時に、浦島さん、あなたは龍宮をこ覧になったことがありますか」と聞くので、「……いや、話には聞いているが、まだ見たことはないよ」と答えると、「……ではほんのお礼のしるしに、わたくしが龍宮を見せて上げたいと思ひますがいかがでしょう」と言うのでした。「……へえ、それは面白いね。ぜひ行つてみたいが、それは何でも海の底にあるということではないか。どうして行くつもりだね。わたしにはとてもそこまで泳いで行けないよ」と言うと、「……なに、わけございません。わたくしの背中にお乗りください」と言うのでした。

三、竜宮城へと

亀はこう言つて、背中を出しました。浦島は半分気味悪く思いながら、言われるままに、亀の背中に乗りました。——亀はすぐに白い波を切つて、ずんずん泳いで行きました。ざあざあいう波の音がだんだん遠くなつて、青い青い水の底へ、ただもう夢のように運ばれて行きますと、ふと、そこらがかつと明るくなって、白玉のようにきれいな砂の道が続いて、向こうに立派な門が見えました。その奥にきらきら光つて、目の眩むような金銀の甍が高くそびえていました。「……さあ、龍宮へ参りました」と、亀はこう言つて、浦島を背中から下ろして、「……しばらくお待ちください」と言つたまま、門の中へと入つて行きました。

四、竜宮城の中の様子

まもなく、亀はまた出てきて、「……さあ、こちらへ」と、浦島太郎を御殿の中へ案内しました。鯛や平目やカレイやいろいろのお魚が、もの珍しそうな目で見ている中を通つて、入つて行きますと、乙姫様が大勢の腰元を連れて、お迎えに出て来ました。やがて乙姫様に付いて、浦島太郎はずんずん奥へ通つて行きました。瑠璃の天井に珊瑚の柱、廊下には瑠璃が敷き詰めてありました。こわごわその上を歩いて行きますと、どこからともなくいい匂いがして、楽しい楽の音が聞こえて来ました。

やがて、水晶の壁に色々な宝石をちりばめた大広間に通りますと、「……浦島さん、ようこそお出で下さいました。先日は亀の命をお助け下さいまして、誠にありがとうございます。何にもお持てなしはございませんが、どうぞゆっくりお遊びくださいまし」と、乙姫様は言つて、丁寧にお辞儀をしました。やがて、鯛を頭に、鯉だの、河豚だの、海老だの、蛸だの、大小色々なお魚が、珍しい御馳走を山と運んで来て、賑やかなお酒盛が始まりました。綺麗な腰元たちは、歌を歌つたり踊りを踊つたりしました。浦島はただもう夢の中で夢を見ているようでした。——御馳走が済むと、浦島はまた乙姫様の案内で、御殿の中を残らず見せてもらいました。どのお部屋も、どのお部屋も、珍しい宝石類で飾り立ててありますから、その美しさは、とても口や言葉では表現でき得ないほどでした。

五、四季の景色

さて、一通り見てしまつと、乙姫様は、「……今度は四季の景色をお目にかけますよう」と言つて、まず、東の戸をお開けになりました。そこは春の景色で、一面、ぼうつと霞んだ中に桜の花が美しい絵のように咲き乱れていました。青青とした柳の枝が風になびいて、その中で小鳥が鳴いたり、蝶々が舞つたりしていました。

次に、南の戸をお開けになりました。そこは夏の景色で、垣根には白い卵の花が咲いて、お庭の木の青葉の中では、蝉や蝸が鳴いていました。お池には赤と白の蓮の花が咲いて、その葉の上には水晶の珠のように露が溜まっていました。お池の縁には、きれいなさざ波が立つて、鴛鴦や鴨などが浮かんでいました。

次に西の戸をお開けになりました。そこは秋の景色で花壇の中には、黄菊、白菊が咲き乱

れて、ふんといいい香りを立てました。向こうを見ると、かつと燃え立つような紅葉の林の奥に、白い霧が立ち籠めていて、鹿の鳴く声が悲しく聞こえました。

一番最後に、北の戸をお開けになりました。そこは冬の景色で、野には散り残った枯葉の上に、霜がきらきら光っていました。山から谷にかけて、雪がまっ白に降り積った中から、柴をたく煙がほそぼそと上がっていました。

浦島太郎は、何を見ても驚きあきれて目ばかり見張っていました。そのうちだんだんぼうつとして来て、お酒に酔った人のようになって何もかも忘れてしまいました。

六、歳月は流れて

毎日、面白い珍しいことが、それからそれと続いて、あまり龍宮が楽しいので、何とすることも思わずに、うかうか遊んで暮らすうち、三年の月日が経ちました。——三年目の春になった時、浦島は時々、久しく忘れていた故郷の夢を見るようになりました。春の日のぼかぼか当たっている水の江の浜辺で、獵師たちが元氣よく舟唄を歌いながら、網を引いたり舟を漕いだりしているところを、まざまざと夢に見るようになりました。浦島は今さらのように、「……お父さんやお母さんは、今頃どうしていらっしゃるだろう」と、こう思い出すと、もういても立ってもいられなくなるような気がしました。何より早く家へ帰りたいとばかり思うようになりました。ですから、もうこの頃では、歌を聞いても、踊りを見ても、面白くない顔をして、塞ぎ込んでばかりいました。

その様子を見ると、乙姫様は心配して、「……浦島さん、ご気分でもお悪いのですか」とお聞きになりました。浦島はもじもじしながら、「……いいえ、そうではありません。実は家へ帰りたくなつたものだから」と言いますと、乙姫様は、急に大層がっかりした様子をなさいました。「……まあ、それは残念でございますこと。でもあなたのお顔を拝見いたしますと、この上お引きとめ申しても、無駄のように思われます。では致し方ございません、行つていらつしやいませ」と、こう悲しそうに言つて、乙姫様は、奥から綺麗な宝石で飾つた箱を持っておいでになつて、「……これは玉手箱と言つて、中には、人間の一番大事な宝が籠めてございます。これをお別れのしるしに差し上げますから、お持ち帰りくださいませ。ですが、あなたがもう一度龍宮へ帰つて来たいと思召すなら、どんなことがあつても、決してこの箱を開けてご覧になつてはいけません」と、くれぐれも念を押して、玉手箱をお渡しになりました。浦島は、「……ええ、ええ、決して開けません」と言つて、玉手箱を小脇に抱えたまま、龍宮の門を出ますと、乙姫様は、また大勢の腰元を連れて、門の外までお見送りになりました。

七、再び、故郷へ

さて、もうそこには例の亀が来て待つていました。浦島は嬉しいのと悲しいのとで、胸が一杯になつていました。そして亀の背中に乗りますと、亀はすぐ波を切つて上がつて行つて、まもなく元の浜辺に着きました。「……では浦島さん、ごきげんよろしゅう」と、亀は言つて、また水の中に潜つて行きました。浦島はしばらく、亀の行えを見送つていました。

八、家に帰ってみると、

浦島は、海ばたに立ったまま、しばらくそこらを見まわしました。春の日がぼかぼかあたって、一面に霞んだ海の上はどこからともなく賑やかな舟唄が聞こえました。それは夢の中で見た故郷の浜辺の景色とちつとも違つたところはありませんでした。けれどよく見ると、そこらの様子がなんとなく変わつていて、会う人も会う人も、一向に見知らない顔ばかりで、向こうでも妙な顔をして、じろじろ見ながら言葉もかけずにすまして行つてしまいました。「……おかしなこともあるものだ。たつた三年の間に、みんなどこかへ行つてしまはずはない。まあ、何でも早く家へ行つてみよう」。

こう独り言を言いながら、浦島は自分の家の方角へ歩き出しました。ところが、そこと思ふあたりには草や葎がぼうぼうと茂つて、家などは影も形もありません。昔、家の立っていたらしい跡さえも残つてはいませんでした。一体、お父さんやお母さんはどうなつたのでしょうか。浦島は、「……不思議だ。不思議だ」と繰り返しながら、狐につままれたようなきよとんとした顔をしていました。

するとそこへ、よぼよぼのお婆さんが一人、杖にすがつてやつて来ました。浦島はさつそく、「……もしもし、お婆さん、浦島太郎の家はどこでしょう」と、声を掛けますと、お婆さんはげげんそうに、しよぼしよぼした目で、浦島の顔をながめながら、「……へえ、浦島太郎。そんな人は聞いたことがありませんよ」と言いました。浦島は躍起となつて、「……そんなはずはありません。確かにこの辺に住んでいたのです」と言いました。そう言われて、お婆さんは、「……はてね」と、首を傾げながら、杖で背伸びしてしばらく考え込んでいましたが、やがてぼんと膝を叩いて、「……ああ、そうそう、浦島太郎さんと言つと、あれはもう三百年も前の人ですよ。何でも、わたしは子供の時分聞いた話に、昔、この水の江の浜に、浦島太郎という人があつて、ある日、舟に乗つて釣りに出たまま、帰つて来なくなりまして。多分、龍宮へでも行つたのだからということですよ。なにしろ大昔の話だからね」と、こう言つて、また腰をかがめて、よぼよぼ歩いて行つてしまいました。

九、衝撃の事実を聞いて、

浦島は、びつくりしてしまいました。「……はて、三百年、おかしなこともあるものだ。たつた三年竜宮にいたつもりなのに、それが三百年とは。すると竜宮の三年は、人間の三百年にあたるのかしらん。それでは家もなくなくなるはずだし、お父さんやお母さんがいらつしやらないのも不思議はない」。こう思うと、浦島は急に悲しくなつて、寂しくなつて、目の前が真つ暗になりました。今さらに竜宮が恋しくてたまらなくなりました。

しおしおとまた浜辺へ出て見ましたが、海の水は満々と湛えていて、どこが果てとも知れませんが、もう亀も出て来ませんから、どうして龍宮へ渡ろう手立てもありませんでした。その時、浦島はふと抱えていた玉手箱に気が付きました。「……そうだ。この箱を開けてみたらば、分かるかも知れない」と、こう思うと嬉しくなつて、浦島は、うっかり乙姫様に言われたことは忘れて、箱のふたを取りました。すると紫色の雲が中からむくむく立ち昇つて、それが顔にかかったかと思うと、すうつと消えて行つて箱の中には何にも残つ

ていませんでした。その代わり、何時の間にか顔じゆう皺になつて、手も足も縮こまつて、きれいな水際の水に映った影を見ると、髪も髭も真つ白なかわいいお爺さんになつていました。浦島は空になつた箱の中を覗いて、「……なるほど、乙姫様が人間の一番大事な宝を入れておくと仰つたあれは、人間の寿命だつたのだな」と、残念そうに呟きました。春の海はどこまでも遠く霞んでいました。何処からかいい声で舟唄を歌うのが、また聞こえて来ました。浦島は、ぼんやりと昔のことを思い出していました。(完)

*

*

金太郎

金太郎

一、金太郎の生い立ち

昔、金太郎という強い子供がありました。相模国足柄山の山奥に生まれて、お母さんの山うば（山に棲む母親）と一緒に暮らしていました。

金太郎は生まれた時からそれは力が強くて、もう七つ八つの頃には、石臼や粃糠の俵ぐらい、平気で持ち上げました。大抵の大人を相手に相撲を取っても負けませんでした。近所にもう相手がいなくなると詰まらなくなって、金太郎は、一日森の中を駆け回っていました。そしてお母さんにもらった大きなまさかりを担いで歩いて、やたらに大きな杉の木や松の木を切り倒しては、木こりの真似をして面白がっていました。

二、動物たちを家来に……

ある日、森の奥のずっと奥に入って、いつものように大きな木を切っていると、のっそり大きな熊が出て来ました。熊は目を光らせながら、「……誰だ、おれの森を荒らすのは」と言っ、飛びかかって来ました。すると金太郎は、「……何だ、熊のくせに。金太郎を知らないか」と言いながら、まさかりを放り出して、いきなり熊に組みつきました。そして足がらをかけて、どしんと地べたに投げつけました。熊は閉口（降参）して、両手をつけて謝って、金太郎の家来になりました。森の中で大将分の熊が閉口（降参）して金太郎の家来になったのを見て、そのあとから兎だの、猿だの、鹿だのがぞろぞろ付いて来て、「……金太郎さん、どうぞわたしも御家来にしてください」と言うので、金太郎は、「……よし、よし」と頷いて、みんな家来にしてやりました。

それから金太郎は、毎朝、お母さんにたくさんお結びを拵えてもらい、森の中へ出かけて行きました。金太郎が口笛を吹いて、「……さあ、みんな来い。みんな来い」と呼ぶと、熊を頭に、鹿や猿や兎がのそのそ出て来ました。金太郎は、この家来たちをお供に連れて、一日山の中を歩きまわりました。ある日、方々歩いて、やがてやわらかな草の生えている所へ来ると、みんなは足を出してそこへごろごろ寝転びました。日がいい心持ちに当たっていました。金太郎が、「……さあ、みんな相撲を取れ。ご褒美にはこのお結びをやるぞ」と言うと、熊がむくむくした手で地を掘って、土俵をこしらえました。

三、お互い相撲を取り合う

最初に、猿と兎が取り組んで、鹿が行司になりました。兎が猿のしっぽを掴まえて、土俵の外へ持ち出そうとすると、猿が悔しがって、むちやくちやに兎の長い耳を掴んでひっぱりましたから、兎は痛がつて手を離しました。それで勝負がつかなくなつて、どちらもご褒美がもらえませんでした。（それはお互い「禁じ手」を使ったからです。）

今度は、兎が行司になって、鹿と熊が取り組みましたが、鹿はすぐ角ごと熊にひっくり返されてしまいました。金太郎は、「……面白い、面白い」と言っ、手を叩きました。とうとう一番最後に金太郎が土俵の真ん中につつ立って、「……さあ、みんなかかって来

い」と言いながら、大手を拡げました。そこで兎と猿と鹿と一番最後に熊がかかつて行きました。片っぱしからころころ転がされてしまいました。「……何だ。弱虫だなあ。みんな一遍にかかつて来い」と、金太郎が言うのと、悔しがって、兎が足を持つやら猿が首に手をかけるやら、大騒ぎになりました。そして鹿が腰を押して熊が胸に組みついて、みんな総がかりでうんうん言って、金太郎を倒そうとしましたが、どうしても倒すことが出来ませんでした。金太郎は仕舞いにじれったくなつて、体を一振りうんと振りますと、兎も猿も鹿も熊もみんな一遍にごろごろごろごろ土俵の外に転げ出してしまいました。「……ああ、痛い。ああ、痛い」とみんな口々に言って、腰を摩つたり、肩を揉んだりしていましたが、金太郎は、「……さあ、おれに負けて可哀想だから、みんなに分てやろう」と言って、兎と猿と鹿と熊をまわりにぐるりと並べて、自分が真ん中に座って、お結びを分けてみんなで食べました。しばらくすると金太郎は、「……ああ、うまかった。さあ、もう帰ろう」と言って、またみんなを連れて帰っていきました。

四、その帰り道で、

さて、帰って行く道々も、森の中で駆けっこ競べをしたり、岩の上で鬼ごっこをしたりして遊び遊び行くうちに、大きな谷川のふちへ出ました。水はごうごうと音を立てて、激しい勢いで流れて行きますが、あいにく橋が架かっていませんでした。みんなは、「……どうしよう。あとへ引き返そうか」と言うのと、金太郎は、一人平気な顔をして、「……なあにいいよ」と言いながら、そこらを見まわすと、ちようど川の岸に二抱えもあるような大きな杉の木が立っていました。金太郎は、まさかりを放り出して、いきなり杉の木に両手をかけました。そして二、三度ぐんぐん押したと思うと、めりめりとひどい音がして、木は川の上にとっさり倒れかかって、立派な橋ができました。金太郎はまたまさかりを肩に担いで、先に立って渡っていきました。みんなは顔を見合せて、てんでんに、「……えらい力だなあ」と囁き合ひながら、付いて行きました。

五、一人の木こりの登場

その時、向こうの岩の上に木こりが一人隠れていて、この様子を見ていました。金太郎が無造作に大きな木を押し倒したのを見て、目を丸くしながら、「……どうも不思議な子供だな。どこの子供だろう」と独り言を言うのでした。そして立ち上がって、そつと金太郎のあとについて行きました。兎や熊と別れると、金太郎は一人で、また身軽にひよいひよいと谷を渡ったり、崖を伝わったりして、深い深い山奥の一軒家に入っていました。そこいらには白い雲がわき出していました。

木こりは、そのあとからやつと木の根をよじ（登つ）たり、岩角につかまったりして、ついでに行きました。やつと家の前まで来て、木こりが中を覗きますと、金太郎はいろりの前に座って、お母さんの山うばに、熊や鹿と相撲を取った話をせつせとしていました。お母さんも面白そうに、にこにこ笑って聞いていました。その時、木こりは、出し抜けに窓から首をぬつと出して、「……これこれ、坊や。今度はおじさんと相撲を取ろう」と言いながら、のこのこ入って行きました。そしていきなり金太郎の前に毛むくじやらかな手を出し

ました。山うばは、「おや」と思って不思議そうな顔付きをしましたけれど、金太郎は面白がって、「……ああ、取ろう」と、すぐむくむく肥った可愛らしい手を出しました。そこで二人は、しばらく真つ赤な顔をして押し合いました。そのうち、木こりはふいと、「……もう止そう。勝負がつかない」と言つて、手を引つ込めてしまいました。それから改めて座り直して、山うばに向かつて、丁寧にお辞儀をして、「……どうも、出し抜けに失礼しました。実はさつき坊ちゃん、谷川のそばで大きな杉の木を押し倒したところを見て、驚いてここまでついて来たのです。今また腕相撲を取つて、いよいよ大力なのに驚きました。どうしてどうしてこの子は今に偉い勇士になりますよ」と、こう言つて、今度は金太郎に向かつて、「……どうだね、坊やは都へ出てお侍にならないかい」と聞くと、金太郎は目をくりくりさせて、「……ああ、お侍になれるといいなあ」と言うのでした。

七、木こりは、実は……

この木こりと見せたのは、実は碓井貞光と言つて、その時分日本一の偉い大将で名高い源頼光の家来でした。そして御主人から強い侍を捜して来いという仰せを受けて、こんな風をして日本の国じゆうをあちこちと歩きまわっているのです。

山うばもそう聞くと、たいそう喜んで、「……実は、この子の亡くなりました父も、坂田という立派な氏を持った侍でございました。訳がございまして、この通り山の中に埋もれておりますもの、よい伝手さえあれば、いつか都へ出して侍にして、家の名を継がせてやりたいと思つておりました。そういうことでしたら、この通りの腕白者でございしますが、どうぞよろしくお願い申します」と、さも嬉しそうに言いました。

金太郎は、そばで二人の話を聞いて、「……嬉しいな、嬉しいな。おれはお侍になるんだ」と言つて、小踊りをしていました。そして、金太郎がいよいよ碓井貞光に連れられて都へ上るといふことを聞いて、熊も鹿も猿も兎もみんな連れ立ってお別れを言いに来ました。金太郎は、みんなの頭を代わりばんこに撫でてやつて、「……みんな仲よく遊んでおくれ」と言いました。みんなは、「……金太郎さんがいなくなつて寂しいなあ。早く偉い大将になつて、また顔を見せておくれよ」と言つて、名残り惜しそくに帰っていきました。金太郎はお母さんの前に手をついて、「……お母さん、では行つて参ります」と別れの挨拶をしてから、貞光のあとについて、得意らしく出て行きました。

七、その将来は……

それから幾日も幾日もかかつて、貞光は金太郎を連れて都へ帰りました。そして頼光のお屋敷へ行つて、「……足柄山の奥で、こんな子供を見つけて参りました」と、金太郎を頼光のお目にかかけました。「……ほう、これは珍しい、強そな子供だ」と頼光は言いながら、金太郎の頭をさすりました。「……だが金太郎という名は侍にはおかしい。父親が坂田というのなら、今から坂田金時と名乗るがいい」と言うのでした。

そこで金太郎は、坂田金時と名乗つて、頼光の家来になりました。そして大きくなると、偉いお侍になつて、渡辺綱、卜部季武、碓井貞光と一緒に、頼光の四天王と呼ばれるようになったのです。(完)

*

*

か
ち
か
ち
山

かちかち山

一、狸の悪戯

昔々、あるところにおじいさんとおばあさんがありました。おじいさんがいつも畑に出て働いていますと、裏の山から一疋の古狸が出てきて、おじいさんがせつかく丹精込めて拵えた畑のものを荒した上に、どンドン石ころや土塊などをおじいさんの後ろから投げつけました。おじいさんが怒って追っかけますと、すばやく逃げて行ってしまいますが、しばらくするとまたやって来て、相変わらず悪戯をするのでした。おじいさんも困りきって、罾を仕掛けて置きますと、ある日、狸はどうとうその罾に掛かりました。

おじいさんは、躍り上って喜びました。「……ああいい気味だ。とうとう捕まえてやった」と、こう言つて、狸の四つ足を縛つて、家へ担いで帰りました。そして天井の梁にぶら下げて、おばあさんに、「……逃さないように番をして、晩にわたしが帰るまでに狸汁を拵えておいておくれ」と言い残して、また畑へと出て行きました。

二、狸の悪知恵で

狸が縛られてぶら下げられている下で、おばあさんは臼を出して、とんとん麦をついでいました。そのうち、「……ああくたびれた」と、おばあさんは言つて、汗を拭きました。するとその時まで、大人しくぶら下がっていた狸が、上から声を掛けました。「……もしもし、おばあさん、くたびれたら少しお手伝いをいたしましょう。その代わり、この縄を解いて下さい」と。すると、「……どうしてどうして、お前なんぞに手伝ってもらえるものか。縄を解いてやったら、手伝うどころか、すぐ逃げて行ってしまつたら」と言うので、「……いいえ、もうこうして捕まったのですもの、今さら逃げるものですか。まあ、試しに下ろしてごらん下さい」と言うのでした。

あんまりしつこく、殊勝らしく頼むものですから、おばあさんもうかうか狸の言うことを本当にして、縄を解いて下ろしてやりました。すると狸は、「……やれやれ」と縛られた手足をさすりました。そして、「……どれ、わたしがついて上げましょう」と言いながら、おばあさんのきねを取り上げて、麦をつく振りをして、いきなりおばあさんの脳天からきねを打ち下ろしますと、「きやつ」という間もなく、おばあさんは目をまわして、倒れて死んでしまいました。

狸は、さつそくおばあさんをお料理して、狸汁の代わりにばばあ汁を拵えて、自分はおばあさんに化けて、澄ました顔をして炉の前に座つて、おじいさんの帰りを待ち受けていました。——夕方になって、何にも知らないおじいさんは、「……晩は狸汁が食べられるな」と思つて、一人でニコニコしながら急いで家へ帰って来ました。すると狸のおばあさんはさも待ちかねたというように、「……おや、おじいさん、お帰りなさい。さつきから狸汁を拵えて待っていましたよ」と言うのでした。「……おやおや、そうか。それは有り難いな」と言いながら、すぐにお膳の前に座りました。そして、狸のおばあさんのお給仕で、「……これは美味しい、美味しい」と言つて、舌つづみを打つて、ばばあ汁のお替わりをして、夢中になって食べていました。それを見てた狸のおばあさんは、思

わず「ふふふ」と笑う拍子に狸の正体を現わしました。

三、本当のことを知って

さて、狸は、「……ばばあ食ったじじい、流しの下の骨を見る」と言いながら、大きなしっぽを出して、裏口からついと逃げて行きました。おじいさんは、びっくりして、がっくりと腰を抜かしてしまいました。そして、流しの下のおばあさんの骨を抱えて、おいおい泣いていました。すると、「……おじいさん、おじいさん、どうしたのです」と言っていて、これも裏の山にいる白うさぎが入って来ました。「……ああ、うさぎさんか。よく来ておくれだ。まあ聞いておくれ。ひどい目に遇ったよ」と、おじいさんは言っていて、これこいういうわけだとすっかり話をしました。うさぎはたいそう気の毒がって、「……まあ、それはとんだことでしたね。けれど敵はわたしがきつと取って上げますから、安心していらつしやい」と頼もしそうに言うのでした。おじいさんは、うれし涙をこぼしながら、「……ああ、どうか頼みますよ。ほんとうにわたしは悔しくてたまらない」と言うので、「……大丈夫。明日はさっそく狸を誘い出して、ひどい目に遇わせてやります。しばらく待っていらつしやい」と、うさぎは言っていて、帰って行くのでした。

四、狸はうさぎに騙されて

さて、狸は、おじいさんの家を逃げ出してから、何だか恐いものですから、どこへも出ずに穴にばかり引込んでいました。——すると、ある日、うさぎは釜を腰に差して、わざと狸の隠れている穴のそばへ行つて、釜を出してしきりに芝を刈っていました。そして芝を刈りながら、袋へ入れて持って来たかち栗を出して、ぱりぱり食べました。すると狸は、その音を聞きつけて、穴の中からのそのそ這い出して来ました。「……うさぎさん、うさぎさん。何を美味しそうに食べているのだね」と聞くので、「……栗の実さ」と答えると、「……少しわたしに出来ないか」と言うので、「……上げるから、この芝を半分向こうの山までしょって行っておくれよ」と頼むのでした。狸は、栗が欲しいものですから、仕方なしに芝を背負って、先に立って歩き出しました。向こうの山まで行くと、狸はふり返って、「……うさぎさん、うさぎさん。かち栗をくれないか」と言うので、「……ああ、上げるよ、もう一つ向こうの山まで行ったら」と言うのでした。仕方がないので、また狸はずんずん先に立って歩いて行きました。やがて、もう一つ向こうの山まで行くと、狸はふり返って、「……うさぎさん、うさぎさん。かち栗をくれないか」とせがむと、「……ああ、上げるけれど、ついでにもう一つ向こうの山まで行っておくれよ。今度はきつと上げるから」と言うのでした。

五、狸の背中に火をつけて

仕方がないので、狸はまた先に立って、今度は何とも早く向こうの山まで行き着こうと思って、後ろもふり向かずにつせつせと歩いて行きました。うさぎはその暇に、懐から火打ち石を出して、「かちかち」と火を切りました。狸は変に思って、「……うさぎさん、

うさぎさん、かちかちいうのは何だろう」と聞くので、「……この山はかちかち山だからさ」と答えると、「……ああ、そうか」と言って、狸はまた歩き出しました。そのうちにうさぎの付けた火が、狸の背中の芝に移って、ぼうぼう燃え出しました。狸はまた変に思つて、「……うさぎさん、うさぎさん、ぼうぼういうのは何だろう」と聞くと、「……向こうの山はぼうぼう山だからさ」と答えると、「……ああ、そうか」と、狸が言ううちに、もう火はずんずん背中に燃え広がってしまいました。狸は、「……あつい、あつい、助けしてくれ」と叫びながら、夢中で駆け出しますと、山風が後ろからどつと吹きつけて、よい火が大きく燃えました。狸は、ひいひい泣き声を上げて、苦しがつて、転げまわつて、やつとのことで燃える芝をふり落して、穴の中に駆け込みました。うさぎはわざと大きな声で、「……やあ、大変。火事だ。火事だ」と言いながら帰って行きました。

六、火傷に唐辛子を塗りつける

その翌る日、うさぎはお味噌の中に唐辛子をすり込んで膏薬を拵えて、それを持って狸のところへお見舞いにやつて来ました。狸は背中じゆう大やけどをして、うんうん唸りながら、真つ暗な穴の中に転がっていました。「……狸さん、狸さん。本当に昨日はひどい目に遇つたねえ」と言つと、「……ああ、本当にひどい目に遇つたよ。この火傷はどうしたら治るだろう」と聞くので、「……うん、それでね、あんまり気の毒だから、わたしが火傷にいちばん利く膏薬を拵えて持つて来たのだよ」と言つと、「……そうかい。それは有り難いな。さっそく塗つてもらおうか」と言うのでした。

こう言つて、狸が火ぶくれになつて、赤肌にただれている背中を出しますと、うさぎはその上に唐辛子みそをとどこかまわすつてこて塗りつけました。すると背中はまた火が付いたように熱くなつて、「……痛い、痛い」と言いながら、狸は穴の中を転げまわつていました。うさぎはその様子を見てニコニコしながら、「……なあに狸さん、ぴりぴりするの初めのうちだけだよ。時期に治るから、少しの間我慢おし」と言つて帰って行きました。

七、今度は、海へと

それから四、五日経ちました。ある日、うさぎは、「……狸のやつどうしたろう。今度は一つ海に連れ出して、ひどい目に遇わせてやるう」と独り言を言つているところへ、ひよつこり狸が訪ねて来ました。「……おやおや、狸さん、もう火傷は治ったかい」と聞くと、「……ああ、お陰で大分良くなったよ」と答えるので、「……それはいいな。じゃあまたどこかへ出かけようか」と言つと、「……いやもう、山はこりこりだ」と言うのでした。そこで、「……それなら山はよして、今度は海へ行こうじゃないか、海はお魚が捕れるよ」と言つと、「……なるほど、海は面白そうだね」と言うのでした。

そこでうさぎと狸は連れだつて海へ出かけました。うさぎが木の舟を拵えますと、狸は羨ましがつて、真似をして土の舟を拵えました。舟が出来上がると、うさぎは木の舟に乗りました。狸は土の舟に乗りました。べつべつに舟を漕いで沖へ出ますと、「……いいお天気だねえ」と言つと、相手も、「……いい景色だねえ」とてんでんに言いながら、珍

しそうに海を眺めていましたが、うさぎは、「……ここらにはまだお魚はいないよ。もつと沖の方まで漕いで行こう。さあ、どっちが早いか競争しよう」と言うので、狸は、「……よし、よし、それは面白そうだ」と言うのでした。

そこで、一、二、三と掛け声と同時に、漕ぎ出しました。うさぎはかんかん船端を叩いて、「……どうだ、木の舟は軽くなって速かろう」と言いました。すると狸も負けん気になって、船端をこんこん叩いて、「……なあに、土の舟は重くなって丈夫だ」と言うのでした。そのうちにだんだん水がしみて土の舟は崩れ出しました。「……やあ、大変。舟が壊れて来た」と、狸はびびりくりして、大騒ぎを始めました。「……ああ、沈む、沈む、助けてくれ！」と叫ぶのでした。

うさぎは、狸の慌てる様子を面白そうに眺めながら、「……さまを見る。おばあさんを騙して殺して、おじいさんにばあ汁を食わせた報いだ」と言うのと、狸はもうそんなことはいらないから助けてくれと言って、うさぎを拝みました。そのうちどんだん舟は崩れて、あつぷあつぷという間もなく、狸は、とうとう沈んでしまいました。(完)

*

*

さるかに合戦

さるかに合戦

一、お結びと柿の種との交換

昔々、あるところに猿と蟹がありました。ある日、猿と蟹は、お天気がいいので、連れ立って遊びに出ました。その途中、山道で猿は「柿の種」を拾いました。またしばらく行くと、今度は、川のそばで蟹は「お結び」を拾いました。蟹は、「……こんないいものを拾った」と言つて、猿に見せると、猿も、「……わたしだつてこんないいものを拾つた」と言つて、柿の種を見せました。が、猿はほんとうはお結びが欲しくてならなかったので、蟹に向かって、「……どうだ、この柿の種と取り替へつこをしないか」と言うのでした。すると、「……でもお結びの方が大きいじゃないか」と蟹が言うのと、「……でも柿の種は、蒔けば芽が出て木になって、美味しい実が成るよ」と、猿は言うのでした。そう言われると、蟹も種が欲しくなつて、「……それもそうだなあ」と言いながら、とうとう大きなお結びと小さな柿の種とを取り替へつこしてしまいました。猿はうまく蟹を騙してお結びをもらうと、見せびらかしながら美味しそうにむしゃむしゃ食べて、「……さようなら、蟹さん、ごちそうさま」と言つて、のそのそ自分の家へ帰っていきました。

二、柿の種をせっせと育てる

蟹は、柿の種をさつそくお庭に蒔きました。そして、「……早く芽を出せ、柿の種。出さぬと、鉢でちよん切るぞ」と言うのでした。すると、間もなく、可愛らしい芽がにょきんと出ました。蟹はその芽に向かって毎日、「……早く木になれば、柿の芽よ。ならぬと、鉢でちよん切るぞ」と言うのでした。すると、柿の芽はずん伸びて、大きな木になって、枝が出て、葉が茂つて、やがて花が咲きました。蟹は今度はその木に向かって毎日、「……早く実が成れ、柿の木よ。成らぬと、鉢でちよん切るぞ」と言うのでした。すると間もなく柿の木にはたくさんの実が成つて、ずんずん赤くなりました。それを下から蟹は見上げて、「……うまそうだなあ。早く一つ食べてみたいな」と思つて、手を伸ばしましたが、背が低くて届きません。今度は木の上に登ろうとしましたが、横ばいですから、いくら登つても登つても落ちてしまいます。とうとう蟹も諦めて、それでも毎日、悔しそうに下から柿をながめていました。

四、そこに猿がやつて来る

すると、ある日、猿が来て、鈴成りになつて柿を見上げて涎をたらしました。そしてこんな立派な実が成るなら、お結びと取り替へつこをするのじゃなかったかと思ひました。それを見て、蟹は、「……猿さん、ながめていないで、登つて取つてくれないか。お礼に柿を少し上げるよ」と言うのでした。猿は、「……しめた」と言わんばかりの顔をして、「……よしよし、取つて上げるから待つておいで」と言いながら、するすると木の上に登つて行きました。そして、枝と枝との間にゆっくり腰をかけて、まず一つ、うまそうな赤い柿をいいで、わざと「……これはどうも美味しい柿だなあ」と言い言い、むし

やむしや食べ始めました。蟹は、羨ましそうに下で眺めていましたが、「……おい、おい、自分ばかり食べないで、早くここへも放っておくれよ」と言うと、猿は、「……よし、よし」と言いながら、わざと青い柿をもちで放り出しました。蟹は、あわてて拾って食べてみると、それは渋くて口が曲がりそうでした。蟹は、「……これじゃ、こんな渋いのはだめだよ。もっと甘いのおくれよ」と言うと、猿は、「……よし、よし」と言いながら、もっと青いのもいで、放りました。蟹が、「……今度もやっぱ渋くってだめだ。ほんとうに甘いのおくれよ」と言うと、猿はうるさそうに、「……よし、そんならこれをやる」と言いながら、いちばん青い硬いのもいで、仰向いて待っている蟹の頭を目がけて力一杯投げつけると、蟹は、「あっ」と言ったなり、ひどく甲羅を打たれて、目をまわして死んでしまいました。猿は、「……ざまをみる」と言いながら、今度こそ、甘い柿を一人占めにして、お腹の破れるほどたくさん食べて、その上、両手に抱えきれないほど持って、後をも見ずにどンドン逃げて行ってしまいました。

五、子蟹が帰って来ると

猿が行ってしまった後へ、その時、ちようど裏の小川へ友だちと遊びに行っていた子蟹が帰って来ました。見ると柿の木の下に親蟹が甲羅を砕かれて死んでいます。子蟹はびっくりしておいおい泣き出しました。泣きながら、「……一体誰がこんな酷いことをしたのだろう」と思っよく見ますと、さつきまであれほど見事に成っていた柿がきれいに無くなって、青い青い渋柿ばかりが残っていました。「……じゃあ、猿のやつが殺して、柿を取って行ったのだな」と、蟹は悔しがつて、またおいおい泣き出しました。

すると、そこへ栗がぼんと跳ねて来て、「……蟹さん、蟹さん、なぜ泣くの」と聞きました。子蟹は、猿が親蟹を殺したから、敵を討ちたいと言うと、栗は、「……憎い猿だ。よしよし、おじさんが敵を取ってやるから、お泣きでない」と言うのでした。

それでも子蟹は泣いていると、今度は蜂がぶんと唸って来て、「……蟹さん、蟹さん、なぜ泣くの」と聞きました。子蟹は、猿が親蟹を殺したから、敵を討ちたいと言うと、蜂も、「……憎い猿だ。よしよし、おじさんが敵を取ってやるから、お泣きでない」と言うのでした。

それでも子蟹がまだ泣いていると、今度は昆布がのろのろ滑って来て、「……蟹さん、蟹さん、なぜ泣くの」と聞きました。子蟹は、猿が親蟹を殺したから、敵を討ちたいと言うと、昆布も、「……憎い猿だ。よしよし、おじさんが敵を取ってやるから、お泣きでない」と言うのでした。それでも子蟹がまだ泣いていると、今度は白がころころ転がって来て、「……蟹さん、蟹さん、なぜ泣くの」と聞きました。子蟹は、猿が親蟹を殺したから、敵を討ちたいと言うので、白も、「……憎い猿だ。よしよし、おじさんが敵を取ってやるから、お泣きでない」と言うのでした。

子蟹は、これですっかり泣き止みました。栗と蜂と昆布と白とは、みんな寄って、敵討ちの相談を始めました。

六、猿の家の中で、

相談がやつと纏まると、臼と昆布と蜂と栗は、子蟹を連れて猿の家へと出かけて行きました。猿はたんと柿を食べて、お腹がきつくなつて、お腹ごなしに山へでも遊びに行ったのだからと見えて、家にはいませんでした。「……丁度いい。この間にみんなで家の中に隠れて待つていよう」と、臼が言うのと、みんなは賛成して、一番に栗が、「……わたしはここに隠れよう」と言つて、炬の灰の中にもぐり込みました。「……わたしはここだよ」と言いながら、蜂は水瓶の陰に隠れました。「……わたしはここさ」と、昆布は敷居の上に長々と寝そべりました。「……じゃあ、わたしはここに乗つていよう」と臼は言つて、鴨居の上に這い上がりました。

夕方になつて、猿は草臥れて、外から帰つて来ました。そして炬ばたにどつかり座り込んで、「……ああ、喉が渴いた」と言いながら、いきなりやかんに手をかけると、灰の中に隠れていた栗がぼんと跳ね出して、飛び上がつて、猿の鼻面を力まかせに蹴りつけました。「……熱い」と、猿は叫んで慌てて鼻面を押さえて、台所へ駆け出しました。そして火傷を冷やそうと思つて、水瓶の上に顔を出しますと、陰から蜂がぶんと飛び出して、猿の目の上をいやというほど刺しました。「……痛い」と、猿は叫んで、また慌てて表へ逃げ出しました。逃げ出す拍子に、敷居の上に寝ていた昆布でつるりと滑つて、腹んばいに倒れました。その上に臼が、どさりと転げ落ちて、うんとこしよと重しになつてしまいました。

猿は、赤い顔をありつたけ赤くして苦しがつて、うんうん唸りながら、手足をばたばたやっていました。その時、お庭の隅から子蟹がちよろちよろ這い出してきて、「……親の敵、覚えたか」と言いながら、鉢を振り上げて、猿の首をちよきんと鉢で挟んでしまいました。(完)

*

*

おわりに

舌切りすずめ

一、雀が洗濯用の糊を……

昔々、あるところにおじいさんとおばあさんがありました。子供がいけないのですから、おじいさんは雀の子を一羽、大事にして、籠に入れて飼っておりました。

ある日、おじいさんは、いつものように山へ芝刈りに行って、おばあさんは、井戸端で洗濯をしていました。その洗濯に使う糊をおばあさんが台所へ忘れていった留守に、雀の子がちよろちよろ籠から歩き出して、糊を残らず舐めてしまいました。

おばあさんは、糊を取りに帰って来ると、お皿の中にはきれいに糊がありませんでした。その糊は、みんな雀が舐めてしまったことが分かること、意地の悪いおばあさんは、大變に怒って、可哀想に小さな雀を捕まえて、無理に口を開かせながら、「……この舌がそんな悪さをしたのか」と言つて、鋏で舌をちよん切つてしまいました。そして、「……さあ、どこへでも出ていけ」と言つて放しました。雀は悲しそうな声で、「……痛い、痛い」と鳴きながら、飛んで行きました。

二、山から帰つて来ると

夕方になつて、おじいさんは、芝を背負つて山から帰つて来て、「……ああ草臥れた、雀もお腹が空いたろう。さあさあ、餌をやりましょう」と言い言い、籠の前へ行つてみると、中には雀はいませんでした。おじいさんは、驚いて、「……おばあさん、おばあさん、雀はどこへ行つたろう」と聞くと、おばあさんは、「……雀ですか、あれはわたしの大事な糊を舐めたから、舌を切つて追い出してしまいましたよ」と、平気な顔をして言いました。「……まあ、可哀想に。酷いことをするなあ」と、おじいさんは言つて、がっかりした顔をしていました。

三、雀を探しに行く

おじいさんは、雀が舌を切られて何所へ行ったか心配でたまりませんので、翌る日は、夜が開けると、さっそく出掛けて行きました。おじいさんは、道々、杖をついて、「……舌切りすずめ、お宿はどこだ、チュウ、チュウ、チュウ」と呼びながら、あてもなく尋ねて歩きました。野を越えて、山を越えて、また野を越えて、山を越えて、大きな藪のある所へ出ました。すると藪の中から、「……舌切りすずめ、お宿はどこだ、チュウ、チュウ、チュウ」という声が聞こえました。おじいさんは、喜んで、声のする方へ歩いて行くと、やがて、藪の陰に可愛い赤いお家が見えて、舌を切られた雀が門を開けて、お迎えに出ていました。「……まあ、おじいさん、よくいらつしやいました」と言うので、「……おお、おお、無事でいたかい。あんまりお前が恋しいので、尋ねて来ましたよ」と言うのと、「……まあ、それはそれは、有り難うございました。さあ、どうぞこちらへ」と、こう言つて、雀は、おじいさんの手を取つて、家の中へ案内しました。

四、雀の宿では、

雀は、おじいさんの前に手をついて、「……おじいさん、黙って大事な糊を舐めて、申し訳ございませんでした。それをお怒りもなさらずに、ようこそ尋ねて下さいました」と言うとおじいさんも、「……何のわしがいなかったばかりに、とんだ可哀想なことをしました。でも、こうしてまた会えたので、ほんとうに嬉しいよ」と言うのでした。

雀は、兄弟やお友だちの雀も残らず集めて、おじいさんの好きなものをたくさん御馳走をして、面白い歌に合わせて、みんなで雀踊りなどを踊って見せました。おじいさんはたいそう喜んで、家へ帰るのも忘れていました。そのうちにだんだん暗くなって来たものですから、おじいさんは、「……今日はお陰で一日面白かった。日の暮れないうちに、どれ、お暇しましょう」と言って、立ちかけました。雀は、「……まあ、こんなむさ苦しいところですけど、今夜はここへ泊まっていらいっしやいな」と言って、みんなで引き留めました。が、「……せつかくだが、おばあさんも待っているだろうから、今日は帰ることにしましょう。また度々来ますよ」と言うのでした。

五、帰りにお土産を……

すると、雀は、「……それは残念でございますこと、ではお土産を差し上げますから、しばらくお待ち下さいまし」と言って、雀は、奥からつづらを二つ持って来ました。そして、「……おじいさん、重いつづらに軽いつづらです。どちらでもよろしい方をお持ち下さい」と言うのでした。「……どうも御馳走になった上、お土産までもらっては済まないが、せつかくだからもらって帰りましょう。だが、わしは年を取っているし、道も遠いから、軽い方をもらって行くことにしますよ」と、こう言っておじいさんは、軽いつづらを背負わせてもらって、「……じゃあ、さようなら。また来ますよ」と言くと、「……お待ち申しております。どうか気をつけてお帰り下さいまし」と言って、雀は、門口までおじいさんを送って出ました。

六、軽いつづらの中身

日が暮てもおじいさんがなかなか戻らないので、おばあさんは、「……どこへ出かけたのだろう」とぶつぶつ言っているところへ、お土産のつづらを背負って、おじいさんが帰って来ました。「……おじいさん、今頃まで何所を何をしていたんですね」と聞くと、「……まあ、そんなにお怒りでないよ。今日は雀のお宿へ尋ねて行って、たくさん御馳走になったり、雀踊りを見せてもらったりした上に、この通り立派なお土産をもらったのだよ」と、こう言って、つづらを下ろすと、おばあさんは急にニコニコしながら、「……まあ、それはようございましたねえ。一体、何が入っているのでしょうか」と言って、さつそくつづらの蓋を開けますと、中から目の覚めるような金銀珊瑚や宝珠の玉が出てきました。それを見ると、おじいさんは、得意らしい顔をしてこう言うのでした。

「……何ね、雀は重いつづらと軽いつづらと二つ出して、どちらがいいと言うから、わしは年は取っているし、道も遠いから、軽いつづらにしようと言ってもらって来たのだ

が、こんなにいいものが入っているとは思わなかった」と言うと、おばあさんは、急にまた膨れつ面をして、「……馬鹿なおじいさん。なぜ重い方をもらって来なかったのです。その方がきつとたくさんいいものが入っていたでしょうに」と言うと、「……まあ、そう欲張るものではないよ。これだけいいものが入っていれば、たくさんではないか」と言うと、「……どうしてたくさんなものですか。よしよし、これから行って、わたしが重いつづらの方ももらって来ます」と言って、おじいさんが止めるのも聞かず、翌る日の朝になるまで待ちきれずに、すぐに家を飛び出しました。……

七、おばあさんも雀の宿へ

もう外は真つ暗になっていましたが、おばあさんは欲張りの一心でむちやくちやに杖をつき立てながら、「……舌切りすずめ、お宿はどこだ、チュウ、チュウ、チュウ」と言い尋ねて行きました。野を越え、山を越えて、また野を越えて、山を越えて、大きな竹藪のある所へ来ると、藪の中から、「……舌切りすずめ、お宿はどこだ、チュウ、チュウ、チュウ」という声がしました。おばあさんは、「しめた」と思っ、声のする方へ歩いて行くと、舌を切られた雀が今度も門を開けて出て来ました。そして、やさしく、「……まあ、おばあさんでしたか。よくいらつしやいました」と言っ、家の中へ案内をしました。そして、「……さあ、どうぞお上がり下さいませ」と、おばあさんの手を取っ、お座敷へ上げようとしたが、おばあさんは、何だか忙しそうにきよるきよる見まわしてばかりいて、落ち着いて座ろうともしませんでした。「……いいえ、お前さんの無事な顔を見ればそれで用は済んだのだから、もう構っ、おくれでない。それより早くお土産をもらっ、お暇しましょう」と、いきなりお土産の催促をされたので、雀はまあ欲の深いおばあさんだと呆れてしまいました。おばあさんは、平気な顔で、「……さあ、早くして下さいよ」と、じれったそうに言うものだから、「……はい、はい、それではしばらくお待ち下さいませ。今お土産を持っ、参りますから」と言っ、奥からつづらを二つ出して来ました。「……さあ、それでは重い方と軽い方と二つありますから、どちらでもよろしい方をお持ち下さい」と言っ、「……それはむろん、重い方をもらっ、行きますよ」と言っ、おばあさんは、重いつづらを背中に背負い上げて挨拶もそこそこに出て行きました。

八、重いつづらの中身

おばあさんは、重いつづらを首尾よくもらったものの、それでなくても重いつづらを背負っ、歩いて行くうちに、どんどんどんどん重くなっ、さすがに強情なおばあさんも、もう肩が抜けて腰の骨が折れそうになりました。それでも、「……重いだけに宝が余計入っているのだから、本当に楽しみだ。一体どんなものが入っているのだろう。ここらでちよいと一休みして、試しに少し開けてみよう」と、こう独り言を言っながら、道端の石の上に、「……どつこいしよ」と腰をかけてつづらを下し、急いで蓋を開けてみました。するとどうでしょう、中に目の眩むような金銀珊瑚と思っの外、三つ目小僧だの、一つ目小僧だの、ガマ入道だの、いろいろなお化けがによるによるに飛び出して、「……この欲ばり婆め」と言っながら、恐い目をして睨めつけるやら、気味の悪い舌を出

して顔を舐めるやらするので、もうおばあさんは、生きた心地はしませんでした。「……大変だ、大変だ。助けてくれ」と、おばあさんは、金切り声を上げて、「生懸命逃げ出した。そしてやつとのもので、半分死んだように真っ青になって、家の中に駆け込むと、おじいさんは、びっくりして、「……どうした、どうした」と言いました。おばあさんは、これこれの目に遇ったと話をし、「……ああ、もう、こりこりだ」と言うのです。すると、おじいさんは、気の毒そうに、「……やれやれ、それは酷い目にあつたな。だからあんまり無慈悲なことをしたり、あんまり欲張ったりするものではない」と言うのです。

(完)

*

*

アノチノチノチ

こぶとり爺さん

一、突然、山で嵐に遭って、

昔々、あるところに一人のおじいさんがありました。右の頬にぶらぶら大きな瘤をぶら下げて、始終それを邪魔そうにしています。

ある日、おじいさんは、山へ木を切りに行きました。俄にひどい大嵐になって、稲光りがびかびか光って、ごろごろ雷が鳴り出しました。そのうち雨がざあざあ降って来て、家へ帰るにも帰れなくなり、どうしようかと思つて見回しますと、そこに大きな木の洞(穴)を見つけてました。仕方がないので、その木の洞(穴)の中に入って、雨の小やみになるのを待っているうちに、いつか日はどつぷり暮れてしまいました。

深い山の中には、もう木こりの木を切る音もしません。木の洞(穴)の外は、一面真っ暗闇の中に凄まじい嵐が唸り声を立てて通つて行くだけです。おじいさんは、恐くて、恐くてたまらないので、夜通し目も合わず(上下の脛も合わず)に、洞(穴)の中に小さくなっております。

二、高い山から大勢の者たちが、

夜中になって、雨がだんだん小降りになり、やがて嵐がぱったりと止むと、遙か高い山の上から、何だか大勢ががやがやと騒ぎながら下へ下りて来る声がありました。

おじいさんは、今まで一人ぼっちで寂しくつてたまらなかつたところですから、声を聞くとやつと生き返つたような気がしました。「……やれやれ、お連れが出来て有り難い」と言いながら、そつと木の洞(穴)の中から顔を出して覗いてみると、まあどうでしょう、それは人ではなくって、不思議な化け物たちが何十人となくぞろぞろ出て来るのです。青い着物を着た赤鬼もいました。赤い着物を着た黒鬼もいました。それが山猫の目のようにきらきら光る明りを先に立てて、どやどや下りて来るのです。

おじいさんは、肝をつぶして、再び、木の洞(穴)の中へ首を引込めてしまいました。そしてぶるぶる震えながら、小さくなって息を殺していました。やがて、鬼どもは、おじいさんの居る洞(穴)の前まで来ると、がやがや言いながら、みんなそこに立ち止まってしまうました。おじいさんは、「……おやおや」と思いながら、いよいよ小さくなっていくと、そのうちのお頭らしいのが真ん中に座つて、その右と左へ外の鬼たちがずらりと二側に並びました。よく見ると目の一つしかないのや、口のまるでないのや、鼻の欠けたのや、それはそれは何とも言えない気味の悪い顔をした、いろいろな化け物たちが押しくちくちくしておりました。

三、大勢の鬼たちは酒盛りを

そのうちお酒が出ますと、みんなお互いに土器(素焼き)の杯を受けたり、差ししたり、まるで人間のする通りの楽しそうな酒盛りが始まりました。そして、杯の数がだんだん重なるうちに、お頭らしい鬼は、誰よりも余計に酔つて、さも面白そうに笑い崩れていま

した。すると下座の方から、一人の若い鬼が立って来て、お三方の上に食べ物載せて、恐る恐るお頭の鬼の前へ持つて出ました。そして何かわけの分らないことをしきりに言っているようです。お頭の鬼も杯を左の手に持つて、面白そうに笑いながら聞いています。その様子は少しも人間と違つたところはありませぬ。

やがて、お頭は、「……さあ、誰か歌を歌う者はないか。踊りを踊る者はないか」と言つて、そこらを見回しました。すると、お頭のそばに座つていた鬼が、出し抜けに大きな声で歌を歌い出しました。するとさっきの若い鬼も、すその方から前へ飛び出して来て、さんざん踊りを踊つて引つ込みました。それから代わる代わる下座の方から、一人一人違つた鬼が立つて来て、同じように踊りを踊りました。中には上手に踊つて褒められる者もあれば、不器用な踊り方をして、みんなに笑われる者もありました。踊りが済むたんに、みんなはぱちぱち手を叩いて、「……よいよい」と囃しました。

四、連れられて踊り出す

お頭の鬼は、その時、さも愉快そうに高笑いをして、「……あつは、あつは。面白い、面白い。今夜のような愉快な宴会は初めてだ。だがついでに誰かもつと珍しい踊りを踊つて見せる者はないか」と言うのでした。おじいさんは、さつきから木の洞(穴)の中で体を屈めながら、それでも恐いもの見たさに、首だけ伸ばして外の様子を覗いていました。そのうちに、本来ひょうきんなおじいさんのことですから、いつか恐いのも何も忘れてしまつて、見世物でも見ている気で、面白がつて鬼の踊りを見物していました。そうするうちに、自分もだんだん浮かれ出してきて、今の頭の鬼の言つた言葉が耳に入ると、自分も一つ飛び出して、踊りを踊つてみたくなりました。

しかし、うっかり飛び出していつて、一口にあんぐりやられては大変だと一度は思い返して、一生懸命に我慢していましたが、そのうち鬼どもが面白そうに手を叩いて、拍子を取り出すと、もうたまらなくなつて、「……ええ、かまうものか。出て踊つてやれ。食われて死んだらそれまでだ」とすつかり度胸を決めて、腰に木こりの斧を差して、烏帽子をずるずるに鼻の頭まで被つたまま、「……よう、こりやこりや」と言いながら、ひよっこりお頭の鬼の鼻先へ飛び出しました。あんまり出し抜けだものですから、今度はおじいさんよりは、鬼の方がびっくりしてしまいました。「……何だ。何だ。……人間の爺じやないか」と言いながら、みんなは総立ちになつて騒ぎました。

おじいさんは、もう澄ましたもので、一生懸命に伸びたり縮んだり、縦になり横になり、左へ行き右へ行き、くるりくるりと木鼠のように、元氣よく跳ね回りながら、「……よう、こりやこりや」と、お酒に酔つたような声を出して、さも面白そうに踊りました。すると、だんだんに鬼どももみんな釣り込まれて、一緒に手拍子を合わせながら、「……うまいぞ、うまいぞ」、「……しつかりやれ」と、こんなことを言いながら、はちきれそうな大笑いをして、おじいさんの踊りに夢中になつていました。

五、また、明日来るようにと

さて、踊りが済むと、お頭も感心して、おじいさんに、「……こんな面白い踊りは初め

てだ。爺さん、明日の晩も来て、踊りを踊るのだぞ」と言うので、おじいさんは、得意になって、「……へえへえ、お言い付けがなくともきつと参りますよ。今晩は何しろ急なことで、お稽古をして来ませんでした。明日の晩までには、ゆっくりおさらいをして参りましょう」と、こう言うと、その時、右手の三番目に座っていた鬼が口を出して、「……いいや、ああは言っても、その場になると横着を決めて出てこないかも知れません。約束を違えさせないために、何か質に取っておいてはどうでしょう」と言うのでした。お頭も、「……なるほどそれはいい考えだ」と頷きました。「……それでは何がいいだろう。何をとり上げておいたものだろう」と、鬼どもは、わいわい相談を始めました。「……烏帽子がいい」という考えもありました。「……斧はどうだ」という者もありました。

お頭は、みんなの騒ぐのを止めて、「……いや、何よりも一番あの爺さんの頬の瘤を取るのがいいだろう。瘤は福のあるものだから、爺さんの一番大事なものに違いない」と言うのでした。おじいさんは、心の中では、「しめた」と思いながら、わざとびっくりした風をして、「……おやおや、とんでもないことを仰います。目玉を抜かれましても、鼻を切られましても、この瘤を取ることはどうかご勘弁下さいまし。長年の間、わたくしが宝のようにしてぶら下げている、大事な大事な瘤でございませうから、これを取り上げられましては、ほんとうに困ってしまいます」と言うのでした。

六、鬼に瘤を取られて

鬼のお頭は、これを聞くと、「……それ見ろ。あの通り惜しがっている瘤だ。あれに限る、取り上げておけ」と言うのでした。手下の鬼はすぐそばへ寄ってきて、「……それ、取るぞ」と言いながら、ぼきりと瘤をねじ切ってしまった。でも少しも痛くはありませんでした。丁度、その時、夜が明けて、鴉がカアカア鳴きました。「……やあ、大変だ」と、鬼どもはびっくりして、立ち上がりました。「……明日の晩はきつと来い、瘤を返してやるから」と、こう言いながら、みんな慌ててどこかへ消えていきました。

おじいさんは、その後で、そつと顔を撫でてみました。そうすると、長年、邪魔にしていた大きな瘤がきれいに無くなって、後は拭いて取ったようにつるつるしていました。「……これは有り難い。不思議なこともあるものだ」と、おじいさんは嬉しくてたまらないので、早くおばあさんに見せて喜ばしてやろうと、首を振り振り急いで家まで駆けて帰りました。

おばあさんは、おじいさんの瘤がきれいに取れているのでびっくりして、「……おや、瘤をどこへやったのです」と聞くと、おじいさんは、これこれこういうわけで鬼頭が取って行ったのだと言うと、おばあさんは、「……まあ、まあ」と言って、目を丸くしておりました。

七、話を聞いた隣りのおじいさんは、

さて、このお隣りの家にも、これは左の頬に、やはり同じような瘤のあるおじいさんがありました。おじいさんの瘤のいつの間にか無くなったのを見て、不思議そうに、「……おじいさん、おじいさん、あなたの瘤はどこへ行きました。誰か上手なお医者様に切

ってもらったのですか。どこだかそのお医者様の家を教えて下さい。わしも行って取ってもらいましょう」と、羨ましそうに尋ねると、おじいさんは、「……なあに、これはお医者様に切ってもらったものではありません。昨夜、山の中で鬼が取って行ったのです」と言うとお隣りのおじいさんは、膝を乗り出して、「……それは一体どういうわけです」と、びっくりした顔をするのでした。

そこでおじいさんは、こういうわけで踊りを踊ったら、後で質に取られたのだと、詳しく話をしました。お隣りのおじいさんは、「……これは、好事を聞いた。ではわしもさっそく行って踊りを踊りましょう。おじいさん、その鬼の来る所がどこだか教えてください」と言うので、「……ああ、いいとも」と、おじいさんは言って、詳しく道を教えてやりました。

八、すぐに山へ出かけて行くと

おじいさんは、大層喜んで、あたふた山へ出て行きました。そして教わった木の洞(穴)の中へ入って、こわごわ鬼の来るのを待っていました。——なるほど、話に聞いた通り、夜中になると、何十人となく青い着物を着た赤鬼や、赤い着物を着た黒鬼が、貂(動物)の目のようにきらきら光る明りをつけて、がやがや言いながら出て来ました。

やがて、みんなは昨夜のように木の洞(穴)の前に座って、賑やかな酒盛りを始めました。その時、お頭の鬼が、「……どうした。昨夜の爺さんはまだ来ないか」と言うので、「……どうした、爺、早く出てこい」と、手下の鬼どももわいわい言いました。お隣りのおじいさんは、それを聞いて、「……ここだ」と思って、こわごわ木の洞(穴)の中から這い出しました。すると、一人の鬼が目ばかり見つけて、「……やあ、来ました、来ました」と言うとお頭は、大喜びで、「……おお、よく来た。さあ、こつちへ出て、踊れ、踊れ」と声を掛けるのでした。

九、鬼たちの前で踊ると

おじいさんは、おつかなびつくり立ち上がって、見るからに不器用な手つきをして、出鱈目な踊りを踊りました。お頭の鬼は不機嫌な顔をして、「……今日の踊りは何だ。まるでまずくって見ていられない。もういい。帰れ、帰れ。爺に昨夜の預かりものを返してやれ」とかんしやく声で言いました。すると、下座の方から若い鬼が預かっていた瘤を持って出て、「……それ、返すぞ」と喚きながら、瘤のない右の頬へぽんと叩き付けました。お隣りのおじいさんは、「……あつ」と叫びましたが、もう追っつきませんでした。両方の頬へ二つ瘤をぶら下げて、おいおい泣きながら、山を下って行きました。(完)

*

*

桃太郎

桃太郎

一、川から大きな桃が……

昔々、あるところにおじいさんとおばあさんがありました。毎日、おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。——ある日、おばあさんが川のそばでせつせと洗濯をしていますと、川上から大きな桃が一つ、「……ドンブラコッコ、ドンブラコ。ドンブラコッコ、ドンブラコ」と流れて来ました。「……おやおや、これは見事な桃だこと。おじいさんへのお土産にどれどれ家へ持って帰りましょう」と、おばあさんは、そう言いながら、腰をかがめて桃を取ろうとしましたが、遠くて手が届きません。おばあさんは、そこで、「……あつちの水は、辛いぞ。こつちの水は、甘いぞ。辛い水は、よけて来い。甘い水に寄って来い」と、歌いながら手を叩きました。すると、桃はまた、「……ドンブラコッコ、ドンブラコ。ドンブラコッコ、ドンブラコ」と言いながら、おばあさんの前へ流れて来ました。おばあさんは、ニコニコしながら、「……早くおじいさんと二人で分けて食べましょう」と言って、桃を拾い上げて、洗濯物と一緒にたらいの中に入れて、えつちら、おつちらと抱えて、お家へと帰りました。

二、大きな桃の中から

夕方になって、おじいさんは、やつと山から芝を背負って帰って来ました。「……おばあさん、今帰ったよ」と言うと、「……おや、おじいさん、お帰りなさい。待っています。たよ。さあ、早くお上がんなさい。いいものを上げますから」と言うと、「……それは有り難いな。何だね、そのいいものというの」と、こう言いながら、おじいさんは草鞋を脱いで、上上がりしました。その間に、おばあさんは戸棚の中からさつきの桃を重そうに抱えて来て、「……ほら、ごらんなさいこの桃を」と言うのでした。「……ほほう、これはこれは。どこからこんな見事な桃を買って来た」と聞くと、「……いいえ、買って来たのではありません。今日、川で拾って来たのですよ」と言うと、「……え、なに川で拾って来た。それはいいよ珍しい」と、こうおじいさんは言いながら、桃を両手にのせて、矯めつ眇めつ(いろいろな方向から)眺めていると、だしぬけに、桃はぼんと中から二つに割れて、「……おぎやあ、おぎやあ」という勇ましい産声を上げながら、可愛らしい赤ちゃんが元気よく飛び出しました。

三、名を「桃太郎」と名付ける

さて、おじいさんもおばあさんも、「……おやおや、まあ」とびつくりして、二人一緒に声を立てて、「……まあまあ、わたしたちが平生どうかして子供が一人欲しい、欲しいと言っていたものだから、きつと神様がこの子を授けて下さったに違いない」と、おじいさんもおばあさんも、嬉しがってこう言いました。

そこで慌てておじいさんがお湯を沸かすやら、おばあさんがむつき(おむつ)を揃えるやら、大騒ぎをして、赤ちゃんを抱き上げて、うぶ湯を使わせました。するといきなり、

「……うん」と言いながら、赤ちゃんは、抱いているおばあさんの手をはね除けました。「……おやおや、何という元気のいい子だろう」と、おじいさんとおばあさんは、こう言つて顔を見合せながら、「……あつは、あつは」と面白そうに笑いました。そして、桃の中から生まれた子だというので、この子に「桃太郎」という名を付けました。

四、桃太郎は成長して、

おじいさんとおばあさんは、それはそれは大事にして桃太郎を育てました。桃太郎はだんだん成長するに連れて、当たり前の子供に比べては、ずっと体も大きいし、力がばかに強くて、相撲を取っても近所の村という村で彼に敵うものは一人もいないくらいでしたが、そのくせ気立てはごく優しく、おじいさんとおばあさんによく孝行をしました。そして、桃太郎は、十五になりました。もうその時分には、日本の国じゆうで桃太郎ほど強いものはないようになりました。桃太郎は、どこか外国へ出かけて、腕一杯の力だめしをしてみたくになりました。すると、その頃、ほうぼう外国の島々をめぐる帰つて来た人があつて、いろいろ珍しい不思議な話をした末に、「……もう何年も何年も船を漕いで行くと、遠い遠い海の果てに、鬼が島という所があり、悪い鬼どもが厳めしいくろがねのお城の中に住んで、ほうぼうの国から掠め取った貴い宝物などを守っている」と言うのでした。

五、桃太郎は、鬼退治に

桃太郎は、この話を聞くと、その鬼が島へ行つてみたくなり、もう居ても立ってもいられなくなりました。そこで家へ帰るとさつそく、おじいさんの前へ出て、「……どうぞ、私にしばらくお暇を下さい」と言うのでした。すると、おじいさんは、びっくりして、「……お前どこへ行くのだ」と聞くので、「……鬼が島へ鬼征伐に行こうと思います」と、桃太郎は答えるのでした。「……ほう、それは勇ましいことだ。じゃあ行つておいで」と、おじいさんは言い、おばあさんも、「……まあ、そんな遠方へ行くのでは、さぞやお腹がお空きだろう。よしよし、お弁当を拵えて上げましょう」と言うのでした。

そこで、おじいさんとおばあさんは、お庭の真ん中にえんやら、えんやらと大きな臼を持ち出して、おじいさんがきねを取ると、おばあさんはこねどりをして、「……ぺんたらこつこ、ぺんたらこつこ。ぺんたらこつこ。ぺんたらこつこ」と、お弁当のきび団子をつき始めました。——きび団子がうまそうに出来上がると、桃太郎の支度もすっかり出来上がりました。桃太郎は、お侍の着るような陣羽織を着て、刀を腰に差して、きび団子の袋をぶら下げました。そして、桃の絵の描いてある軍扇を手に持って、「……では、おとうさんおかあさん、行つて参ります」と言つて、丁寧に頭を下げました。「……じゃあ、立派に鬼を退治して来るがいい」と、おじいさんは言い、おばあさんも、「……気をつけて、怪我をしないようにおしよ」と言うのでした。「……なに大丈夫です、日本一のきび団子を持つているから」と、桃太郎は言つて、「……では、ご機嫌よう」と、元気な声を残して出て行きました。おじいさんとおばあさんは、門の外に立って、いつまでもいつまでも見送っていました。

六、三匹の動物と出合う

桃太郎は、ずんずん歩いて行くと、大きな山の上に来ました。すると、草叢の中から、「……ワン、ワン」と声をかけながら、犬が一匹かけて来ました。桃太郎がふり返ると、犬は丁寧にお辞儀をして、「……桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでになります」と尋ねるのでした。そこで、「……鬼が島へ、鬼征伐に行くのだ」と言うと、「……お腰に下げたものは、何ですか」と聞くので、「……日本一のきび団子さ」と言うのでした。すると、「……」つ下さい、お供しましょう」と言うので、「……よし、やるから、ついて来い」と言い、犬は、きび団子を一つもらって、桃太郎の後からついて行きました。

*

山を下りてしばらく行くと、今度は森の中に入りました。すると木の上から、「……キヤツ、キヤツ」と叫びながら、猿が一匹、かけ下りて来ました。桃太郎がふり返ると、猿は丁寧にお辞儀をして、「……桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでになります」と尋ねるので、「……鬼が島へ鬼征伐に行くのだ」と言うと、「……お腰に下げたものは、何ですか」と聞くので、「……日本一のきび団子さ」と言うと、「……」つ下さい、お供しましょう」と言うのでした。「……よし、よし、やるから、ついて来い」と言うと、猿もきび団子を一つもらって、後からついて行きました。

*

山を下りて、森を抜けて、こんどは広い野原へ出ました。すると、空の上で、「……ケン、ケン」と鳴く声をして、雉子が一羽飛んで来ました。桃太郎がふり返ると、雉子は丁寧にお辞儀をして、「……桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでになります」と尋ねるのでした。そこで、「……鬼が島へ鬼征伐に行くのだ」と言うと、「……お腰に下げたものは、何ですか」と聞くので、「……日本一のきび団子さ」と言うと、「……」つ下さい、お供しましょう」と言うので、「……よし、よし、やるから、ついて来い」と言い、雉子もきび団子を一つもらって、桃太郎の後からついて行きました。

七、海を渡る

さて、犬と猿と雉子とこれで三匹までいい家来が出来たので、桃太郎はいよいよ勇み立って、また、ずんずん進んで行きますと、やがて広い海端に出ました。そこには、ちよいどいい具合に船が一艘つないであります。桃太郎と三匹の家来は、さっそく、この船に乗り込みますと、「……私が漕ぎ手になりました」と、こう言っただけは船を漕ぎ出し、また、「……私は舵を取りましょう」と、こう言っただけは猿が舵に座りました。そして、「……では、私は物見を努めましょう」と、こう言っただけは雉子が船先に立つのでした。

さて、穏やかないいお天気で、まっ青な海の上には、波一つ立ちませんでした。稲妻が走るようだとおもうか、矢を射るようだとおもうか、目のまわるような速さで船は走って行きました。ほんの一時も走ったと思う頃、船先に立って向こうを眺めていた雉子が、「……あれ、あれ、島が」と叫びながら、ぱたぱたと高い羽音をさせて、空に飛び上がったと思うと、すうつと真つ直ぐに風を切って、飛んで行きました。

八、鬼が島へと接近

さて、桃太郎もすぐ雉子の立つたあとから向こうを見ますと、なるほど、遠い遠い海の果てに、ぼんやり雲のような薄黒いものが見えました。船の進むに従って、雲のように見えていたものが、だんだんはつきりと島の形になって現われて来ました。「……ああ、見える、見える、鬼が島が見える」と、桃太郎がこう言うと、犬も猿も声を揃えて、「……万歳、万歳」と叫ぶのでした。

見る見る鬼が島が近くなつて、もう硬い岩で置んだ鬼のお城が見えました。厳めしいくろがねの門の前に見張りをしている鬼の兵隊の姿も見えました。そのお城のいちばん高い屋根の上に、雉子が止まってこちらを見ていました。こうして何年も何年も漕いで行かなければならないという鬼が島へ、ほんの目をつぶっている間に来たのでした。

九、門の中で鬼との戦い

桃太郎は、犬と猿を従えて、船からひらりと陸の上に跳び上がりました。見張りをしていた鬼の兵隊は、その見慣れない姿を見ると、びつくりして、慌てて門の中に逃げ込んで、くろがねの門を固く閉めてしまいました。その時、犬は門の前に立って、「……日本の桃太郎がお前たちを成敗しにやってくるのだぞ。開ける、開ける」と怒鳴りながら、ドン、ドン、扉を叩きました。鬼は、その声を聞くと、震え上がって、余計一生懸命に中から押さえていました。

すると、雉子が屋根の上から飛び下りて来て、門を押さえている鬼どもの目を突き回りましたから、鬼は閉口して逃げ出しました。その間に、猿がするすると高い岩壁をよじ登って行って、造作なく門の中から開けました。「……わあつ」と鬨の声を上げて、桃太郎の主従が、勇ましくお城の中に攻め込んで行きますと、鬼の大將も大勢の家来を引き連れて、一人一人、太い鉄の棒を振り回しながら、「……おう、おう」と叫んで、向かって来るのでした。

けれども、体が大きいばかりで、意気地のない鬼どもは、さんざん雉子に目を突かされた上に、今度は犬に向こう脛を食いつかれたと言つては、痛い、痛い逃げまわり、猿に顔を引っかかれたと言つては、おいおい泣き出して、鉄の棒も何も放り出して、降参してしまいました。最後まで我慢して戦っていた鬼の大將も、とうとう桃太郎に組み伏せられてしまいました。桃太郎は大きな鬼の背中に馬乗りになつて、「……どうだ、これでも降参しないか」と言つて、ぎゅうぎゅうぎゅうと押さえつけました。

鬼の大將は、桃太郎の大力で首を締められて、もう苦しくて堪りませんから、大粒の涙をぼろぼろ零しながら、「……降参します、降参します。命だけはお助け下さい。その代わりに宝物を残らず差し上げます」と、こう言つて、許してもらふのでした。

鬼の大將は、約束の通り、お城から隠れ蓑や隠れ笠また打ち出の小槌に如意宝珠、その他、珊瑚だの、大枚だの、瑠璃だの、世界で一番貴い宝物を山のように車に積んで出しました。

十、宝を積んで家へ帰る

桃太郎は、沢山の宝物を残らず積んで、三匹の家来と一緒にまた船に乗りました。帰りは、行きよりもまた一層船の走るのが速くて、間もなく日本の国に着きました。船が陸に着きますと、宝物を一杯に積んだ車を犬が先に立って引き出し、雉子が綱を引き、そして、猿が後を押しました。「……えんやらさ、えんやらさ」と、三匹は重そうにかけ声をかけかけ進んで行くのでした。

一方、家ではおじいさんとおばあさんが代わる代わる、「……もう桃太郎が帰りそうなものだが」と言い言い、首を伸ばして待っていました。そこへ桃太郎が三匹の立派な家来にぶんどりの宝物を引かせて、さも得意らしい様子をして帰って来ましたので、おじいさんもおばあさんも、目も鼻もなくして喜びました。「……えらいぞ、えらいぞ、それこそ日本一だ」と、おじいさんは言い、「……まあ、まあ、怪我がなくて何よりね」と、おばあさんもそう言つて喜びました。

桃太郎は、その時、犬と猿と雉子の方を向いて、「……どうだ。鬼征伐は面白かったな」と聞くと、犬は、ワン、ワンと嬉しそうに吠えながら前足で立ち、また、猿は、キヤツ、キヤツと笑いながら白い歯をむき出しにし、そして、雉子は、ケン、ケンと鳴きながら、くるくると宙返りをするのでした。

空は青々と晴れ上がった日本一晴れで、お庭には桜の花が咲き乱れていました。(完)

*

*

一寸法師

一寸法師

一、子供を明神様に祈願する

昔、摂津国の難波という所に、夫婦者が住んでおりました。子供が一人も無いものですから、住吉の明神様にお参りをしては、「……どうぞ子供を一人お授け下さいまし。それは指ほどの小さな子でも宜しゅうございますから」と一生懸命にお願い申しました。すると間もなく、お上さんは身持ちになりました。「……私どものお願いが叶ったのだ」と、夫婦は喜んで、子供の生まれる日を、今日か明日かと待ち構えていました。

やがて、お上さんは、小さな男の赤ちやんを生みましたが、それがまた小さいと言って、本当に指ほどの大きさがなく、「……指ほどの大きさの子供と申し上げたら、本当に指ほどの子供を明神様が下さった」と、夫婦は笑いながら、この子供を大事にして育てました。ところが、この子は、いつまで経ってもやはり指より大きくはなりませんでした。夫婦も諦めて、その子に「一寸法師」と名前を付けました。一寸法師は、五つになっても、七つになっても、そして、十を越えても、やはり少しも大きくはならないで、一寸法師のままでした。そして、一寸法師が往來を歩いていると、近所の子供たちが集まって来て、「……やあ、ちびが歩いてる」、「……踏み殺されるなよ」、「……摘まんで咬み潰してやるるか」、「……ちびやい。ちびやい」と口々に言つて、からかいました。一寸法師は、黙つてニコニコしていました。

二、京に上る決心をして

さて、一寸法師は、十六になりました。ある日、一寸法師は、お父さんとお母さんの前へ出て、「……どうか私にお暇を下さい」と言うのでした。それを聞いて、お父さんは、吃驚して、「……何故そんなことを言うのだ」と聞くと、一寸法師は、得意らしい顔をして、「……これから京都へ上ろうと思ひます」と言つと、お父さんは、「……京都へ上つてどうするつもりだ」と聞くと、「……京都は天子様のいらつしやる日本一の都ですし、面白い仕事がたくさんあります。私はそこへ行つて、運だめしをしてみようと思うのです」と言うのでした。それを聞くと、お父さんは、頷いて、「……よしよし、それなら行つておいで」と許して下さいました。

一寸法師は、大変喜んで、さつそく旅の支度にかかりました。まずお母さんに縫い針を一本頂いて、麦藁で「柄と鞆」を拵えて刀にして腰に差しました。それから新しいおわんの舟に、新しいお箸の櫂を添えて、住吉の浜から舟出をしました。お父さんとお母さんが浜辺まで見送りに立つて下さいました。「……お父さんお母さん、では行つて参ります」と、一寸法師は言いながら舟を漕ぎ出しますと、お父さんとお母さんは、「……どうか達者で、出世しておくれ」と言うので、「……ええ、きつと出世をいたします」と、一寸法師は答えるのでした。

三、川を上つて行くと

おわんの舟は、毎日少しづつ淀川を上って行きました。しかし、舟が小さいので、少し風が強く吹いたり、雨が降って水かさが増したりすると、舟はたびたびひっくり返りそうになりました。そういう時には、仕方がないので、石垣の間や、橋ぐいの陰に舟を止めて休みました。——こんな風にして、一月もかかって、やつとのことで、京都に近い鳥羽という所に着きました。鳥羽で舟から岸に上がると、もうすぐそこは京都の町でした。五条、四条、三条と、賑やかな町が続いて、引切りなしに馬や車を通して、おびたらしい人たちが出ていました。

四、大臣のお屋敷を訪ねる

さて、一寸法師は、「……成る程、京都とは日本一の都だけあって、賑やかなものだなあ」と、往來の人の下駄の齒をよけて歩きながら、しきりに感心していました。そして、三条まで来ると、たくさん立派なお屋敷が立ち並んだ中に、一番目にたつて立派な門構えのお屋敷がありました。一寸法師は、「……何でも出世するには、まず誰か偉い人の家来になって、それから段々に仕上げなければならぬ。これこそ一番偉い人のお屋敷に違いない」と思って、のこのこ門の中に入って行きました。広い砂利道をさんざん歩いて、大きな玄関の前に立ちました。なるほどここは三条の宰相殿と言つて、羽ぶりのいい大臣のお屋敷でした。

その時、一寸法師は、有りつ丈の大きな声で、「……ごめん下さい」と怒鳴りました。でも聞こえないとみえて、誰も出て来る者がないので、今度は一層大きな声を出して、「……ごめん下さい」と怒鳴りました。三度目に、一寸法師が、「……ごめん下さい」と怒鳴つた時、丁度、何処かへお出ましになるつもりで玄関までおいでになった宰相殿が、その声を聞きつけて、出てごらんになりました。しかし、誰も玄関には居ませんでした。不思議に思つて、そこらをお見回しになると、靴ぬぎに揃えてある足駄の陰に、豆粒のような男が一人、反り身になって、つつ立っていました。宰相殿は、びつくりして、「……お前か、今呼んだのは」と聞くと、「……はい、私でございます」と言うのでした。すると、「……お前は何者だ」と聞くので、「……難波から参りました一寸法師でございます」と言うのでした。「……成る程、一寸法師に違ひない。それでわたしの屋敷に来たのは何の用だ」と聞くと、「……私は、出世がしたいと思つて、京都へわざわざ上つて参りました。どうぞ一生懸命働きますから、お屋敷でお使いなさせて下さいまし」と、一寸法師はこう言つて、びよこんとお辞儀をしました。宰相殿は笑いながら、「……面白い小僧だ。よしよし使つてやろう」と仰いまして、そのままお屋敷に置いておやりになりました。

五、お姫様と一寸法師

さて、一寸法師は、宰相殿のお屋敷に使われるようになってから、体こそ小さくても、まめまめしくよく働きました。大へん利口で、気が利いているものですから、みんなから、「……一寸法師、一寸法師」と言つて、可愛いがられました。

このお屋敷に十三になる可愛いらしいお姫様がありました。一寸法師は、このお姫様が大好きであり、お姫様も一寸法師が大そうお気に入り、どこへお出かけになるにも、「……

一寸法師や。一寸法師や」と言つて、お供にお連れになりました。だんだん仲がよくなるうち、何と言つても、一人ともまだ子供なものですから、いつかお友達のようになつて、時々喧嘩をしたり悪戯をし合つて泣いたり笑つたりすることもありました。ある時また喧嘩をして、一寸法師が負けました。悔しまぎれに一寸法師は、そつとお姫様が昼寝をしておいでになる隙を窺つて、自分が殿様から頂いたお菓子を残らず食べてしまつて、残つた粉をお姫様の眠っている口の端になすり付けておきました。そして、自分は空っぽになつたお菓子の袋を手にとって、お庭の真ん中に出て、わざと大きな声でおいおい泣いておりました。その声を聞きつけて、殿様が縁側へ出ていらつしやつて、「……一寸法師、どうした。どうした」とお聞きになりました。

六、一寸法師の一寸した嘘から

すると、一寸法師は、さも悲しそうな声をして、「……お姫様が私をぶつて、殿様から頂いたお菓子をみんな取つて食べておしまいになりました」と言うのでした。殿様はびつくりして、お姫様のお部屋へ行つてご覧になりますと、お姫様は口の端に一杯お菓子の粉を付けて、眠つておいでになりました。殿様は大そうお怒りになつて、お母さんをお呼んで、「……何だつて、姫にあんな行儀の悪い真似をさせるのだ」と厳しくお叱りになりました。すると、このお母さんは、少し意地の悪い人（継母）だったのでした。お姫様のために自分が叱られたのを大そう悔しがりました。そして悔しまぎれに、ありもしないことをいろいろと拵えて、お姫様が平生大臣のお娘に似合わず、行儀の悪いことをさんざんに並べて、「……いくら止めても、馬鹿にして言うことをちつとも聴かないのです」とお言い付けになつたのでした。

七、海を漂い鬼が島へ

宰相殿は、なおなおお怒りになつて、一寸法師に言い付けて、お姫様をお屋敷から追い出して、どこか遠い所へ捨てさせました。——一寸法師は、とんだことを言い出して、お姫様が追い出されるようになったので、すつかり気の毒になつてしまいました。そこでどこまでもお姫様のお供をして行くつもりで、まず難波のお父さんの家へお連れしようと思つて、鳥羽から舟に乗りました。すると間もなく、ひどい時化になつて、舟はずんずん川を下つて海の方へ流されました。それから風のまにまに吹き流されて、とうとう三日三晩波の上で暮らして、四日目に一つの島に着きました。

その島には今まで話に聞いたこともないような不思議な花や木がたくさんあつて、いったい人が住んでいるのかいないのか、いつこうに人らしいものの姿は見えませんでした。一寸法師は、お姫様を連れて島に上がつて、きよろきよろしながら歩いて行きますと、いつどこから出て来たともなく、二人の鬼がそこへひよっこり飛び出して来ました。そしていきなりお姫様に飛びかかつて、ただ一口に食べようとしました。お姫様はびつくりして、気が遠くなつてしまいました。それを見ると、一寸法師は、例の縫い針の刀をきらりと引き抜いて、びよこんと鬼の前へ飛び出しました。そしてありつたけの大きな声を振り立てて、「……これこれ、このお方を誰だと思ふ。三条の宰相殿の姫君だぞ。うっかり失礼な真似

をすると、この一寸法師が承知しないぞ」と怒鳴るのでした。

八、鬼との戦いの末

二人の鬼は、この声に驚いて、よく見ますと、足元に豆つ粒のような小男が威張り返ってつツ立っていました。鬼はからからと笑いました。「……何だ。こんな豆つ粒か。面倒くさい、飲んでしまえ」と言うが早いか、一人の鬼は、一寸法師をつまみ上げて、ぱっくり一口に飲んでしまいました。一寸法師は、刀を持ったまますると鬼のお腹の中へ滑り込んで行きました。入るとお腹の中をやたらに駆けずり回りながら、ちくりちくりと刀でついて回りました。鬼は苦しがつて、「……あつ、痛い。あつ、痛い。こりや堪らん」と地べたを転げ回りました。そして苦しまぎれにかつと息をする弾みに、一寸法師はまたぴよこりと口から外へ飛び出しました。そして刀を振り上げて、また鬼に切ってかかりました。するともう一人の鬼が、「……生意気なちびだ」と言つて、また一寸法師をつかまえて、あんぐり飲んでしまいました。飲まれながら一寸法師は、今度は素早く躍り上がつて、喉の穴から鼻の穴へ抜けて、それから眼のうしろへはい上がつて、さんざん鬼の目玉を突つきました。すると鬼は思わず、「痛い」と叫んで、飛び上がったはずみに、一寸法師は、目の中からひよいと地べたに飛び下りました。鬼は目玉が抜け出したかと思つて、吃驚して、「……大変だ、大変」と、後をも見ずに逃げ出しました。するともう一人の鬼も、「……こりやかなわん。逃げる、逃げる」と後を追つて行きました。「……はつは、弱虫め」と、一寸法師は、逃げて行く鬼の後姿を気味よさそうにながめて、「……やれやれ、とんだことでした」と言いながら、そこに倒れているお姫様を抱き起こして、親切に介抱するのです。

九、打ち出の小槌で

さて、お姫様がすっかり正気がついて立ち上がるうとしますと、すそからころころと小さな槌が転げ落ちました。「……おや、ここにこんなものが」と、お姫様がそれを拾つてお見せになりました。一寸法師は、その槌を手にとって、「……これは鬼の忘れて行った打ち出の小槌です。これを振れば、何でも欲しいと思うものが出てきます。ごらん下さい、今ここでわたしの背を打ち出してお目にかけますから」と、こう言つて、一寸法師は、打ち出の小槌を振り上げて、「……一寸法師よ、大きくなれ。あたり前の背になれ」と言いながら、一度振りますと背が一尺伸び、二度振りますと三尺伸び、三度目には六尺に近い立派な大男になりました。お姫様はそのたんびに目を丸くして、「……まあ、まあ」と言つておいでになりました。

一寸法師は、大きくなったので、もう嬉しくて嬉しくて、立ったりしゃがんだり、後ろを振り向いたり前を見たり、自分で自分の体を珍しうにながめていました。一通りながめてしまうと、急に三日三晩何にも食べないで、お腹の減っていることを思い出ししました。そこでさつそく打ち出の小槌を振つて、そこへ食べきれないほどの御馳走を振り出して、お姫様と二人で仲よく食べました。そして、御馳走を食べてしまうと、今度は金銀、珊瑚、瑠璃、瑪瑙と、いろいろの宝を打ち出しました。そして一番最後に、大きな舟を打

ち出して、宝物を残らずそれに積み込んで、お姫様と二人、また舟に乗って、間もなく日本の国へ帰って来ました。

八、その後の一寸法師は……

一寸法師が宰相殿のお姫様を連れて、鬼が島から宝物を取って、めでたく帰って来たという噂が、すぐに世間に広まって、やがて天子様のお耳にまで入りました。そこで、天子様は、ある時、一寸法師をお召しになってご覧になりますと、なるほど気高い様子をした立派な若者でしたから、これはただ者ではあるまいと、よくよく先祖をお調べさせになりました。それで一寸法師のお祖父さんが、堀河の中納言という偉い人で、無実の罪で田舎に追われて出来た子が、一寸法師のお父さんで、それからお母さんという人も、やはりもとは伏見の少将と言った、これも偉い人の種だということが分かりました。

天子様はさっそく、一寸法師に位をお授けになつて、堀河の少将とお呼ばせになりました。堀河の少将は、改めて三条宰相殿のお許しを受けて、お姫様をお嫁さんにもらいました。そして摂津国の難波から、お父さんやお母さんも呼び寄せて、家の中みんな集まって、楽しく世の中を過ごされたのでした。(完)

*

*

一寸法師（現代版）

一、生い立ち

昔々、あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。二人には子供がいなかったので、おじいさんとおばあさんは神様に願かけをしました。「……神様、親指くらいの子供でも結構ですから、どうか私たちに子供を授けてください」と。すると、やがてほんとうに小さな子供が生まれたのです。それは、実に小さなまさに親指ほどの男の子でした。そこで、二人は、その子に「一寸法師」という名前を付けて、大事に育てましたが、何年経っても、その子は少しも大きくはならなかったのです。

二、或る決心を

ある日、一寸法師は、おじいさんとおばあさんを前にして、まじめな表情で、「……私は都へ上って立派な武士になりたいのです。どうか行かせて下さい」と真剣に頼むと、両親は、最初はそれに賛成しかねていましたが、一寸法師の「決心」の固いのを見て、それならばと、おじいさんは、一本の針で一寸法師に丁度よい大きさの刀をつくってやり、一方、おばあさんは、おわんを川に浮かべて、一寸法師の乗る舟をつくってやりました。そして、「……さあ、このおはしで舟をこいでおいで」と言うと、「一寸法師は、「……はい。では行って参ります」と、両親に別れの挨拶をしてから、一寸法師は、上手におわんの舟を漕ぎながら、都へと旅立って行くのでした。

三、都に上る

さて、都に着くと、一寸法師は、あちらこちらと歩きまわっているうちに、非常に大きな立派な家の前に出ました。そこで、一寸法師はその家の門に入って玄関の前に立つと、大きな声で、「……頼もう、頼もう」と言いました。すると、家の人は外で妙な声があるので、誰だろうと思いつながら玄関へと出て見ると、そこには誰も見えない。すると、「……ここだよ、ここ」と声がするので、その方を見ると、何と下駄の下に小さな人間が立っているのを見つけて、「……小僧、今、頼もうと言ったのはお前か」と聞くと、「……そうだ、私は、一寸法師と言って、武士になるために都に出て来たのだ、どうかお邸においで下さい」と頼むのでした。すると、家でも元気で面白そうなやつだと思ひ、おいてやることになりました。一寸法師は、体こそ小さいが、なかなか智慧があり、また、何をさせても気が利いていたので、みんなから「……一寸法師、一寸法師」とかわいがられました。その中でも、お姫様は、一寸法師が特にお気に入り、いつもお側にお供させていたのでした。

四、寺の参拝の帰りに……

ある日、一寸法師は、お姫様のお供をして清水寺にお参りに行きました。すると、その

帰り道、突然、二匹の鬼が現われたのです。「……おお、これは綺麗で可愛い女の子だ。もらっていかうか」と、鬼は、お姫様を見ると、すぐにも連れ去ろうとしました。すると、「……待て！」と、一寸法師は叫び、「……おれを誰だと思う、お姫様をお守りしている一寸法師だ」と大きな声で怒鳴るのでした。

すると、鬼は、ハハハと笑って、「……何だ、この小つこい奴は、お前なんぞ、こうしてくれるわ」と、一寸法師をひよいとつまみ上げては、ぱくりとひと飲みにしてしまいました。その鬼のお腹の中はまっ暗でしたが、一寸法師は、針の刀を振り回してはお腹の中を刺してまわったので、さすがの鬼もこれには参って、「……あつ、痛ててて！」と声を上げて、あわてて一寸法師を吐き出しました。すると、「……よし、今度はおれがひねりつぶしてやるわ！」と、もう一匹の鬼が意気込むと、一寸法師は、今度はその鬼の目を狙って針の刀で何度も突いてまわったので、鬼は悲鳴を上げて、「……ああ、痛たた、助けてくれ！」と、二匹の鬼は、泣きながら慌てて逃げて行くのでした。

五、打出の小槌で……

さて、鬼が逃げ去った後に、何か見慣れぬ不思議な物が落ちていました。一寸法師は、「……おや、これは何だろう？ お姫様」と聞くと、「……まあ、これは打出の小槌という物よ。これを振ると、何でも好きな物が出てくるのよ」と言うので、そこで一寸法師は、お姫様に頼んで、「……私の背が伸びるように『大きくなれ、大きくなれ』と、そう言うて振ってください」と言うとお姫様は喜んで、打ち出の小槌を振りました。「……一寸法師よ。大きくなれ、大きくなれ」と打つと、一寸法師の背は、振れば振るだけぐんぐんと伸びて、やがて誰にも負けない背丈の立派な男の武士になりました。そして、一寸法師とお姫様は結婚をして、大変幸せに暮らし出世したということです。(完)

*

*

花咲かじいさん

花咲かじいさん

一、ここ掘れ、ワン、ワン

昔々、あるところにおじいさんとおばあさんがありました。正直な人のいいおじいさんとおばあさん夫婦でしたが、子供がないので、飼犬の「白」をほんとうの子供のようにかわいがっていました。白もおじいさんとおばあさんにそれはよく懐いていました。一方、お隣にもおじいさんとおばあさんがありましたが、この方は、いけない欲ばりのおじいさんとおばあさんでした。ですから、お隣の白を憎らしいと思ったり、汚らしがって、いつも意地の悪いことばかりしていました。

ある日、正直おじいさんが、いつものようにくわをかついで、畑を掘り返していますと、白も一緒について来て、そこらをくんくん嗅ぎまわっていました。ふと、おじいさんのすそをくわえて、畑のすみの大きな榎の木の下まで連れて行って、前足で土をかき立てながら、「……ここ掘れ、ワン、ワン。ここ掘れ、ワン、ワン」と鳴きました。すると、「……何だな、何だな」と、おじいさんは言いながら、くわを入れてみますと、かちりと音がして、穴の底できらきら光るものがありました。ずんずん掘って行くと、小判がたくさん出てきました。おじいさんはびつくりして、大きな声でおばあさんを呼び立てて、えんやら、えんやら、小判を家のなかへ運び込みました。それによって、正直なおじいさんとおばあさんは、急にお金持ちになりました。

二、白を借りて畑を掘る

すると、お隣の欲ばりおじいさんが、それを聞いて大へん羨ましがって、さっそく白を借りに来ました。正直おじいさんは、人がいいものですから、うっかり白を貸してやりますと、欲ばりおじいさんは、いやがる白の首になわをつけて、ぐんぐん畑の方へひっぱって行きました。「……おれの畑にも小判がうまっているはずだ。さあ、どこだ、どこだ」と言いながら、余計強く引つ張りますと、白は苦しがつて、やたらにそこらの土を引つかきました。欲ばりおじいさんは、「……うん、ここか。しめたぞ、しめたぞ」と言いながら、掘り始めましたが、掘っても、掘っても出てくるものは、石ころやかわらのかけらばかりでした。それでもかまわず、やたらに掘って行きますと、ふんと臭いにおいがして、汚いものが出ちゃうじや出てきました。欲ばりおじいさんは、「臭い」と叫んで、鼻を抑えました。そうして、腹立ちまぎれにいきなりくわをふり上げて、白の頭から打ちおろしますと、可哀想に白は、ひと声、「きゃん」と鳴いたなり、死んでしまいました。

三、白でお米をつく

正直おじいさんとおばあさんは、あとでどんなに悲しがったでしょう。けれども死んでしまったものは仕方ありませんから、涙をこぼしながら、白の死骸を引きとって、お庭のすみに穴を掘って、丁寧に埋めてやって、お墓の代りに小さい松の木を一本その上に植えました。すると、その松がみるみる育って行って、やがて立派な大木になりました。「……

「これは白の形見だ」と、こうおじいさんは言って、その松を切つて、白を拵えました。そうして、「……白はお餅が好きだったから」と言って、白の中にお米を入れて、おばあさんと二人で、「……ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ」と、つき始めますと、不思議なことにはいくらついてもついても、あとからあとからお米が増えて、見る見る白に溢れては、外にこぼれ出して、やがて、台所一杯お米になってしまいました。

四、白を借りて米をつく

すると、今度もお隣りの欲ばりおじいさんとおばあさんが、それを知つて羨ましがつて、また図々しく白を借りに来ました。人のいいおじいさんとおばあさんは、今度もうっかり白を貸してやりました。白を借りると、さっそく欲ばりおじいさんは、白の中にお米を入れて、おばあさんを相手に、「……ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ」と、つき始めましたが、どうしてお米が湧き出すどころか、今度もふんと嫌な臭いがして、中からうじやうじや汚いものが出てきて、白に溢れては、外にこぼれ出して、やがて、台所一杯汚いものだらけになりました。

五、枯れ木に灰がかかると

欲ばりおじいさんは、また痲癩を起こして、白を叩き壊して、薪にして燃やしてしまいました。正直おじいさんは、白を返してもらいに行きますと、灰になっていましたからびっくりしました。でも、燃やしてしまつたものは仕方ありませんから、がっかりしながら、ざるの中に「残つた灰」をかき集めて、しおしおうちへ帰りました。「……おばあさん、白の松の木が灰になつてしまつたよ」と、こう言つておじいさんは、お庭のすみの白のお墓のところまで灰を抱えて行くと、どこからかすうすう暖かい風が吹いてきて、ぱつと灰をお庭一杯に吹き散らしました。するとどうでしょう、そこらに枯れ木のまま立つていた梅の木や桜の木が、灰をかぶると、見る見るそれが花になつて、よそはまだ冬の最中なのに、おじいさんのお庭ばかりは、すっかり春景色になつてしまいました。おじいさんは、手を叩いて喜びました。「……これは面白い。ついでにいつそほうぼうの木に花を咲かせてやりましょう」と言うのでした。

六、お殿様が偶然通る

そこで、おじいさんは、ざるに残つた灰を抱えて、「……花咲かじい、花咲かじい、日本一の花咲かじい、枯れ木に花を咲かせましょう」と、往來をそう言つて歩きました。すると、向こうからお殿様が馬に乗つて、大勢の家來を連れて、狩りから帰ってきました。お殿様は、おじいさんと呼んで、「……ほう、珍しいじいだ。ではその桜の枯れ木に、花を咲かせて見せよ」と言いつけました。おじいさんは、さっそくざるを抱えて、桜の木に上がつて、「……金のさくら、さくらさくら。銀のさくら、さくら」と言いながら、灰を掴んで振りまくと、見る見る花が咲き出して、やがて一面、桜の花盛りになりました。お殿様は吃驚して、「……これは見事だ。これは不思議だ」と言つて、おじいさんを褒めて、沢山

のご褒美を下さいました。

七、灰をまねて振りまくと

するとまた、お隣りの欲ばりおじいさんが、それを聞いて羨ましがって、残っている灰をかき集めてざるに入れて、正直おじいさんの真似をして、「……花咲かじい、花咲かじい、日本一の花咲かじい、枯れ木に花を咲かせましょう」と、往來を怒鳴って歩きました。すると、今度もお殿様が通りかかって、「……こないだの花咲かじいが来たな。また花を咲かせて見せよ」と言いました。欲ばりおじいさんは、得意らしい顔をしながら、灰を入れたざるを抱えて、さくらの木に上がって同じように、「……金のさくら、さらさら。銀のさくら、さらさら」と唱えながら、やたらに灰を振りまきましたが、一向に花は咲きません。そうするうちに、どつとひどい風が吹いてきて、灰は遠慮なしに四方八方へばらばらばら散って、殿様やご家来の目や鼻の中へ入りました。すると、そこでもここでも目をこするやらくしやみをするやら頭の毛を払うやら大変な騒ぎになりました。殿様は大そうお腹立ちになって、「……偽物の花咲かじいに違いない。不届きなやつだ」と言って、欲ばりおじいさんを縛らせてしまいました。おじいさんは、「……ごめんなさい。ごめんなさい」と言いましたが、とうとう牢屋へ連れて行かれました。(完)

*

*

笠^か
地^さ
蔵

笠地蔵

一、ある年の大晦日……

昔々、雪深いところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんは、笠を拵えては、それを売って暮らしていましたが、生活は非常に苦しく、その日その日を送るのがやつとでした。そして、ある年の大晦日、今年もこのままでは正月のお餅さえ買えないということ、今日も自分で拵えた「笠」を背負って町の年越市へと売りに行くのでした。おじいさんは、「……それじゃあ、ばあさん行ってくるよ」と言うと、おばあさんは、「……ええ、ええ、道中くれぐれも気を付けて下さいな」と言うのでした。

二、町で笠を売る

さて、年越市で賑やかな町へと来ると、おじいさんは、さっそく、元気に、「……笠や、笠や、笠はいらんかね」と、こう言って、上町から下町へ、下町から上町へと、一日中、何度も売り歩きましたが、誰一人として笠を買う者はありませんでした。というのも、町の賑やかな年越市では、魚や米その他の年越しに必要なものなら、飛ぶように売れていても、おじいさんの笠など見向きもされなかったのです。やがて、日が暮れて来たので、仕方なく、おじいさんは、（ばあさまもさぞかしがっかりするだろうなと思いつながら）、とぼとぼと沈んだ気持ちで家路へと向かうのでした。

三、帰る途中で地蔵に……

さて、その帰り道、途中からちらちらと雪が降りはじめ、峠に差しかけた頃には、もうすっかり吹雪になっていました。ふと見ると、道端にお地蔵さんが六体並んで立っていました。「……おうおう、こんな吹雪の中、裸地蔵のままではさぞ寒かろう。さあ、せめてこの笠で少しでも雪を凌いで下され」と、おじいさんはそう言ってお地蔵さんの頭の雪を払い笠を順に被せてやるのでした。ところが、お地蔵さんは、六体、笠は、五つしかありませんでした。そこで、おじいさんは、仕方なく、一つ残った地蔵さんの頭の雪を払ってから自分が被っていた手拭を丁寧に地蔵さんの頭にまいてやるのでした。そうすると、笠は一つも売れませんでした。何かとてもいい気持ちになって、おじいさんは家へと帰って行くのでした。

四、家へと帰る

さて、暗くなつてから手ぶらで家に帰ると、おばあさんは、「……お帰りなさい。さぞ寒かったでしょう。さあ、早く温まってください。ところで、笠はどうでした」と聞くので、「……はあさんすまない。笠は一つも売れなかった。その笠は、帰り道、吹雪の中でお地蔵さんが六体寒そうに立っていたので、余りに気の毒じやと思つて、笠を地蔵さんの頭に一つ一つ被せて来た」と言うと、おばあさんは、「……まあ、まあ、それはよいこと

をしましたね。そのまま笠を家に持ち帰っても、それよりもお地蔵さんの役に少しでも立ったなら、その方がずっとよいことですよ」と言っ、おじいさんとおばあさんは、その晩はそのまま床に就くのでした。

五、夜中、外に何やら物音が

さて、その夜、おじいさんとおばあさんが寝ていると何やら物音で目を覚ましました。はて、何だろうと思っ、耳を澄ましていると、「……えいやさつさどつと、えいやさつさどつと」と、何か物を曳いて来るようなかけ声が聞こえて来ました。しかも、それは、だんだんとこちらに近づいて来るような感じで、やがて、戸口でどさつと何か重たい物を置いたような音がしました。さて、何だろうと思っ、おじいさんとおばあさんが戸を開けてみると、そこには何と米俵をはじめ、魚や野菜など年越しの材料やお金などがたくさん置いてありました。「……これは一体どうしたことだ」と、まわりを見てみると、雪道を遠く引き返していく六人のお地蔵さんの姿が見えました。おじいさんは、「……ああ、お地蔵さんたちが昨日のお札にと来てくれたのか」と言っ、おばあさんは、「……おじいさん、これでよい正月を迎えられますね」と言っ、おじいさんとおばあさんは、立ち去っていくお地蔵さんたちの姿をずっと見送りながら、いつまでも手を合わせるのでした。(完)

*

*

鶴の恩返し

鶴の恩返し

一、一羽の鶴を助ける

昔々、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。ある寒い冬の日、おじいさんは町へたきぎを売りに出かけました。すると途中の田んぼの中で、一羽のツルがワナにかかっているのを見かけました。そこで、「……おお、おお、可愛そうに」と、おじいさんはそう思つて、ツルを逃がしてやりました。すると、ツルは、「……カウ、カウ、カウ」と、さもうれしそうに鳴いて、飛んで行きました。

二、その夜、一人の娘が

その夜、日暮れ頃から降り始めた雪が、コンコンと積もつて大雪になりました。おじいさんがおばあさんにツルを助けた話をしていると、表の戸をトントン、トントンと叩く音がしました。「……ごめんください。開けてくださいまし」と、若い女の人の声でした。おばあさんが戸を開けると、頭から雪をかぶつた娘が立っていました。

おばあさんは驚いて、「……まあ、まあ、寒かつたでしょう。さあ、早くお入り」と、娘を家に入れてやりました。「……わたしは、この辺りに人を訪ねて来ましたが、どこを探しても見当たらず、雪は降るし、日は暮れるし、やつとの事でここまで参りました。ご迷惑でしょうが、どうか一晩泊めてくださいまし」と、娘は丁寧に、手をつけて頼みました。「……それはそれは、さぞ、お困りじやろう。こんなところでよかつたら、どうぞ、お泊まりなさい」と言うと、娘は、「……ありがとうございます」と、お礼を言うのでした。

三、何日も大雪が続く

あくる朝、おばあさんが目を覚ますと、娘はもう起きて働いていました。いろりには火が燃え、鍋からは湯気があがっています。そればかりか、家じゅうがきれいに掃除されているのです。「……まあ、まあ、ご飯ばかりか、お掃除までしてくれたのかね。ありがとう」と言うのでした。そして、次の日も、その次の日も大雪で戸を開ける事も出来ません。娘は、おじいさんの肩も揉んでくれました。「……おお、おお、何てよく働く娘さんじゃ。何てよく気のつく優しい娘さんじゃ。こんな娘が家にいてくれたら、どんなにうれしいじやろう」と、おじいさんもおばあさんもそう言つて顔を見合わせました。すると娘は、手をつけて頼みました。「……身寄りのない娘です。どうぞ、この家においてくださいませ」と。すると、おじいさんもおばあさんも、「……おお、おお」、「……まあ、まあ」と言つて、喜び、それからは三人貧しいながら、楽しい毎日を過ごしました。

四、娘は機を織り始める

さて、ある日、娘は、機を織りたいので、糸を買つて来てくださいと、おじいさんに頼みました。おじいさんは、町で糸を買つてくると、娘は、「……機を織っている間は、決

して中を覗かないでください」と頼み、そして、娘は、部屋に閉じこもって機を織り始めました。それから、三日後、娘は、美しい「布」(織物)を持って、外に出て来ました。娘は、この「布」(織物)を町に持って行って売って、帰りにまた、糸を買って来て下さいと言うのでした。おじいさんは、「……これは、素晴らしい」と言って、町へ売りに行くくと、その美しい「布」(織物)は、高い値段で売れるのでした。

五、部屋を覗いてしまふ

娘は、再び、部屋で機を織りはじめ、三日後に、また、美しい「布」(織物)を持って、外に出て来ました。その「布」(織物)は、町では評判となり、より高い値段で売れました。そして、また、娘は、部屋に閉じこもって機を織り始めると、おじいさんとおばんさんは、一体、どのように機を織っているのかという「好奇心」と、次第に痩せてきた娘を「心配」して、終に、覗いてはいけないと言われていた、その「部屋のなか」をそつと覗いてしまったのでした。すると、そこには、一人の娘ではなく、「……一羽のツルが長くちばして自分の羽毛を引き抜いては、糸には喜んで機を織っていた」のでした。娘は、「……わたしは、いつか助けられたツルでございます。正体を見られては、ここに留まることはできません。もうお別れです」と、おじいさんとおばあさんが止めるのも聞かず、娘は、一羽のツルとなつて空高くへと舞い上がって行くのでした。(完)

*

*

地方バージョン

一、かさ笠地藏

二、鶴がえの恩返し

笠地蔵かさじぞう
(岩手県江刺郡えさしぐんバージョン)

笠地蔵（岩手県江刺郡バージョン）

一、大晦日、町へ出かける

昔、雪深い所に貧乏な夫婦がありました。大晦日が来たというのに、晩の年越しの支度も出来ないで、女房は、「……今まで丹精して續んだ芋枷玉を売って米に代えよう」と言うのでした。そこで、男は芋枷を持って町へ出かけて行きました。「……芋かせや、芋かせや、芋かせはいらんかね」と、ふれながら上町から下町へ、何度も行ったり来たりしましたが、この年越市に誰一人芋かせなぞに見向く者さえなかったのです。それでも男は、「……芋かせや、芋かせや、芋かせはいらんかね」と、夕方までふれながら町を歩いてみましたが、とうとう買い手もつかず、仕方がないので、ぶらりぶらりと表町を戻つて来ると、向こうから一人の笠売りの爺さんが、「……笠や、笠や、笠はいらんかね」と言つて、やつて来るのでした。

二、偶然出会った二人は、

さて、お互いに、「……芋かせや、芋かせや」、「……笠や、笠や」と、こう言つて、二人は、行きなりに互いの顔を見合わせました。笠売りの爺さまが小立ちして、「……どうだね、若い、一向に品物がさばけぬようじゃが」と言葉かけると、「……どうにも思うようになり申さぬ」と、男は笑うのでした。「……なるほどな、大晦日の市には笠や芋かせは向かぬものと見えるのう。わしも朝からこうして声をからして歩いておるのだが、一向に売れそうもござらぬ」と、爺さまは洗面をつくるのでした。男は、「……魚や米などだとみんな欲しがるのだが」と言いながら、両側の小店で飛ぶように売れて行くいろいろな品物を好ましうにながめて大笑いしました。すると、笠売りの爺さまは、「……笑いごとじゃない。だがのう若い人、お前はどこの御仁か知らぬが、今夜、その売れない芋かせを家に持ち帰つても始まるまい。どうだい、このわしの笠と取り替えっこしないか、実のところ、このわしも売れない笠を今夜家に持ち帰りたくはないのだよ」と言うのでした。

三、帰り道、地蔵に……

若い男は、「……ほんとうにそれもそうだ」と、そう思つて、自分の芋かせと爺さまの笠とを取り替えるのでした。それから、その笠を持ってとぼりと家に向かいましたが、その途中の広い野原にさしかかりますと、俄に雪が降り出して、おまけに吹雪さえ立つて来ました。男は、何となく進まぬ足どりで歩いてみると、もう野中の裸地蔵のところまで来ていました。「……この寒さに、雪の中に裸で立っていたら、地蔵様もさぞ寒がるう」と独り言を言つて、男は芋かせと取り替えた笠を、地蔵様の頭にかぶせてやりました。そしてまた、とぼとぼと空手で家へと帰つて行くのでした。

四、家に帰ると、

さて、家では女房が今に夫が米を買って帰るだろうと思って、年取りの支度をして待つていました。暗くなつてから、夫は手ぶらでぶらりと帰つて来ました。そして、「……葎かせはとうとう売れなかつたよ。それで笠売りの爺さんの笠と取り替へつこをしたが、その笠は野中の石地藏様の頭にかぶせて来た」と、詳しく話をして聞かせました。それを聞いて、女房は夫を責めるようなことは何も言わずに、ただ、「……笠を持つて帰つて来たとして、今夜の何の足しにもならないのだから、せめて地藏様に上げて来たことはよかつたですね」と言つて、夫を慰めるのでした。そう言いながら、起きていてもつまらないので、早く寝てしまいました。

五、真夜中、外に物音が……

夫婦がふと目を覚ますと、外ではひどい吹雪の音がしていました。その吹雪の音の絶え間絶え間から何か「よんさよんさ」と物を担いで来る音が聞こえました。今頃、何だろうと、二人は寝物語をしながらその音を聞いていました。すると、だんだんとその音がこつちに近づいて来ました。どうやら自分たちの家の方へやってくる様子でした。「……はて、変だなあ」と思つて、夫婦が頭を上げると、「……昼間のことは過分じゃつた」と大きな声が出て、誰かが戸口のところにとどざりと、何か重い物でも置くような音がしました。

夫婦が起きて見ると、戸口に何だか大きな袋が置いてありました。吹雪の中を大きな石地藏様が向こうへ、のこのこと歩いて行くのが見えました。二人はその袋を開けて見ると、なかには大判小判が一杯入っているのです。(完)

*

*

鶴つる女房
(新潟県バージョン)

鶴女房

一、若者と鶴との出会い

昔々、山深い所に、一人の貧しい若者がありました。ある冬の寒い日のこと、若者が山へ柴を刈りに行くと、鶴が一羽、パタパタと落ちるようになり降りて来ました。そして、飛び上がるうとしてはよろめき、よろめいては羽ばたいて、若者の側へと来ました。力尽きて蹲った鶴をよくよく見ると、鶴は羽のつけ根に矢を射られて苦しんでいるのでした。「……おお、可哀そうに。これでは飛ぶにも飛べないだろう」と、若者は周囲を見渡しましたが、猟師の姿は見えませんでした。そこで、急いで矢を抜いて、持っていた竹筒の水で傷口を洗ってやり、「……ちよつと待つとれよ」と言つて、とある草を探し見つけて、その草の葉の絞り汁を傷口になすり付けてやりました。「……さあ、もう大丈夫だ。これからは猟師の近くへは近寄るんじゃないよ」と言つて、離してやると、鶴は、若者の頭の上を三遍輪を描くように飛んでから、「カウ」という一声残して、空高く飛んで行くのでした。

二、ある晩、一人の娘が……

しばらく経つたある晩、若者の家の戸をトントン、トントンと叩く者がありました。「……はて、こんな凍てつく晩に外を歩いている人なんぞあるんかな。誰だい」と言いながら戸を開けると、戸口には見たこともないような美しい娘が一人立っていました。寒風がピューツと吹き込んで、若者は思わず身を縮こめて、「……おお寒ふ、そんなところへ立っていないで中へ入つて」と、娘を引き入れて戸を閉めるのでした。「……あんたさん、どなたでしたか」と聞くと、娘は、「……すみませんが、今晩ひと晩泊めて下さい」と言うのでした。若者は、旅の途中で行き暮れた娘かなと思うて気の毒になり、泊めてやるのでした。娘は次の日もその次の日になつても若者の家において、旅立つ気配がないのでした。

三、娘は、若者の嫁に

一方、若者も、毎日、仕事から帰つてみると、夕食が出来ているし、又、家の中はきれいに掃除されているし、別段、旅立ちを急かせる気もなかったのです。そうして日が経つた、ある日、若者が柴を集めて山から帰つて来ると、娘はニコリと微笑んで、「お疲れ様」と言つてやさしく迎え、「……わたしは、あなたの嫁でございます」と言うのでした。若者は、びつくりして、「……からかつては困る。おれは貧乏で己れ一人の口を養うのが精一杯、今、嫁を迎えたりしたら、すぐにでも食べるものに事欠く有様なのです」と言つと、娘は、ちよつと小首を傾げて、「……それは心配入りません。私にいい思案があります」と言うのでした。「……そうか。そんならお前さえよかつたら俺は有り難いくらいだ」と、承知して、二人は夫婦になりました。

四、機を織り始める

次の朝になると嫁御は、若者に、「……私に機織場を立てて下さいませ」と頼むのでした。若者が立ててやると、嫁御は、「……これから錦を織りますが、どうか七日間、決して中を見ないで下さい」と言い、若者に堅く約束させるのでした。それからというもの、朝から晩まで、キッコバタン、キッコバタンと機を織るおさの音が鳴り続けました。若者は、嫁御に約束した通りのぞき見しませんでした。七日が過ぎ、キッコバタン、キッコバタンという音も止み、嫁御が機織場から出て来ました。「……この錦を明日は殿様のところへ持って行って、売って来て下さい。『この世に二つと無い錦』と言えば、千両で売れるでしょう」と言うので、「……これが千両になるのか」と、若者は一両すら持ったことがないので吃驚するのでした。

五、殿様のところへ

次の日、殿様のところへ行くと、嫁御の言う通り、千両で買ってくれました。そして、「……もう一反織って参れ」と言い付けたのでした。若者は、千両持って家に帰って来て、殿様の御命令を嫁御に伝えると、嫁御は、「……もう一反織れますかどうか、でも、あなたの命が危ないと言うのなら、もう一度、機織場に入ってみましょう。前と同じように、どうか七日間の間、決して中を覗かないで下さい」と言い置いて、また機織場に籠もり、そしてまた、キッコバタン、キッコバタンという機を織るおさの音が鳴り続いたのでした。

六、若者は、終に……

さて、(最後の)七日目、若者は、「……いったいどうやってあんなきれいな錦を織ることが出来るのだろう」と思うと、中を見たくて見たくてたまらなくなり、それでそおつと機織場の中を覗いてみると、なんとそこには嫁御の姿はなく、一羽の鶴が己の羽を一本抜いては織り込み、また一本抜いては織り込んでいたのでした。もうほとんど抜くべき羽もなく、全身赤むけだったので。すると、「……ようやくこの錦を織り上げました。ですが、あれだけ約束したのあなたには覗いてしまいました。わたしの正体を見られたからには、もうここにはおられません。わたしは以前、あなたに助けてもらった鶴です。恩返しをしよう。優しいあなたのお側にいたい、二つの思いで人間に化身しております。短い間でしたが、たのしい毎日でした」と言うと、家の外へと出て行き、一声大きく「カウ」と鳴くと、どこからともなく、たくさんの鶴が飛んで来て、嫁御を囲み込むようにして空へ舞い上がり、遙か彼方へと飛び去って行くのでした。(完)

*

*

一、鶴の恩返し（その基本形）

むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。ある寒い冬の日、おじいさんは町へたきぎを売りに出かけました。すると途中の田んぼの中で、一羽のツルがワナにかかっているのを見かけました。おじいさんは可哀想に思っ、ツルを助けてやりました。するとツルは、「カウ、カウ、カウ」と、鳴いて、飛んで行きました。

その夜、雪の降る中、戸を叩く音がしました。戸を開けると、娘が一人立っていて、道に迷い、行くあてもなく、一晚泊めてください、と頼むのであった。老夫婦は、喜んで娘を泊めてやりました。翌日から、娘は、せつせと食事の手伝いや掃除などをしました。何日も外の大雪は降り止まず、娘は、やがて、この家においてくださいと頼むのであった。

そして、ある日、娘は、機を織りたいので、糸を買って来てくださいと、おじいさんに頼みました。おじいさんは、町で糸を買ってくると、娘は、「……機をおっている間は、決して中をのぞかないでください」と頼みました。三日後、娘は、美しい「布」（織物）を持って、外に出て来ました。娘は、この「布」（織物）を町に持って行って売り、帰りにはまた、糸を買って来て下さいと言うのでした。

娘は、再び、部屋で機を織りはじめ、三日後に、美しい「布」（織物）を持って、外に出て来ました。その「布」（織物）は、町では評判となり、より高い値段で売れました。そして、また、娘は、部屋に閉じこもって機を織り始めると、おじいさんとおばあさんは、一体、どのように機を織っているのかという「好奇心」と、次第に痩せてきた娘を「心配」して、終に、覗いてはいけなと言われていた、その「部屋のなか」をそっと覗いてしまったのでした。すると、そこには、一人の娘ではなく、「……一羽のツルが長くくちばしで自分の羽毛を引き抜いては、糸にはさんで機を織っていた」のでした。娘は、「……わたしは、いつか助けられたツルでございます。正体を見られては、ここに留まることはできません。もうお別れです」と、おじいさんとおばあさんが止めるのも聞かず、娘は、一羽のツルとなって空高くへと舞い上がって行くのでした。（完）

*

*

さて、これが有名な『鶴の恩返し』の基本形であるが、これは、一体、何なのか？ それは、基本的には、やはり「因果応報」ということであり、「……善いことをすれば、善い結果がわが身に降りかかり、悪いことをすれば、悪い結果がわが身に降りかかる」ということである。——つまり、ツルを助けてやったからこそ、ツルは、その恩返しに來たのであり、一方、覗いてはいけなという約束を破ったから、ツルは、出て行ってしまったのである。

また、浦島太郎は、いじめられていたカメを助けたからこそ、カメは、その恩返しに竜宮城へと連れて行くのであり、一方、開けてはいけなという玉手箱を開けてしまったからこそ、浦島太郎は、「おじいさん」（現実の年齢に戻る）ことになるのである。

むろん、その他の「……舌切りすずめ、こぶとり爺さん、かちかち山、さるかに合戦、花咲かじいさん、笠地蔵、その他」なども、基本的には、同じような「因果応報」に基づいた内容になっているかと思うが、それはまた、様々な「欲深さやいじわるな性格」などは、結果として、その人に「禍」を齎すことが多く、一方、「貪欲でない心優しい性格」などは、結果として、その人に「福」を齎すことが多いという内容にもなるのだろう。

そして、「桃太郎」や「金太郎」それに「一寸法師」などは、例えば、鬼退治のような「勧善懲悪」^{あく}やまた「立身出世」型などにもなっているのだろう。

それでは、その「……善いことをすれば、善い結果がわが身に降りかかり、悪いことをすれば、悪い結果がわが身に降りかかる」という「考え方」は、一体、どこから生じて来るのだろうかと敢えて問えば、それはもちろん、われわれ人間の「頭の中」(或いは「心の中」)からであるが、特にわれわれ人間の「^{なか}理的的部分」(それは「知性+理性+母体内に宿る「善のDNA」」それは「良心」の源泉でもある)からということになるのだろう。

二、覗きとは

さて、それでは、その「覗き」という問題を考えてみたいと思うが、まず、「覗き」というのは、一体、何かと敢えて問えば、それは、まさにわれわれ人間の「好奇心」そのものに他ならないのである。しかも、それは、堂々と見るといよりは、むしろ「こっそり」と見る」ということであり、それでは、なぜ「こっそりと見る」のだろうか？ それは、自分の存在を気づかれないようにして、まさにできるだけ「対象」をそのまま(あるがまま)に見てみたいという「好奇心」に他ならないのである。

例えば、人間、動物、植物、自然、人工物、宇宙、その他、何であれ、まさにできるだけ対象をそのまま(あるがまま)に見てみたいという「好奇心」であり、その対象が「人間」であるような場合は、例えば、われわれ人間というのは、他人の前ではどうしても他人を意識した「姿」(言動)などになりやすい傾向があるかと思うが、それゆえ、そうではない他人を全く意識しない、その人の、まさに素のまま(あるがまま)の「姿」(言動)などを見てみたいという、そういう「一つの欲求」でもあるということである。

例えば、女性の部屋をはじめ、女性の風呂場、トイレ、更衣室、その他、そのようなところへの「覗き」も、極めて多いかと思うが、それらに加えて、他人の部屋、タンスや引出しの中、日記、手紙、写真、その他をはじめ、パソコン、ケータイ、スマホ、その他の中を覗いてみたり、また、何らかの「秘密の情報や極秘文書、その他」などを覗いてみると、その他、実に多種多様なものがあるかと思うが、それらを一言で言えば、ほんとうのことが知りたい、その「実体」(ほんとうのこと、ほんとうの姿、ほんとうの生体、ほんとうの事情、ほんとうの状況、ほんとうの心、その他)、ほんとうの何かが知りたいという、そういう「好奇心」でもあるということである。

*

*

御伽草子おとぎわかし

一、一寸法師

二、浦島太郎

一寸法師（原文）

一、生い立ち

中ごろのことなるに、津の国難波の里に、おほちとうばと侍り。うば四十に及ぶまで、子のなきことを悲しみ、住吉に参り、なき子を祈り申すに、大明神あはれとおぼしめして、四十一と申すに、ただならずなりぬれば、おほち喜び限りなし。やがて十月と申すに、いつくしき男子をまうけけり。

さりながら、生れおちてより後、背一寸ありぬれば、やがて、その名を一寸法師とぞ名づけられたり。年月をふる程に、はや十二三になるまで育てぬれども背も人ならず。つくづくと思ひけるは、ただ者にてはあらざれば、ただ化物風情にてこそ候へ、われらいかなる罪の報にて、かやうの者をば、住吉より給はりたるぞや、あさましさよと、見る目もふびんなり。夫婦思ひけるやうは、「あの一寸法師めを、何方へもやらばやと思ひける」と申せば、やがて一寸法師此よし承り、親にもかやうに思はるるも、口惜しき次第かな、何方へも行かばやと思ひ、刀なくてはいかがと思ひ、針を一つうばに請ひ給へば、取り出し給ひにける。すなはち麦わらにて柄鞘をこしらへ、都へ上らばやと思ひしが、自然船なくとも、立ち出でにけり。住吉の浦より御器を船としてうち乗りて、都へぞ上りける。

住みなれし難波の浦を立ち出でて都へ急ぐわが心かな（原文）

そう遠くない昔のことであるが、摂津の国難波の里に、おじいさんとおばあさんがおりました。おばあさんは四十歳になるまで子供がいなことを悲しみ、住吉にお参りをし、子供を授けて下さるようお祈りすると、大明神はそれを哀れとお思いになり、四十一歳というのに、何と妊娠したということであり、おじいさんの喜びようは大変なものでした。やがて十月が経って、可愛らしい男の子をもうけたのでした。

しかし、その男の子は生れ落ちてから後も背が一寸（約三センチ）しかなかったので、その名を「一寸法師」と名づけられたのでした。年月を経て、はや十二、三歳になるまで（大事に）一寸法師を育ててみたが、背は人並みの大きさにはならず、つくづく思うことは、これは、ただ者ではなく、きつと化け物の類の子に違いない。われわれのいかなる罪の報いとして、このような子供を住吉大明神から授かったのだろうか、実に情けないことだと、見るからに不憫であり、夫婦が思っていることは、「……あの一寸法師めをどこかにやっってしまうこと」、それを言うと、一寸法師はそれを素直に受け入れ、親にもこんな風に思われるとは何とも悔しいことであり、どこへでも行ってしまおうと思ひ、ただ刀なくては仕方ないと思ひ、針を一本おばあさんに下さいとお願ひすると、取り出して与えてくれたので、麦わらで針の刀の「柄と鞘」をこしらえて、都へ上ろうと思つたが、自然、船がなくはどうしようもないと思ひ、又、おばあさんに、「……お椀と箸を下さい」と言つて受け取り、名残り惜しく感じつつも旅立つのでした。一寸法師は、住吉の浦からお椀を船として乗り込み、都へと上つて行つたのでした。

住みなれた難波の浦を旅立ちて、都へと急ぐわが心かな。

二、京へと上る

かくて鳥羽の津にも着きしかば、そこもとに乗り捨てて、都に上り、ここやかしこと見る程に、四条五条の有様、心も言葉にも及ばれず。さて三条の宰相殿と申す人のもとに立ち寄りて、「物申さん」といひければ、宰相殿はきこしめし、おもしろき声と聞き、縁の端へ立ち出でて、御覧ずれども人もなし。一寸法師、かくて人にも踏み殺されんとて、有りつる足駄の下にて、「物申さん」と申せば、宰相殿、不思議のことかな、人は見えずして、おもしろき声にて呼ばはる、出でて見ばやとおぼしめし、そこなる足駄はかんと召されければ、足駄の下より、「人な踏ませ給ひそ」と申す。不思議に思ひて見れば、一興なるものにて有りけり。宰相殿御覧じて、げにもおもしろき者なりとて、御笑ひなされけり。(原文)

*

*

さて、一寸法師は、そうやって鳥羽の津(港)に到着すると、その港に船を乗り捨てて、都に上り、あちこちと見て歩くうちに、四条五条(通り)の様子は、心で想像することも言葉で言い表すことも出来ないほどの賑やかなさでした。——さて、三条の宰相殿という人の屋敷に立ち寄って、「もの申さん」と言うと、宰相殿はそれをお聞きになり、面白い声だと思い、縁側の先へと出て行って、御覧になったが人影もない。一寸法師は、このように人に踏み殺されないようにと、置いてある足駄(高下駄)の下から、「もの申さん」と言うと、宰相殿は、不思議なことだ、人の姿は見えないのに面白い声にて呼んでいる。出て行って見てみようとお思ひになり、そこにある足駄(高下駄)を履こうとしたところ、その足駄(高下駄)の下から、「……人をお踏みになさるな」と言う(声がする)。不思議に思つて見ると、それは何とも風変わりなものであった。宰相殿はそれを御覧になつて、実に面白い者だと思い、お笑いになられたのでした。

三、一寸法師の或るはかりごと

かくて年月送る程に、一寸法師十六になり、背はもとのままなり。さる程に宰相殿に、十三にならせ給ふ姫君おはします。御かたちすぐれ候へば、一寸法師姫君を見奉りしより、思ひとなり、いかにもして案をめぐらし、わが女房にせばやと思ひ、ある時、みつもの打撒取り、茶袋に入れ、姫君の臥しておはしけるに、はかりごとをめぐらし、姫君の御口にぬり、さて茶袋ばかり持ちて泣き居たり。宰相殿御覧じて、御尋ねありければ、「姫君の、童がこの程取り集めて置き候うちまきを、取らせ給ひ、御参り候ふ」と申せば、宰相殿大きに怒らせ給ひければ、案のごとく姫君の御口に付きてあり。「まことに偽りならず。かかる者を都に置いて何かせん。いかにも失ふべし」とて、一寸法師に仰せつけらるる。一寸法師申しけるは、「童が物を取らせ給ひて候ふ程に、とにかくにもはからひ候へとありける」とて、心のうちにうれしく思ふこと限りなし。姫君はただ夢の心地して、あきれはててぞおはしける。(原文)

*

*

こうして年月を送るうちに、一寸法師は十六歳になりましたが、背丈は元のままでした。さて、宰相殿には十三歳になられる姫君がおられ、その姿・形は実に美しく、一寸法師

は、姫君を初めて見た時から一目惚れに深く陥り、何とかして自分の妻にしようと思案を巡らしていたが、ある時、打撒（それは「神前に供える米や散米」など）を取り、それを茶袋に入れて、姫君の昼寝をしておられる時に、計略を実行して、その打撒（お米）を姫君のお口に塗り、茶袋だけを持って泣いているのでした。

宰相殿は、これを見て、一寸法師にその訳を聞くと、一寸法師は、「……姫君が自分が取り集めて置いた打撒を取ってしまったのです」と言うので、宰相殿は、非常にお怒りになり、見てみると、案の定、姫君のお口に付いていました。そこで、宰相殿は、「……誠に偽りないこと、このような者を都に置いておけようか。どのようにも始末せよ」と、一寸法師に始末（後始末）を言い付けるのでした。そこで一寸法師が姫君に言うことには、「……私の物をお盗みなされたということで、ともかく私に姫様の始末は任せると申された」と言って、心の中ではこの上もなく嬉しい気持ちになるのですが、姫君は、ただ夢のような心地で呆れ果てておられるのでした。

四、都を出て船に乗る

一寸法師、とくとくとすすめ申せば、闇へ遠く行く風情にて、都を出でて、足に任せて歩み給ふ。御心の中、推しはからひてこそ候へ。あらいたはしや一寸法師は、姫君を先に立ててぞ出でにけり、宰相殿はあはれ此事をとどめ給ひかしくおぼしけれども、継母のことなれば、さしてとどめ給はず。女房たちも付き添ひ給はず。姫君あさましき事に思しめして、かくて何方へも行くべきならねど、難波の浦へ行かばやとて、鳥羽の津より船に乗り給ふ。折ふし風荒くして、きやうがる島へぞ着けにける。船より上り見れば、人住むとも見えざりけり。（原文）

*

*

一寸法師が早く早くとせき立てるので、まるで闇へと遠く行くような様子で、都を出て、足に任せて歩いていました。その心の中は、自然と推し量られるもので、何とも気の毒なことに、一寸法師は、姫君を先に立てて出て行きました。宰相殿は可哀想に思い、この事を引き止めてほしいとお思いになるが、継母であったので、さほど（強く）姫君をお止めにはならなかったのです。しかも、お使いの女房たちも付き添わず、姫君は驚き呆れた事だとお思いになるが、どこへ行ったらよいものかと、とにかく難波の浦へ行ってみようと、思つて、鳥羽の津（港）から船に乗りました。その折りに、海は強い暴風で荒れて、船は風変わりな島へと着きました。船から降りて見ると、人が住んでいるようにも見えませんでした。

五、島に上陸すると、

かやうに風悪く吹きて、かの島へぞ吹き上げける、とやせんかくやせんと、思ひわづらひけれども、かひもなく、船より上り、一寸法師はここかしこと見めぐれば、いづくともなく鬼二人来りて、一人は打出の小槌を持ち、いま一人が申すやうは、「呑みて、あの女房取り候はん」と申す。口より呑み候へば、目の中より出でにけり。鬼申すやうは、「是は曲者かな。口をふさげば目より出づる」。一寸法師は鬼に呑まれては、目より出でて、

とび歩きければ、鬼もおちをののきて、「是はただ者ならず。ただ地獄に乱こそ出で来たれ。ただ逃げよ」といふままに、打出の小槌、杖、笞、何にいたるまでうち捨てて、極楽浄土の乾の、いかにも暗き所へ、やうやう逃げにけり。(原文)

*

*

かように風は悪く吹いて、かの島へと吹き上げました。どうしようかこうしようかと思いついて迷っていたが、その甲斐もなく、船から上がり、一寸法師は、あちらこちらと見まわしている、どこからともなく鬼が二人現われて、一人は手に打出の小槌を持ち、もう一人が言うには、「……(小さいやつは)呑んでしまい、あの女房を取ってしまおう」と言うのでした。そこで、口から呑み込んでみると、目から飛び出してしまふ。鬼の言うことには、「……これは曲者だ。口を塞げば目から出て来てしまふ」と。

一寸法師は、鬼に呑まれると目から飛び出て、跳んで動きまわるので、鬼たちも恐れ戦いて、「……これはただ者じゃない。地獄に反乱でも起きたのだ、ただ逃げよう」と言いながら、打出の小槌をはじめ、杖、笞、その他、何から何までうち捨てて、極楽浄土の「北西」の方向、いかにも暗い所へと逃げて行きました。

六、鬼が残した打出の小槌で

さて、一寸法師は是を見て、まづ打出の小槌を濫妨し、「われわれが背を大きになれ」とぞ、どうぞ打ち候へば、程なく背大きになり、さて此程疲れにのぞみたることなれば、まづまづ飯を打ち出し、いかにもうまさうなる飯、いづくともなく出でにけり。不思議なる仕合せとなりけり。

その後、黄金銀打ち出し、姫君ともに都へ上り、五条あたりに宿をとり、十日ばかりありけるが、此事隠れなければ、内裏にきこしめされて、急ぎ一寸法師をぞ召されけり。すなはち参内つかまつり、大王御覽じて、「まことにいつくしき童にて侍る。いかさまこれはいやしからず」。先祖を尋ね給ふ。おほぢは堀河の中納言と申す人の子なり。人の讒言により、流され人となり給ふ。田舎にてまうけし子なり。うばは伏見の少将と申す人の子なり。幼き時より父母に後れ給ひ、かやうに心もいやしからざれば、殿上へ召され、堀河の少将になし給ふこそめでたけれ。父母をも呼び参らせ、もてなしかしづき給ふ事、世の常にてはなかりけり。

さる程に少将殿、中納言になり給ふ。心かたちはじめより、よろづ人にすぐれ給へば、御一門のおぼえいみじくおぼしける。宰相殿きこしめし、喜び給ひける。その後、若君三人出でけり。めでたく栄え給ひけり。

住吉の御誓に、末繁昌に栄へ給ふ、世のめでたき例、これに過ぎたることはよもあらじとぞ申し侍りける。(完)

*

*

さて、一寸法師はこれを見て、まず、打出の小槌を取って、「……われわれが背よ、大きくなれ」と、どんと打ったところ、間もなく背が大きくなりました。さて、今回は疲れて(飢えて)いたので、ともかくも飯を打ち出すと、いかにも美味しそうな飯が、どこからともなく現われて、何とも不思議な幸せとなりました。

その後、一寸法師は金銀財宝を打ち出して、姫君と一緒に都へと戻り、五条あたりに宿

を取って十日ばかり過ぎましたが、このことは隠してはいなかったもので、宮中に知られることとなり、急遽、一寸法師が呼ばれることになりました。大王（帝）は、一寸法師を御覧になつて、「……誠に美しい少年である。きつとこれは賤しいものではない」と、一寸法師の先祖を調べさせました。すると、一寸法師の祖父は、堀河の中納言という人の子供であり、人の讒言（嘘の告げ口）により田舎に流され、そこで生まれた子供でした。祖母は、伏見の少将という人の子供であり、幼い時から父母に先立たれていたそうです。このように（素性も）心にも卑しいところがないので、殿上（宮中）へと呼ばれ、堀河の少将になられたことは、誠にめでたいことである。一寸法師は、（自分を嫌った）父母も都に呼び、大切にもてなし世話なされたことは、世の常にはないほどでした。

そうこうしている内に、（一寸法師の）少将殿は、中納言に出世なさいました。心も容姿も初めから、世間一般の人より優れておられたので、御一門への帝のおぼえもたいそうめでたくいらつしやたのです。宰相殿もそれをお聞きになり、たいそうお喜びになりました。その後、三人の若君（子供）が生まれて、めでたく栄えたと言うことです。

住吉の御誓（これは子宝の神、安産の神、立身出世の神の御利益）通りに、めでたく立身出世なされて、末永く繁昌し繁栄されたことは、世のめでたい例としては、これ以上のもはないだろうと世間に申し伝えられているとか。（完）

*

*

一寸法師（解説）

さて、この御伽草紙の『一寸法師』と今日の『一寸法師』の昔話との「大きな違い」の一つは、まさに次のようなところであり、それは、「……年月を経て、はや十二、三歳になるまで（大事に）一寸法師を育ててみたが、背は人並みの大きさにはならず、つくづく思うことは、これは、ただ者ではなく、きつと化け物の類の子に違いない。われわれのいかなる罪の報いとして、このような子供を住吉大明神から授かったのだろうか、実に情けないことだと、見るからに不憫であり、夫婦が思っていることは、『……あの一寸法師をどこかにやってしまうこと』、それを言うと、一寸法師はそれを素直に受け入れ、親にもこんな風に思われるとは何とも悔しいことであり、どこへでも行ってしまおうと思いい、そこで、都へと上って行くのでした。むろん、この内容では、例えば、子供たちに読み聞かす「昔話」としては、やはり「不向き」であり、それゆえ、今日のような『一寸法師』の内容へと変化しているのだろう。

そして、もう一つの「大きな違い」は、この御伽草紙の『一寸法師』では、「……宰相殿には十三歳になる姫君がおられ、一寸法師は、その姫君を初めて見た時から一目惚れに深く陥り、何とかして自分の妻にしようと思ひ、ある時、姫君の昼寝をしている時に、或る「策略を実行する」が、この「策略の実行」（いわば悪巧み）が、一般には子供たちに読んで聞かせる「昔話」としては、やはり「不向き」になるのだろう。その後、二人は、宰相殿の怒りにふれて、都を追い出され、船に乗って（一寸法師の故郷）「難波」に行こうとするが、途中、海上で「激しい風」に吹かれて、何と「鬼が島」へと漂着してしまう。そして、その「鬼が島」に上陸すると、二人の「鬼」が現われて、二人に襲いかかるが、一寸法師は、その二人の「鬼」を追い払い、その時、一人の「鬼」が落として逃げた「打ち出の小槌」で、一寸法師の「背が大きくなる」という展開になる……。

一方、今日の『一寸法師』の場合では、いわゆる「鬼が島」に漂着するのではなく、お姫様と一寸法師が「清水寺に参拝に行った」、その帰りに、その頃、世間を騒がしていた「鬼」が現われて、二人に襲いかかるが、一寸法師は、その「鬼」を追い払い、その「鬼」が逃げる時に落とした「打ち出の小槌」で、一寸法師は、「背が大きくなる」という展開になるかと思うが、この方が子供たちに読んで聞かせる「昔話」としては、いわば「無難な展開」になるのだろう。……

*

*

浦島太郎（原文）

浦島太郎（原本）

一、ある日、亀を釣り上げる

昔丹後国に、浦島といふもの侍りに、その子に浦島太郎と申して、年の齡二十四五の男有りけり。明け暮れ海のうろくづ（魚）をとりて、父母を養ひけるが、ある日のつれづれに、釣をせんとて出でにけり。浦々島々、入江々々、至らぬ所もなく、釣をし、貝を拾ひ、みるめを刈りなどしける所に、多しまが磯といふ所にて、亀を一つ釣り上げける。浦島太郎此亀にいふやう、「汝、生有るものの中にも、鶴は千年、亀は万年とて、命久しきものなり。忽ちここにて命をたたん事、いたはしければ、助くるなり。常には此恩を思ひ出すべし」とて、此亀をもとの海にかへしける。（原文）

昔、丹後の国に浦島という者がおりましたが、その子に浦島太郎という二十四、五歳の男がありました。朝から晩まで海で魚を捕って父母を養っていたのですが、ある日、いつものように釣りをしようと思つたのでした。海岸や島或いは入り江など行かない所もなく、あらゆる所で釣りをし、貝を拾ひ、海松布（海藻）を刈っていたところ、絵島が磯という所で亀を一匹釣り上げました。浦島太郎がこの亀に言うには、「……お前は、命あるものの中でも、鶴は千年、亀は万年といつて、長寿の者である。それゆえ、突然、ここで命を奪うのは余りに可哀想だから、助けてやろう。常にこの恩を思い出すがい」と言つて、この亀を元の海へと帰したのでした。

さて、「原文」では、浦島太郎は、海の上で直接「亀」を釣り上げるが、「……お前は、命あるものの中でも、鶴は千年、亀は万年といつて、長寿の者である。それゆえ、突然、ここで命を奪うのは余りに可哀想だから、助けてやろう。常にこの恩を思い出すがい」と言つて、この亀を元の海へと帰したのである。——これは、今日、われわれの誰もが知る、「……ある日、浦島太郎は、浜辺で子供たちが子亀を苛めている様子を見て、余りに可哀想だと思ひ、そこで、浦島太郎は、その子亀を子供たちから助けて、元の海へと帰してやつた」という展開とは違つてゐるが、それは、結局、その時代時代その地域地域での実に様々な「内容」の派生（バリエーション）の変遷を経ては、今日の『浦島太郎』という昔話は、主に「子供たちに親しまれるような内容のバージョン」に変化しているのだから。

二、一人の女性が小船に乗つて、

かくて浦島太郎、其日は暮れて帰りぬ。又次の日浦の方へ出でて、釣をせんと思ひ見れば、はるかかの海上に、小船一艘浮べり。怪しみやすらひ見れば、美しき女房只ひとり波にゆられて、次第に太郎が立ちたる所へ着きにけり。浦島太郎が申しけるは、「御身いかなる人にてましますば、かかる恐ろしき海上に、ただ一人乗りて御入り候やらん」と申しければ、女房いひけるは、「さればさる方へ便船申して候へば、折ふし浪風荒くして、人あまた海の中へはね入れられしを、心ある人有りて、自らをば此はし舟に乗せて放されけり。悲しく思ひ鬼の島へや行かんと、行方知らぬ折ふし、ただ今人に逢ひ参らせさぶ

らふ。此世ならぬ御縁にてこそ候へ。されば虎狼も、人を縁とこそしさぶらへ」とて、さめざめと泣きにけり。浦島太郎も、さすが岩木にあらざれば、あはれと思ひ、綱を取りて引き寄せにけり。さて女房申しけるは、「あはれわれらを本国へ送らせ給ひてたび候へかし。これにて捨てられ参らせば、わらはは何処へ何となりさぶらふべき。捨て給ひ候はば、海上にての物思ひも、同じ事にてこそ候はめ」と、かきくどきさめざめと泣きければ、浦島太郎もあはれと思ひ、同じ船に乗り、沖の方へ漕ぎ出す。かの女房の教へに従ひて、はるか十日余りの船路を送り、故郷へぞ着きにける。(原文)

*

*

こうして浦島太郎は、その日は、日が暮れたので(家に)帰りました。また、次の日、裏の方(海岸)の方へ出かけて釣りをしようと思つて見ると、遙か遠くの海上に、小さい船が一艘浮かんでいました。不思議に思つて佇んで見ていると、美しい女性がただ一人波に揺られながら、次第に太郎が立っている所へと近づいて漂着しました。そこで、浦島太郎が言うのには、「……あなたはどのような方であつて、(なぜ)このような恐ろしい海上にただ一人船に乗つておられるのですか」と尋ねたところ、——女の人が言うことには、「……それは、ある所へ行くために船に乗つておりましたが、丁度その時に波風が荒れ狂つて、多くの人たちが海の中へと投げ出されてしまったのを、心ある人(情ある)人がいて、私をこの小舟に乗せて放したのです。私は悲しく思つて、鬼の島へと行くことにもなるのだろうか、行き先も分からぬままに(不安のままに)漂つていたところ、今、こうしてあなたにお会いしたのです。これもこの世ならぬあの世(前世)からの深い御縁あつてのことでしょう。だから虎や狼のような獣でさえも、(犬や猫でも)、出会つた人を縁と想うのです」と言つて、さめざめと(しきりに涙を流して)泣くのでした。

浦島太郎も、さすがに岩や木ではなく心を有する人間であるので、気の毒なことだと思ひ、綱を取つて船を引き寄せました。そこで女が言うのには、「……ああ、どうか私を生国へ送り届ける旅をして下さいませ。ここでこのまま見捨てられては、私はもうどこへ行つてどうなるものかも分かりません。(もし)ここでお見捨てになるなら、海上で独り物思いに沈んでいた時と何ら変わりません」と、くどくどと何度も言つてはさめざめと(しきりに涙を流して)泣いたので、浦島太郎も気の毒だと思ひ、同じ船に乗つて沖の方へと漕ぎ出しました。その女の教へ(指示)に従つて、はるばる十日余りの船旅を送つて、女の故郷へと到着するのでした。

*

*

さて、この場面の「原文」では「解釈」が二つに分かれている所があり、それは、「……ある所へ行くために船に乗つておりましたが、丁度その時に波風が荒れ狂つて、多くの人たちが海の中へと投げ出されてしまった」までは同じ解釈であるが、問題は、その次の「……心ある人有りて、自らをば此はし舟に乗せて放されけり」という「原文」であり、一つの解釈は、「……情ある人がいて、その人が私をこの小舟に乗せて放してくれた」という解釈と、もう一つは、「……心ある人(智慧ある)人がいて、(嵐に遭遇したのは女を乗せたせいだと)私をこの小舟に乗せて流した」という解釈である。むろん、一般には、前者の「解釈」になるかと思うが、しかし、それは、どちらであれ、それほど重要なものではなく、というのも、この女の「話」は、すべて「作り話」であり、それというのも、この女の「願い」は、ただただ浦島太郎を次の所へと連れ出すことであり、それは、

「……ああ、どうか私を生国へ送り届ける旅をして下さいませ。(中略)、ここでお見捨てになるなら、海上で独り物思いに沈んでいた時と何ら変わりません」と、くどくどと何度も言つてはさめざめと(しきりに涙を流して)泣いたので、浦島太郎も気の毒だと思ひ、同じ船に乗って沖の方へと漕ぎ出しました。その女の教へ(指示)に従つて、はるばる十日余りの船旅を送つて、女の故郷(まさにその目的地)へと到着するのである。

三、竜宮城で二人暮らす

さて船より上り、いかなる所やらんと思へば、銀の築地をつきて、金の麓をならべ、門をたて、いかならん天上の住居も、これにはいかで勝るべき。此女房のすみ所、ことばにも及ばれず、中々申すもおろかなり。さて女房の申しけるは、「一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲むことも、皆これ他生の縁ぞかし。ましてや遙かの波路を、はるばると送らせ給ふ事、ひとへに他生の縁なれば、何かは苦しかるべき、わらはと夫婦の契をもなし給ひて、同じ所に明し暮し候はんや」と、こまごまと語りける。浦島太郎申しけるは、「ともかくも仰せに従ふべし」とぞ申しける。さて偕老同穴の語らひも浅からず。天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝とならんと、互に鴛鴦の契浅からずして、明し暮させ給ふ。(原文)

*

*

さて、船から上がり、どんな所だろうかと思へば、銀の築地(土塀)に囲まれ、金の麓(瓦屋根)を並べて、立派な門を建てて、どんな天上の住居も、これにはどうして勝るだろうか。この女の住む所は、言葉に言い表せぬほどであり、あれこれ中途半端に褒めて言うのは、かえつて愚かなことである。そして、女が言うことには、「……同じ樹の陰に休み、同じ河の水を汲むのも、みなこれ前世の縁であり、ましてや遙か波路をはるばるとお送り下さったことは、ひとえに前世の縁なのですから、何を悩むことがありません。私と夫婦の契りを結んで、同じ場所で明かし暮らしましょう」と、切々と語るのでした。これに対して、浦島太郎が言うことには、「……ともかくも、お言葉に従いましょう」と言うのでした。そうして、偕老同穴(共に暮らして老い、死んだ後は同じ墓に入る)という生涯変わらぬ夫婦となる契りを固く結んだのです。それは、天にあつては比翼の鳥となり、地にあつては連理の枝とならうと、互に「鴛鴦の契り」(仲の良いおしどり夫婦)となつて、日々をお暮らしになつたのでした。

*

*

例えば、今日の『浦島太郎』の昔話であれば、その「竜宮城」は、まさに「海の底」にあり、その様子は、「……青い青い水の底へ運ばれて行くと、向こうに立派な門が見えて来て、その奥にきらきら光つて、目の眩むような金銀の麓が高くそびえていたが、それがまさに『竜宮城』であり、その御殿の中へ案内されて行くと、鯛や平目やカレイやいろいろのお魚たちが、もの珍しそうな目で見ている中を通つて、乙姫様が大勢の腰元などを連れて、お迎えに出て来ると、『……浦島さん、ようこそお出で下さいました。先日は亀の命をお助け下さいまして、誠に有り難うございます。何にもお持てなしはございませんが、どうぞごゆっくりお遊び下さいまし』と言つて、やがて、大小色々なお魚たちが珍しい御馳走などを山ほど運んで来て、鯛や平目やカレイなどの歌や踊りの賑や

かなお酒盛が始まるという誰にもお馴染みの展開になる」かと思う。
ところが、この御伽草紙の『浦島太郎』では、その「竜宮城」は「海の底」ではなく、むしろ海上に浮かぶ島（恐らく蓬莱の山）にあり、それは、「……さて、船から上がり、どんな所だろうかと思えば、銀の築地（土塀）に囲まれ、金の甕（瓦屋根）を並べて、立派な門を建てて、どんな天上の住居も、これにはどうして勝てるだろうか。この女の住む所は、言葉に言い表せぬほどであり、あれこれ中途半端に褒めて言うのは、かえって愚かなことである」となっている。それゆえ、海の中にいる「……鯛や平目やカレイその他の大小色々なお魚たちは全く登場しない」のである。そして、この御伽草紙の『浦島太郎』では、何よりも「夫婦の契り」をひたすら語っているのであり、それは、「……偕老同穴（共に暮らして老い、死んだ後は同じ墓に入る）」という生涯変わらぬ夫婦となる契りを固く結んだのです。それは、天にあっては比翼の鳥となり、地にあっては連理の枝となろうと、互に「鴛鴦の契り」（仲の良いおしどり夫婦）となって、日々をお暮らしになったのでした。

四、四季の景色

さて女房申しけるは、「これは竜宮城と申す所なり、此所に四方に四季の草木をあらはせり。入らせ給へ、見せ申さん」とて、引具して出でにけり。まづ東の戸をあけて見れば、春の景色と覚えて、梅や桜の咲き乱れ、柳の糸も春風に、なびく霞のうちよりも、鶯の音も軒近く、いづれの木末も花なれや。南面を見てあれば、夏の景色とうち見えて、春をへだつる垣穂には、卯の花や、まづ咲きぬらん、池の蓮は露かけて、汀涼しきさざなみに、水鳥あまた遊びけり。木々の梢も茂りつつ、空に鳴きぬる蝉の声、夕立過ぐる雲間より、声たて通るほととぎす、鳴きて夏とや知らせけり。西は秋とうち見えて、四方の梢も紅葉して、籬の内なる白菊や、霧たちこむる野辺の末、真萩が露を分け分けて、声ものすぎき鹿の音に、秋とのみこそ知られけれ。さて又北をながむれば、冬の景色とうち見えて、四方の木末も冬がれて、枯葉に置ける初霜や、山々やただ白妙の、雪に埋るる谷の戸に、心細くも炭竈の煙にしるき賤がわざ、冬と知らする景色哉。（原文）

*

*

さて、女が言うことには、「……ここは竜宮城という所で、こちらには四方に四季（春夏秋冬）の風景を表しております。さあ、お入りなさい、見せて上げましょう」と言つて、浦島太郎の手を引いて行きました。

まず東の戸を開けてみると、春の景色と思われて、梅や桜が咲き乱れ、柳の糸も春風に揺れ、なびく霞の中に鶯の鳴く声も軒近く、どの梢も花が咲き誇っているのです。また、南の方を見ると、夏の景色と見え、春との境の垣根には、まづ卯の花が咲き、池の蓮には露を置いて、汀（水際）に涼しきさざ波が寄せて、数多くの水鳥が遊んでいました。木々の梢も茂って、空に響く蝉の声、夕立が通り過ぎてゆく雲間から、声を立てて飛ぶほととぎすが、鳴いて夏を知らせていました。

西は秋と見えて、四方の梢も紅葉し、籬（低い垣根）の内に咲く白菊、霧が立ち籠める野辺の奥では、露に濡れた真萩をふり分けて、鳴く鹿の声のもの凄いな音に、これぞ秋と感じました。そして、北を眺めると、冬の景色と見えて、四方の梢が冬枯れして、枯葉

に置いた初霜、山々の一面真っ白な雪に埋もれたその谷の戸に、心細く昇る炭竈の煙には山の民の炭焼きの業がはつきり知られて、(いかにも) 冬らしい景色でした。

*

*

さて、この場面では、日本の代表的な「四季」(春夏秋冬)の風景がいつでも見られるということであり、例えば、春の景色としては、「……梅や桜が咲き乱れ、柳の糸も春風に揺れ、なびく霞の中に鶯の鳴く声も軒近く、どこの梢も花が咲き誇っている」とあり、また、夏の景色としては、「……春との境の垣根には、まず卯の花が咲き、池の蓮には露を置いて、汀(水際)に涼しきさざ波が寄せて、数多くの水鳥が遊んでいました。木々の梢も茂って、空に響く蟬の声、夕立が通り過ぎてゆく雲間から、声を立てて飛ぶほととぎすが、鳴いて夏を知らせていました」とある。

次に、秋の景色としては、「……四方の梢も紅葉し、籬(低い垣根)の内に咲く白菊、霧が立ち籠める野辺の奥では、露に濡れた真萩をふり分けて、鳴く鹿の声のもの凄いな音に、これぞ秋と感じました」とあり、そして、冬の景色としては、「……四方の梢が冬枯れして、枯葉に置いた初霜、山々の一面真っ白な雪に埋もれたその谷の戸に、心細く昇る炭竈の煙には山の民の炭焼きの業がはつきり知られて、(いかにも) 冬らしい景色でした」とある。

そして、今日の日本の代表的な「四季」(春夏秋冬)の風景として、もう少し書き加えるならば、例えば、春であれば、梅や桜が咲き乱れ、菜の花も一面に咲いて蝶々などが飛び交う。五月には多彩な躑躅や薔薇や牡丹、六月は梅雨時の雨に匂ふ花菖蒲や紫陽花の花田んぼに蛙の鳴き声、夏には、様々な蝉の声と朝顔や大きな向日葵の花、秋には、華やかな菊と野辺の秋桜の花色々な虫の音と晩秋の紅葉、そして、冬は、山々の雪景色と供に、冬の渡り鳥、その他等になるかと思う。

五、三年の歳月が流れて

かくておもしろき事どもに、心を慰み、栄花に誇り、明し暮し、年月をふる程に、三年になるは程もなし。浦島太郎申しけるは、「われに三十日の暇をたび候へかし。故郷の父母を見すて、かりそめに出席で、三年を送り候へば、父母の御事を心もとなく候へば、あひ奉りて、心やすく参り候はん」と申しければ、女房仰せけるは、「三年が程は、鴛鴦の衾の下に比翼の契をなし、片時見えさせ給はぬさへ、とやあらん、かくやあらんと心をつくし申せしに、今別れなば、又いつの世にか逢ひ参らせ候はんや。二世の縁と申せば、たとひ此世にてこそ夢幻の契にてさぶらふとも、必ず来世にては、一つ蓮の縁と生れさせおはしませ」とて、さめざめと泣き給ひけり。又女房申しけるは、「今は何をか包みさぶらふべき。自らは、この竜宮城の亀にて候が、多しまが磯にて、御身に命を助けられ参らせて候、その御恩報じ申さんとて、かく夫婦とはなり参らして候。また是は自らがかたみに御覧じ候へ」とて、左の脇よりいつくしき箱を一つ取り出し、「あひかまへてこの箱をあけさせ給ふな」とて渡しけり。会者定離のならひととて、会ふものには必ず別るとは知りながら、とどめ難くてかくなん、

日数へて重ねし夜半の旅衣立ち別れつついつかきて見ん

浦島返歌、

別れ行く上の空なる唐衣ちぎり深くは又もきて見ん

さて浦島太郎は、互に名残を惜しみつつ、かくて有るべきことならねば、かたみの箱を取り持ちて、故郷へこそ帰りけれ。忘れもやらぬ来し方、行末の事ども思ひ続けて、遙かの波路を帰るとて、浦島太郎かくなん、

かりそめに契りし人のおもかげを忘れもやらぬ身をいかがせん（原文）

*

*

こうして、面白いことなどに心を慰め、栄華な環境の中で明し暮して年月を過ごすうちに、あつという間に三年が経ってしまいました。浦島太郎が言うことには、「……私に三十日の暇を下さい。故郷の父母を見捨て、ほんの少しの間と思つて出て来て、三年もの年月を送つてしまい、父母のことが気掛かりであり、両親に会つて、安心したいのです」と言うとき、女房が仰ることに、「……三年の間は、鴛鴦の衾（これは夫婦が睦まじいようにと鴛鴦の模様をつけた衾）の下で比翼の契り（夜は一緒に寢床で過し）、ほんの少し姿が見えないだけでも、どうしたのだろう、何かあつたのかしらと心配の限りを尽くして来ましたが、今、お別れしたら、またいつの世にて逢えるのでしょうか。夫婦の縁は『二世の縁』（この世とあの世で出逢う縁）と申しますが、たとえこの世の契りが夢幻の儂いものであつたとしても、必ず来世には一つ蓮の縁（これは同じ浄土で再会できるように）生まれて来て下さい」と、さめざめと（しきりに涙を流して）泣くのでした。

また、女房の言うことには、「……今は何を包み隠しましょう。私は、この竜宮城の亀でございですが、絵島が磯にて、あなた様にお命を助けていただき、その恩に報いようと思つて、このように夫婦となつたのでございます。また、これは私の形見と思つて下さい」と言つて、左の脇から綺麗な箱を一つ取り出しては、「……決してこの箱は開けないで下さい」と言つて、渡すのでした。会者定離はこの世の習いであり、会う者には必ず別れがあると知りながら、別れ難くて、このような歌を詠むのでした。

日数経て重ねた夜半（三年という長い年月共寝を重ねた夜）、それなのに、今、あなたは旅衣（旅姿）で立ち別れて行き、いつまた会いに来てくれるのでしょうか。

浦島太郎の返歌は、

別れ行く心は上の空の唐衣（空心）夫婦の縁深ければまた来て（着て）みよう。

さて、浦島太郎は、互に名残を惜しみつつも、いつまでもこのようにあるべきではないので、形見の箱を手にとって、故郷へと帰るのでした。忘れることも出来ないこれまでのこと、この先のことを考え続けて、遙かの波路を帰る、その浦島太郎の心境は、

かりそめに契りし人の面影を忘れることもできぬこの身をどうしたらよいのだろうか。

*

*

さて、毎日、面白く過ごしているうちに、あつという間に三年の歳月が流れてしまい、浦島太郎が言うには、「……私に三十日の暇を下さい。故郷の父母を見捨て、ほんの少しの間と思つて出て来て、三年もの年月を送つてしまい、父母のことが気掛かりであり、両親に会つて、安心したいのです」と言う。——浦島太郎は、毎日、魚を釣つて「両親」を養つていた。だとすれば、もつと早くから「このような思い」に襲われても不思議はなかつたが、それ程までに「竜宮城での生活」は、何もかも忘れさせてしまうような「摩訶不思議な世界」だったのか。

一方、女房は、「……三年の間は、鴛鴦の衾の下で比翼の契り（夜は一緒に寢床で過

ごし)、ほんの少し姿が見えないだけでも、どうしたのだろう、何かあったのかしらと心配の限りを尽くして来ましたが、今、お別れしたら、またいつの世にて逢えるのでしょうか。夫婦の縁は『二世の縁』(この世とあの世で逢う縁)と申しますが、たとえこの世の契りが夢幻の儚いものであったとしても、必ず来世には一つ蓮の縁に生まれて来て下さい」と、さめざめと泣くのです。——これは、浦島太郎が「この地」を離れて「故郷」へと帰れば、再び、生きて「この世」で逢うことはもう出来ないと思っているからである。

そこで、女房は、自分の「身の上」を語るのである。それは、「……今は何を包み隠しませう。私は、この竜宮城の亀でございりますが、絵島が磯にて、あなた様にお命を助けていただき、その恩に報いようと思つて、このように夫婦となつたのでございませう。また、これは私の形見と思つて下さい」と言つて、左の脇から綺麗な箱を一つ取り出しては、「……決してこの箱は開けないで下さい」と言つて、渡すのでした。

それでは、一体、なぜどうして「……決してこの箱は開けないで下さい」と言うのだろうか？ それは、もし「玉手箱」を開けてしまえば、あつという間に「老人」になつて、やがて「死んでしまう」からである。それでは、なぜ、女房は、浦島太郎に「玉手箱」を敢えて「私の形見」として手渡したのだろうか？ それは、必ず「手渡さなければならぬもの」だからである。というのも、その「玉手箱」の中には「浦島太郎の寿命」が閉じ込められているのであり、もし、浦島太郎が「玉手箱」を開けなければ、恐らく、竜宮城の世界の「時間」で「千年生きられた」のであり、一方、その「玉手箱」を開けてしまえば、人間界の「実年齢」に戻つてしまい、あつという間に「老人」になつて、やがて「死んでしまう」のである。——さて、浦島太郎は、互いに名残を惜しみつつも、形見の箱を手にとって、故郷へと帰るのでした。

六、故郷へ帰ると

さて浦島は、故郷へ帰り見てあれば、人跡絶えはてて、虎ふす野辺となりけり。浦島これを見て、こはいかなる事やらんと思ひ、ある傍を見れば、柴の庵のありけるに立ち、「物いはん」といひければ、内より八十ばかりの翁出であひ、「誰にてわたり候ぞ」と申せば、浦島申しけるは、「此所に浦島の行方は候はぬか」といひければ、翁申すやう、「いかなる人にて候へば、浦島の行方をば御尋ね候やらん、不思議にこそ候へ。その浦島とやらんは、はや七百年以前の事と申し伝へて候」と申しければ、太郎大きに驚き、こはいかなる事ぞとて、そのいはれをありのままに語りければ、翁も不思議の思ひをなし、涙を流し申しけるは、「あれに見えて候古き塚、古き石塔こそ、その人の廟所と申し伝へてこそ候へ」とて指をさして教へける。太郎は泣く泣く、草深く露しげき野辺を分け、古き塚に参り、涙を流しかくなん、

かりそめに出でにし跡を来て見れば虎ふす野辺となるぞ悲しき

さて浦島太郎は、一本の松の木蔭に立ち寄り、呆れはててぞ居たりける。太郎思ふやう、亀が与へしかたみの箱、「あひかまへてあけさせ給ふな」といひけれども、今は何かせん、あけて見ばやと思ひ、見るこそくやしかりけれ。此箱をあけて見れば、中より紫の雲三すぢ上りけり。是を見れば、二十四五の齢も、忽ちに変りはてにける。(原文)

*

*

さて、浦島は故郷へ帰ってみると、人跡（人も家）も絶え果てて、虎伏す野辺（荒れ果てた野）になっていました。浦島は、これを見て、これはどうしたことだろうと思ひ、ふとある傍（かたはら）を見ると、そこに柴の庵（粗末な小屋）があつたのでそこに立ち、「……もしもし」と言うと、中から八十歳ぐらいの老人が出て来て、「……どなたですか」と聞くので、浦島が言うには、「……この辺りに住んでいた浦島という人をご存知ありませんか」と聞くと、その老人が申すには、「……（あなたは）どなたでしょうか。浦島の行方をお尋ねになるとは不思議なことです。その浦島という人が住んでいたのは、もう七百年も前のことだと伝え聞いております」と答えたので、浦島太郎は非常に驚いて、「……これはどういうことだろうか」と思つて、これまでのいきさつをありのままに語つたところ、老人も不思議なことだと思つて、涙を流して言うことには、「……あそこに見えている古い墓、古い石塔が、その浦島の墓所だと伝え聞いております」と言つて、指をさして教えてくれるのでした。太郎は、泣く泣く、草も深く露に繁く濡れた野辺を掻き分けて、古い墓に参り、涙を流して、このように（詠むのでした。）

かりそめに出でにし跡（故郷）に再び来て見れば虎ふす野辺となるぞ悲しき

さて、浦島太郎は、一本の松の木蔭に立ち寄つて呆然としていたが、太郎が思うには、「……亀が与えた形見の箱、それは『決して開けてはいけない』と言つていたが、今やそれが何になるう。開けてみよう」と思つて、開けて見てしまったことこそ惜しいことであり、この箱を開けてみると、中から紫の雲が三筋立ち昇りました。これを見ると、二十四、五歳（の若い姿）もたちまちに変わり果ててしまったのです。

*

*

さて、この有名な場面は、今日の『浦島太郎』の昔話の「内容」と、基本的にはそれほど変化していない部分であり、それは、「……浦島が故郷へ帰ってみると、人も家も絶え果てて、荒れ果てた野になっていた。浦島は、これを見て、これはどうしたことだろうと思ひ、そこで人（老人）に会つて、この辺りに住んでいた浦島という人をご存知ありませんかと聞くと、その人（老人）は、その浦島という人が住んでいたのは、もう七百年（昔話では三百年）も前のことだと言うので、浦島太郎は非常に驚いて、これはどうしたことかと思ひ、これまでのいきさつをありのままに語ると、老人は、あそこに見えている古い墓、古い石塔が、その浦島の墓所だと教えてくれる。浦島太郎は、ただ呆然としていたが、ふと自分の左の脇に持っていた『玉手箱』に気づき、決して開けてはいけないと言われていたが、その箱を開けてしまうと、その箱の中から『煙』が出て来て、あつという間に浦島太郎は老人になってしまう」という展開であり、今日の『浦島太郎』の昔話は、ここで終わっているかと思うが、御伽草紙の『浦島太郎』の場合には、次のような「内容」がさらに書き記されているのである。

七、その後は……

扱浦島は鶴になりて、虚空に飛び上りける。そもそも此浦島が年を、亀がはからひとして、箱の中に畳み入れにけり。さてこそ七百年の齢を保ちける。あけて見るなと有りしを、あけにけるこそ由なけれ。

君にあふ夜は浦島が玉手箱あけてくやしきわが涙かな

と歌にもよまれてこそ候へ。生有る物、いづれも情を知らぬといふことなし。いはんや人間の身として、恩をみて恩を知らぬは、木石にたとへたり。情深き夫婦は、二世の契と申すが、寔に有りがたき事どもかな。浦島は鶴になり、蓬莱の山にあひをなす。亀は甲に三せきのいわみをそなへ、万代を経しと也。扱こそめでたき様にも、鶴亀をこそ申し候へ。只人には情あれ、情の有る人は行末めでたき由申し伝へたり。其後浦島太郎は、丹後国に浦島の明神と顕れ、衆生済度し給へり。亀も同じ所に神とあらはれ、夫婦の明神となり給ふ。めでたかりけるためしなり。(完)

さて、浦島は、(死んで) 鶴になって大空へ飛んで行きました。というのも、そもそもこの浦島の年(年齢)というのは、亀が取り計らって「箱の中」に畳み入れていたのです。だからこそ、七百年もの間生きていられたのです。開けてはいけなと言われていたのを開けてしまったことが、いわば「実年齢」になった原因であったのです。

君にあふ夜は(浦島が玉手箱のように) あつという間に開けて(夜が明けて) くやしきわが涙かな、と、歌にも詠まれているのです。

命あるものは、みな情けを知らないということはない。ましてや人間の身であれば、恩を受けて恩を感じないのは、木や石に等しいものである。情愛の深い夫婦は、二世の契り(あの世でも夫婦になる)と申すが、誠に尊いことである。浦島は、鶴になって蓬莱の山で(亀と) 出逢い(愛)を交わす。亀は甲羅に「三つの祝い」を備えて、万年を生きたということである。だからこそ、めでたいものの「例」として「鶴・亀」と申すようになったのである。とにかく、人には情けがあるべきで、情けのある人は、その将来もめでたいものだ(この浦島太郎物語は) 言い伝えているのです。

その後、浦島太郎は、丹後国に浦島の明神として顕れ、衆生を救済された。一方、亀も同じ所に神として顕れ、夫婦の明神とおなりになった。実にめでたい事である。(完)

さて、「……浦島は、(死んで) 鶴になって大空へ飛んで行った」とある。これは、浦島太郎は、人間としての「寿命」は尽きたので、本来であれば、そのまま「あの世」へと行くところであるが、浦島太郎の場合には、もう一つ、竜宮城の世界の「寿命」も持つていて、浦島は、恐らく、「千年の寿命」であり、それゆえ、(人間としての) 死後、今度は、「鶴の姿」となって、残りの「三百年」を生きたことになるのである。それは、「……浦島は、鶴になって蓬莱の山で(亀と) 出逢い(愛)を交わす」ことになるが、ここで「三百年」過ぎした後、鶴の「千年の寿命」が尽きて、今度は、「……浦島太郎は、丹後国に浦島の明神として顕れ、衆生を救済された。一方、亀も同じ所に(万年を生きた後) 神として顕れ、夫婦の明神とおなりになった」ということである。

そして、この御伽草紙の『浦島太郎』という作品が、最も強く主張(言いたがっているところ)は、まさに「……命あるものは、みな情けを知らないということはない。ましてや人間の身であれば、恩を受けて恩を感じないのは、木や石に等しいものである。情愛の深い夫婦は、二世の契り(あの世でも夫婦になる)と申すが、誠に尊いことである。浦島は、鶴になって蓬莱の山で(亀と) 出逢い(愛)を交わし、亀は甲羅に三つの祝いを備えて、万年を生きたということである。だからこそ、めでたいものの『例』として『鶴・亀』と申すようになったのである。とにかく、人には情けがあるべきで、情けのある人は、そ

の将来もめでたいものなのである「と語っているのである。(完)
* *

竹取物語

竹取物語

一、かぐや姫の生い立ち

今は昔、たけとりの翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつつ、よろづのことにつかひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一すぢありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり。翁いふやう、「我朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になりたまふべき人なめり」とて手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻の嫗にあづけてやしなはず。うつくしきこと、かぎりなし。いとおさなければ、籠に入れてやしなふ。

たけとりの翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節をへだてて、よごとに、黄金ある竹を見つくることかさなりぬ。かくて、翁やうやうゆたかになりゆく。(原文)

* * *

今となつては昔のことであるが、竹取の翁という者がありました。野山に分け入つて竹を取つては、いろいろなことに使つていました。その名を讃岐の造と言いました。―ある日、その竹の中に、根元が光る竹が一つありました。不思議に思つて、近寄つて見てみると、竹筒の中が光つています。その筒の中を見ると、三寸(約九センチ)ぐらいの人が、たいそう可愛らしい様子でそこに居りました。翁が言うには、「……私が毎朝毎晩見る竹の中にいらつしやるので解りました。あなたは私の子になられるはずの人です」と言つて、手の平に入れて、家へと持つて帰り、妻の嫗にあづけて育てさせました。かわいらしいこと、この上もありません。たいそう幼いので、籠の中に入れて育てました。

竹取の翁は、竹を取るに、この子を見つけてのちに竹を取るに、節と節との間ごとに、黄金が入つた竹を見つくることかたび重なりました。こうして、翁は次第に裕福になつていきました。

二、かぐや姫の成長

この児、やしなふほどに、すくすくと大きになります。三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば、髪あげなどとかくして髪あげさせ、裳着す。帳の内よりもいささず、いつきやしなふ。この児のかたちのきよなること世になく、屋の内は暗き所なく光満ちたり。翁、心地悪しく苦しき時も、この子を見れば苦しきこともやみぬ。腹立たしきこともなぐさみけり。

翁、竹を取るに、久しくなりぬ。勢、猛の者になりけり。この子いと大きになりぬれば、名を、御室戸齋部の秋田をよびて、つけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫と、つけつ。このほど三日、うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけきはらず招び集へて、いとかしこく遊ぶ。(原文)

* * *

この幼児は、育てるうちに、どんどん大きく成長していく。三ヶ月になる頃には、もう

一人前の大きさの人になってしまったので、髪上げの祝いなどをあれこれとして、髪を結い上げさせ、裳を着せる。翁は、この子を帳の中からも一步も外に出さずに、大切に養い育てました。この子の容貌の美しいことはこの世にたぐいなく、家の中は暗い所がなく光に満ちていました。翁は気分が悪く苦しい時も、この子を見ると、苦しいこともなくなつてしまい、腹立たしいことも気が紛れてしまうのです。

翁は、(黄金の入った)竹を取ることが永く続きました。それゆえ、勢いが盛んな者(富豪)になりました。この子がたいそう大きくなったので、御室戸齋部の秋田を呼んで、名前を付けさせました。秋田は、「なよ竹のかぐや姫」と名づけるのでした。この時、三日間、宴会を開き、管弦を奏でて、歌や舞いやお酒や料理その他あらゆることで楽しみました。男という男の誰でもかまわずに招き集めて、たいそう盛大に遊びました。

三、世の男たちと五人の貴公子

世界の男、あてなるも、賤しきも、いかでこのかぐや姫を得てしがな見てしがなと、音に聞きめでて惑ふ。そのあたりの垣にも、家の門にも、をる人だにたはやすく見るまじきものを、夜は安きいも寝ず闇の夜にいでも、穴をくじり、垣間見、惑ひあへり。さる時よりなむ、「よばひ」とはいひける。

人の物ともせぬ所に惑ひ歩けども、何のしるしあるべくも見えず。家の人どもに物をだにいはむとて、いひかくれども、ことともせず。あたりを離れぬ君達、夜を明かし、日を暮らす、多かり。おろかなる人は、「用なき歩きは、よしなかりけり」とて来ずなりにけり。その中に、なほいひけるは、色好みといはるるかぎり五人、思ひやむ時なく、夜昼来けり。その名ども、石作の皇子、くらもちの皇子、右大臣阿倍御主人、大納言大伴御幸、中納言石上磨足、この人々なりけり。

世の中に多かる人をだに、すこしもかたちよしと聞きては、見まほしうする人どもなりければ、かぐや姫を見まほしうて、物も食はず思ひつつ、かの家に行きて、たたずみ歩きけれど、甲斐あるべくもあらず。文を書きて、やれども、返りごともせず。わび歌など書きておこすれども、甲斐なしと思へど、十一月・十二月の降り凍り、六月の照りはたたくにも、障らず来たり。

この人々、在る時は、たけとりを呼びいでて、「娘を我に賜べ」と、伏し拝み、手すりのためへど、「おのが生さぬ子なれば、心にもしたかはらずなむある」といひて、月日すぐす。かかれれば、この人々、家に帰りて、物を思ひ、祈りをし、願を立つ。思ひ止むべくもあらず。「さりとも、つひに男あはせざらむやは」と思ひて頼みをかけたり。あながちに心ざしを見え歩く。(原文)

*

*

世の中の男たちは、身分の高い者も、低い者も、どうにかしてかぐや姫を手に入れたい、妻にしてみたいと、噂に聞いて恋慕い心悩ますのです。そこら辺の垣根近くにいる人たちでも、家の門の近くにいる人たちでも、そう簡単には見ることが出来ないのに、夜は安眠もせず、見えるはずもない闇夜にさえ出かけて来て、垣根に穴を開けたりして、中を覗き、うろろうろしている。その時から、「よばひ」とは言うようになったのです。

普通の人が近づかないような場所にまで心を惑わしつつ行ってみるが、何の効果もあり

そうにも見えない。家の人たちに何か言うだけでも思つて言葉をかけてみるが、相手は、問題にしない。それでも家の周辺を離れぬ貴公子たちは、相変わらずそこで夜を明かし、日を暮らす者も多い。しかし、一方、熱意のそれほどでもない人は、「……むだな行動は、つまらないことだよ」と思つて、次第に来なくなつたのです。

そんな中で、依然として言い寄つていたのは、当代の色好みと言われる者だけ五人であり、諦めもせず、夜となく昼となく通つて来たのです。その名は、石作の皇子、くらもちの皇子、右大臣阿倍御主人、大納言大伴御幸、そして、中納言石上麿足、この人々だつたのです。

この人たちは、世間にくらでもいる程度の女でさえ、少しでも容貌がよいという噂を聞くと、わが物にしたがる人たちであつたので、かぐや姫の評判を聞いては、ただもうわが物にしたいくて、食う物も食わず思いつづけ、彼女の家へ行つて、歩き回つたりしたが、効果はありそうにもない。恋文を書いて送るのだが、返事もない。せつない恋心を歌に吐露して送るのだが、その甲斐もないと思うものの、十一月、十二月の雪が降り氷がはる時にも、六月の真夏の太陽が照り、雷が激しく轟く時にも、休まずにやつて来るのです。

この人々は、ある時は、竹取の翁を呼び出して、「……娘を私に下さい」と、伏して拝み、手をすり合わせて懇願するが、翁は、「……私が生んだ子ではないので、思う通りにはならないのです」と言つて、そのまま月日は過ぎていく。そういうことで、この人々は、家に帰つて物思いに耽り、神仏に祈り願をかける。かぐや姫への思いは立ち切れそうにもない。「……そうは言つても一生涯結婚させないことがあるのか」と思い、やはり期待している。そして、ことさらにかぐや姫への切なる心を見せるようにして歩きまわるのでした。

四、翁とかぐや姫との会話

これを見つけて、翁、かぐや姫にいふやう、「我が子の仏。変化の人と申しながら、ここら大ききまでやしなひたてまつる心ざしおろかならず。翁の申さむこと、聞きたまひてむや」といへば、かぐや姫、「何事をか、のたまはむことは、うけたまはらざらむ。変化の者にてはべりけむ身とも知らず、親とこそ思ひたてまつれ」といふ。翁、「嬉しくものたまふものかな」といふ。

「翁、年七十に余りぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人は、男は女にあふことをす。女は男にあふことをす。その後なむ門広くもなりはべる。いかでかさることなくはおはせむ」。かぐや姫のいはく、「なんぞか、さることかはべらむ」といへば、「変化の人といふとも、女の身持ちたまへり。翁の在らむかぎりはかうてもいますがりなむかし。この人々の年月を経て、かうのみいましつたたまふことを、思ひさだめて、一人一人にあひたてまつりたまひね」といへば、かぐや姫のいはく、「よくもあらぬかたちを、深き心も知らず、あだ心つきなば、後くやしきこともあるべきを、と思ふばかりなり。世のかしこき人なりとも、深き心ざしを知らずは、あひがたしとなむ思ふ」といふ。

翁のいはく、「思ひのごとくものたまふかな。そもそも、いかやうなる心ざしあらむ人にかあはむと思ふ。かばかり心ざしおろかならぬ人々にこそあめれ。かぐや姫のいはく、「なにばかりの深きを見むといはむ。いささかのことなり。人の心ざしひとしかんなり。

いかでか、中におとりまさは知らむ。五人の中に、ゆかしき物を見せたまへらむに、御心ざしまさりたりとて、仕うまつらむと、そのおはすらむ人々に申したまへ」といふ。「よきことなり」と受けつ。(原文)

*

*

これを見つけて、翁は、かぐや姫に言うには、「……私の大切な人よ。変化の人と申しても、このような大きさになるまで養い育て上げている私の気持ちは一通りではありません。この爺の申しますこと、なんとか聞いてくださいませんか」と言うと、かぐや姫は、「……おっしゃることは、どんなことでもうけたまわらないことがありますか。変化の者であるという身のほどをも考えず、親とばかり思い申しておりますのに」と言う。翁は、「……嬉しいことをおっしゃることよ」と言い、「……爺は、もう七十を越えていました。命のほどは今日とも明日とも分かりません。この世の中の人は、男は女と結婚をし、また女は男と結婚をする。そうしたのちに、一族が繁栄するのです。どうして結婚をせずままにいてよいものでしょうか」と言う。かぐや姫の言うには、「……どうしてまた結婚などをするのでしょうか」と聞くと、「……変化の人と言っても、あなたは女の身を持っていらつしやる。もつとも、この爺のいる間は独身のままでいられるでしょう。が、いまにどうにもならなくなります。この五人の人々が、長い間、いつもこのようにおいでになっておっしゃることをよく判断し、その中のお一人と結婚して差し上げなさい」と言う。かぐや姫の言うには、「……容貌が美しいというわけでもないのに、相手の愛情の深さを確かめもしないで結婚をして、あとで相手が浮気心を抱いたら、後悔するに違いないと思うだけなのです。この世の中で立派なお方であっても、愛情の深さを確かめないでは結婚しにくいと思つています」と言う。翁の言うには、「……私の考えと同じことをおっしゃる。しかし、一体、どんな愛情をお持ちの方と結婚しようとお思いか。どなたも並大抵でない愛情をお持ちの方々だと思つては、かぐや姫の言うには、「……どれほどの深い愛情を見たいと言いましようか。ほんの少しのことなのです。この五人の方々の愛情は、同程度のようにうかがわれます。このままでどうして五人の中の優劣が分かりましようか。五人の中で、私が見たいと思う品物を目の前に見せてくださる方に、ご愛情が優つていられるとお仕えいたしまししようと、そう、そこにいらつしやるらしい方々に申し上げてください」と言う。翁は、「……よいことだ」と承知するのです。

五、五人の貴公子にそれぞれ難題を

日暮るるほど、例の集りぬ。あるいは笛を吹き、あるいは歌をうたひ、あるいは歌声をし、あるいは嘯を吹き、扇を鳴らしなどするに、翁、いでて、いはく、「かたじけなく、穢げなる所に、年月を経てものしたまふこと、きはまりたるかしこまり」と申す。さて、「翁の命、今日明日とも知れぬを、かくのたまふ君達にも、よく思ひさだめて仕うまつれ」と申せば、「ことわりなり。いづれも劣り優りおはしまさねば、御心ざしのほどは見ゆべし。仕うまつらむことは、それになむさだむべき」といへば、「これよきことなり。人の御恨みもあるまじ」といふ。五人の人々も、「よきことなり」といへば、翁入りていふ。

かぐや姫、「石作の皇子には、仏の御石の鉢といふ物あり。それを取りて賜へ」とい

ふ。「くらもちの皇子には、東の海に蓬萊といふ山あるなり。それに、銀を根とし、金を茎とし、白き玉を実として立てる木あり。それ一枝折りて賜はらむ」といふ。「いま一人には、唐土にある火鼠の皮衣を賜へ」。大伴の大納言には、龍の頸に五色に光る玉あり。それを取りて賜へ。石上の中納言には、「燕の持たる子安の貝取りて賜へ」といふ。翁、「難きことにこそあなれ。この国に在る物にもあらず。かく難きことをば、いかに申さむ」といふ。かぐや姫、「なにか難からむ」といへば、翁、「とまれかくまれ、申さむ」といひて、「かくなむ。聞ゆるやうに見せたまへ」といへば、皇子たち、上達部聞きて、「おいらかに（素直に）、『あたりよりだにな歩き』とやはのたまはぬ」といひて、倦んじて、皆帰りぬ。（原文）

*

*

日が暮れる頃に、いつものように例の五人が集まった。ある者は笛を吹き、ある者は歌を歌い、ある者は声歌をし、ある者は口笛を吹き、ある者は扇で拍子をとりにどしている時に、翁が出て来て言うことには、「……もつたいたなくも、この穢らしい所に、長い間お通いになること、この上なく恐縮です」と申してから、「……爺の命は今日明日とも知れぬものだが、こうまで仰る若様方に、よく考えて決めてお仕えなさい」と申すと、「……もつともです。五人の方々ほどなたも優劣がつけがたくていらつしやるので、私の見たいものさへご用意くだされば、ご愛情のほどがはつきりするでしょう。お仕えするのは、その結果によって決めましょう」と言うので、私も、「……それはよいことだ。そうすれば、他の人のお恨みもあるまいと言いました」と言う。五人の人々も、「結構だ」と言うので、翁は中に入って、かぐや姫にその由を告げる。

かぐや姫は、「……石作の皇子には、仏の石の鉢という物があります。これを取って来て下さい」と言う。「……くらもちの皇子には、東の海に蓬萊という山があるということです。そこに銀を根とし、金を茎とし、白き玉を実として立っている木があります。それを一枝折ってきて頂きたい」と言う。「……いま一人には、唐土にある火鼠の皮衣を下さい。大伴の大納言には、龍の頸に五色に光る玉があります。それを取って来て下さい」と言う。石上の中納言には、「……燕の持っている子安貝を取って来て下さい」と言う。翁は、「……どれもみな難しいことのようなだ、この日本にあるものではない。こんな難しいことを（五人に）どうして申せましょう」と言うので、かぐや姫は、「……どうして難しいことがありますし」と言うので、翁は、「……とにかく、申しあげてみよう」と言ひ出てきて、「……このように申しております。娘の申すような（品物を）お見せください」と言ひと、皇子や上達部たちは、これを聞いて、「……素直に、この付近を通って歩くことさえ許さない」と仰つて下さる方がまだよいのに」と言ひて、がつくりとなつて、みな帰って行きました。

*

*

五人の求婚者と五つの難題

- 一、石作の皇子と仏の御石の鉢
- 二、くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝
- 三、阿倍の右大臣と火鼠の皮衣
- 四、大伴の大納言と龍の頸の玉
- 五、石上の中納言と燕の子安貝

*

*

そして、六人目の求婚者が、まさに

六、帝であり、

もし、かぐや姫が「月の都の人」でなかったならば、恐らく、帝と「結婚」(側室)になっていた可能性は極めて高いということであり、その根拠は、二人は、親しく「文」(恋文)を交わしているのであり、一方、最初の色好みの五人に対しては、かぐや姫は、最初から全く問題にもしていなかったということである。

六、石作の皇子と仏の御石の鉢

六、石作の皇子と仏の御石の鉢

なほ、この女見では世にあるまじき心地のしければ、「天竺に在る物も持て来ぬものか
は」と思ひめぐらして、石作の皇子は、心のしたくある人にて、天竺に二つとなき鉢を、
百千里のほど行きたりとも、いかでか取るべきと思ひて、かぐや姫のもとには、「今日
なむ、天竺に石の鉢取りにまかる」と聞かせて、三年ばかり、大和の国十市の郡にある
山寺に賓頭盧の前なる鉢の、ひた黒に墨つきたるを取りて、錦の袋に入れて、作り花の
枝につけて、かぐや姫の家に持て来て、見せければ、かぐや姫あやしがりて見れば、鉢の
中に文あり。ひろげて見れば、

海山の道に心をつくしはてないしのはちの涙ながれき（皇子の歌）

かぐや姫、光やあると見るに、蛩ばかりの光だになし。

置く露の光をだにもやどさまし小倉の山にて何もとめけむ（姫の歌）

とて、返しいだす。鉢を門に捨てて、この歌の返しをす。

白山にあへば光の失するかとはちを捨てても頼まるるかな（皇子の歌）

とよみて、入れたり。かぐや姫、返しもせずなりぬ。耳にも聞き入れざりければ、いひ
かかづらひて帰りぬ。かの鉢を捨てて、またいひけるよりぞ、面なきことをば、「はちを
すつ」とはいひける。（原文）

*

*

さて、そうは言っても、この女と結婚しないではこの世に生きていられないような気持
がしたので、「……天竺にある物でも持つて来られないことはないだろう」と、いろいろ
考えて、石作の皇子は、見通しの利く人であったので、「……天竺に二つとない鉢を、百
千里の距離を行ったところで、どうして取ることができようか」と思つて、かぐや姫の
所には、「……今日、天竺へ石の鉢を取りに出かけます」と知らせ、三年ほど後に、大和
の国十市の郡にある山寺の、賓頭盧の前にある鉢の真黒に煤墨のついたのを取つて、錦
の袋に入れ、造花の枝につけて、かぐや姫の家に持つて来て見せたので、かぐや姫があ
やしがりて見ると、鉢の中に手紙がある。広げてみると、

海山の道に心を尽くし果て、その果てしない旅で泣いて、石の鉢を手に入れるために
は、血の涙まで流がしたのですよ。……

かぐや姫は、光はあるかしらと見ると、蛩ほどの光すらない。

せめて、お流しになった涙の露ほどの光でもあればよいのに。ほの暗いだけのこん
な品物では、あなたは小倉山で一体何をお求めになったのでしょうか、と返事をして、そ
の鉢を突き返した。——皇子はその鉢を門口に捨てて、この歌の返歌をする。

白山のように光り輝く貴方に会つて、この鉢も光を失ったかどがっかりして鉢を捨て
ましたが、それでも、貴方の色よいお返事を頼みにしていますよ、と詠んで、送り入れた。

かぐや姫は、もう返歌もしなくなつた。耳にも聞き入れなかつたので、皇子は弁解、口
実を口にしながら帰つてしまつた。あの偽りの鉢を捨ててからも、まだあつかましくも
「頼みにしていますよ」などと言つたことが元になつて、あつかましいことを「はちを捨
てる」と言うのである。

*

*

七、くぼもちの皇子と蓬萊の玉の枝

七、くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝 其の一（玉の枝の偽造）

くらもちの皇子は、心たばかりある人にて、朝廷には、「筑紫の国に湯あみにまからむ」とて暇申して、かぐや姫の家には、「玉の枝取りになむまかる」といはせて、下りたまふに、仕うまつるべき人々、みな難波まで御送りしける。皇子、「いと忍びて」とのたまはせて、人もあまた率ておはしませず。近う仕うまつるかぎりしていだたまひぬ。御送りの人々、見たてまつり送りて帰りぬ。「おはしましぬ」と人には見えたまひて、三日ばかりありて、漕ぎ帰りたまひぬ。

かねて、事みな仰せたりければ、その時、一の宝なりける鍛冶工匠六人を召しとりて、たはやすく人寄り来まじき家を作りて、竈を三重にしこめて、工匠らを入れたまひつつ、皇子も同じ所に籠りたまひて、領らせたまひたるかぎり十六所をかみに、蔵をあげて、玉の枝を作りたまふ。

かぐや姫のたまふに違はず作りいでつ。いとかしこくたばかりて、難波にみそかに持ていでぬ。「船に乗りて帰り来にけり」と殿に告げやりて、いといたく苦しがりたるさましてゐたまへり。迎へに人多く参りたり。玉の枝をば長櫃に入れて、物おほひて持ちて参る。いつか聞きけむ、「くらもちの皇子は優曇華の花持ちて上りたまへり」とののしりけり。これをかぐや姫聞きて、我はこの皇子に負けぬべしと、胸つぶれて思ひけり。（原文）

*

*

くらもちの皇子は、策略に秀でた人で、朝廷には、「……筑紫の国に湯治に参るつもりです」と言つて、休暇を申し出て、かぐや姫の家には、「……玉の枝を取りに参ります」と、（使いの者に）言わせて、都を下るのに、彼に仕えている人々は、みな難波までお見送りをしました。皇子は、「……できるだけ人目を避けて」とおっしゃつて、人もそれほど多くは連れていかなかった。身近に使えるものだけを選んで出発した。見送りの人たちは、見送りが終わった後、京へ帰つて行つた。このように「出発なされた」と人には見られるようにしておいて、三日ほど経つてから、船で帰つてこられたのである。

かねてから、なすべきことはすべて命令しておかれたので、その時、その当時国宝級の鍛冶工六人を招集して、簡単には人が寄りつけないような家を作り、竈の周辺を三重に囲つて、鍛冶工たちをすべてその家に入れながら、皇子自身も同じところに籠つて、所領の莊園の十六カ所をはじめ、蔵の全財産を投じて「玉の枝」をお作りになつた。

そのようにして、かぐや姫のおっしゃると寸分違はず作り上げてしまつた。大変上手に計略をめぐらし、難波の浦（港）へこっそりと持ち出した。「……船に乗つて帰つて来たよ」と自分の御殿に連絡をやり、とても苦しがつている風を装いすわつておられる。

お迎えに多くの人たちが来て、玉の枝は長櫃に入れ、覆いをかぶせて京へ持つて帰る。いつ聞いたのか、人々は、「……くらもちの皇子は、優曇華の花を持つて上京なされた」と騒ぎ合っている。これをかぐや姫が聞きつけて、「……この皇子には負けてしまふかも知れない」と、胸がつぶれるほどに思い悩むのであつた。

七、くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝 其の二（かぐや姫邸に持参）

かかるほどに、門を叩きて、「くらもちの皇子おはしたり」と告ぐ。「旅の御姿ながら

おはしたり」といへば、あひたてまつる。皇子ののたまはく、「命を捨ててかの玉の枝持ちて来たるとて、かぐや姫に見せたてまつりたまへ」といへば、翁持ちて入りたり。この玉の枝に、文ぞつけたりける。

いたづらに身はなしつとも玉の枝を手折らでさらに帰らざらまし

これをもあはれとも見てをるに、たけとりの翁、走り入りていはく、「この皇子に申したまひし蓬萊の玉の枝を、一つの所あやまたず持ておはしませり。何をもちて、とかく申すべき。旅の御姿ながら、我が御家へも寄りたまはずしておはしましたり。はや、この皇子にあひ仕うまつりたまへ」といふに、物もいはず、頬杖をつきて、いみじく嘆かしげに思ひたり。(原文)

*

*

こうしているうちに、(くらもちの従者)が門を叩いて、「……くらもちの皇子がいらつしやいました」と、告げる。「……旅のお姿のままおいでになりましたよ」と言うので、翁がお会い申し上げると、皇子は、「……命を捨てるほどの苦勞をして、あの玉の枝を持って帰って来ました」と言い、「……かぐや姫にお見せください」と言うので、翁は、それを持って、かぐや姫の部屋に入ったが、その玉の枝には手紙が付けてあった。

この身はたとえむなく成り果てても、玉の枝を手折らずに帰って来るようなことは、決してなかったでしょう。

この歌も(玉の枝同様)趣あるものと思つて見てみると、竹取の翁が走り込んで来て言うには、「……この皇子に申し上げなされた蓬萊の玉の枝を、一点の違いもない形で持つていらつしやったのです。今さらどんな理由をあれこれ申せましようか。しかも、旅のお姿のままでご自宅にも寄らずにいらつしやったのです。早くこの皇子と結婚なされてお仕え申し上げなさい」と言うので、かぐや姫は、物も言わずに頬杖をついて、たいそう嘆かわしそうに物思いに沈んでいるのでした。

七、くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝 其三(偽りの苦勞談)

この皇子、「今さへ、なにかといふべからず」といふままに、縁に這ひのぼりたまひぬ。翁、「理に思ふ。この国に見えぬ玉の枝なり。このたびは、いかでか辞びまうさむ。人さまもよき人におはす」などいひゐたり。かぐや姫のいふやう、「親ののたまふことをひたぶるに辞びまうさむことのいとほしさに」と、取りがたき物を、かくあさましく持て来ることを、ねたく思ふ。翁は、閨のうち、しつらひなどす。

翁、皇子に申すやう、「いかなる所にかこの木はさぶらひけむ。あやしくうるはしくめでたき物にも」と申す。皇子、答へてのたまはく、「一昨々年の二月の十日頃に、難波より船に乗りて、海の中にいでて、行かむ方も知らずおぼえしかど、思ふこと成らで世の中に生きて何かせむと思ひしかば、ただ、むなしき風にまかせて歩く。命死なばいかはせむ、生きてあらむかぎりかく歩き、蓬萊といふらむ山にあふやと、海に漕ぎただよひ歩いて、我が国のうちを離れて歩きまかりしに、ある時は、浪荒れつつ海の底にも入りぬべく、ある時には、風につけて知らぬ国に吹き寄せられて、鬼のやうなるもので来て、殺さむとしき。(原文)

*

*

この皇子は、「……今さら、あれこれ言うべきではない」と言いながら、縁側に這い上がってしまわれた。翁は、もつともだと思つて、「……これは日本では見ることができない玉の枝です。もう今度はどうしてお断り申せましょうか。人柄も良い方でいらつしやる」などと翁は言つて、かぐや姫の前にすわつて居る。

かぐや姫の言うには、「……親がおつしやることを、ひたすらにお断り申し上げることが気の毒ゆえ、あのように申しましたのに」と、取ることが難しいものであるのに、このように意外なほどにちゃんと持つて来たことを忌々しく思う。

翁は、すっかりその気になつて、寢室の中を片付け準備などしている。翁が、皇子に申し上げるには、「……どんな所に、この木はございましたのでしょうか。不思議なほど麗しく、すばらしい物でございますね」と申し上げる。皇子が答えておつしやるには、「……一昨々年の二月の十日頃に、難波から船に乗つて、海上に出て、目的とする方向すら分からぬまま心細く思つたが、自分の思うことが成就できないで、世の中に生きていても仕方がないと思つたので、ひたすらに吹くか分かりもしない風に任せて航行しました。命がなくなれば仕方ないが、生きている限りはこのように航海を続け、いつかは蓬菜とかいう山に会うだろうと思ひ、海を漕ぎ漂つて、わが日本の領海を離れて行きましたところ、ある時は、浪が荒れ続いて海底に沈みそうになり、ある時は、風の方向のままに知らぬ国に吹き寄せられ、鬼のような怪物が目の前に立ち現われて、私を殺そうとしました。

七、くらもちの皇子と蓬菜の玉の枝 其の四（海難と蓬菜）

ある時には、来し方行く末も知らず、海にまぎれむとしき。ある時には、糧つきて、草の根を食物としき。ある時は、いはむ方なくむくつけげなる物来て、食ひかからむとしき。ある時には、海の貝を取りて命をつぐ。旅の空に、助けたまふべき人もなき所に、いろいろの病をして、行く方、空もおぼえず。船の行くにまかせて、海に漂ひて、五百日といふ辰の時ばかりに、海のなかに、はつかに山見ゆ。船の楫をなむ迫めて見る。海の上にただよへる山、いと大きにてあり。その山のさま、高くうるはし。これや我が求むる山ならむと思ひて、さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐりをさしめぐらして、二三日ばかり、見歩くに、天人のよそほひしたる女、山の中よりいで来て、銀の金鉢を持ちて、水を汲み歩く。これを見て、船より下りて、『この山の名を何とか申す』と問ふ。女、答へていはく、『これは、蓬菜の山なり』と答ふ。これを聞くに、嬉しきことかぎりなし。この女、かくのたまふは誰ぞと問ふ、『我が名はうかんるり』といひて、ふと、山の中に入りぬ。

（原文）

*

*

またある時には、海上で方向を見失つて後先も分からなくなり、そのまま海で遭難しうになりました。ある時には、食糧が尽き果て、偶然上陸した島で草の根を取つて食糧にしました。またある時は、言ひようもなく気味悪い妖怪が出現して、私に食ひかかろうとしました。またある時は、海の貝を取つて命をつないだこともあります。旅先で、助けにくださる人もないような所で、種々の病氣をして、行く方向すら定かではなくなりました。こんな調子で、ただ船の行くのにまかせて海上を漂流していましたが、海に出て五百

日目という日の午前八時頃に、海上にかすかに山が見えます。船の楫を島に近づけるように操作して、それを見ると、海上に漂っているその山はたいそう大きく、その山の様子は、高くうるわしい。これこそ私が求めている山であろうと思つたが、やはり恐ろしく思われ、山の周囲を漕ぎめぐらせて、二、三日ほど様子を見ながら航行させていると、天人の服装をした女が、山の中から出てきて、銀のお椀を持って水を汲み歩いている。これを見て、船から降りて、「……この山の名は何と申しますか」と尋ねると、女が答えて言うには、『……これは蓬莱の山です』と答える。これを聞いた時、嬉しきは限りなく、『……このようにおっしゃるあなたは誰ですか』と問うと、この女は、『……私の名はうかんるり』と言つて、すうつと山の中に入つてしまいました。

七、くらもちの皇子と蓬莱の玉の枝 其の五（蓬莱の山）

その山、見るに、さらに登るべきやうなし。その山のそばひらをめぐれば、世の中になき花の木も立てり。金、銀、瑠璃色の水、山より流れいでたり。それには、色々の玉の橋わたせり。そのあたりに照り輝く木も立てり。その中に、この取りて持ちてまうで来たりしはいとわろかりしかども、のたまひしに違はましかばとこの花を折りてまうで来たるなり。山はかぎりなくおもしろし。世にたとふべきにあらざりしかど、この枝を折りてしかば、さらに心もとなくて、船に乗りて、追風吹きて、四百余日になむ、まうで来にし。大願力にや。難波より、昨日なむ都にまうで来つる。さらに、潮に濡れたる衣だに脱ぎかへなでなむ、こちまうで来つる」とのたまへば、翁、聞きて、うち嘆きてよめる、

くれたけのよよのたけとり野山にもさやはわびしきふしをのみ見し

これを、皇子聞きて、「ここの日頃思ひわびはべりつる心は、今日なむ落ちぬる」とのたまひて、返し、「我が袂今日かわければわびしさの千種の数も忘れぬべし」とのたまふ。（原文）

その山は、見ると、全く登る手段がないほどに険しい。その山の崖下をめぐつてゆくと、この世の物とも思えぬ花の木が多く立っている。金色、銀色、瑠璃色の水が、山から流れ出ている。その川には様々な色の玉（宝玉）で出来た橋が渡してあり、そのあたりに照り輝く木々が立っている。その中で、ここにいま持参したのは、たいそう劣っていたのですが、せつかくよいのを取つてきても、あなたのおっしゃたのにびつたりでなければ困るだろうと思ひまして、この花を折つて持参したのです。

山は、限りなくすばらしい。世の中にたとえるものがないほどですが、この枝を折つてしまったので、ただもう落ち着かなく、船に乗って追い風が吹いて、四百余日で帰つて参りました。ほんとうに仏の大願力のお陰でありましょうか。昨日、難波から都へ帰つて参りました。その上、潮で濡れた衣装をも着替えもしないで、こちらに直接参上しました」とおっしゃると、翁は、これを聞いて、嘆息して歌を詠んだ。

長い年月竹取りをして年老いたこの竹取りですが、野山での竹を取る生活でこんなに苦しい目ばかりを見たことはございませんよ。

これを聞いて皇子は、「……長い間苦しく思つていました心は、今日その言葉を聞いて、

すつかり落ち着きました」とおっしゃって、返す歌は、「……今まで海水や涙で濡れていた私の袂は、望みを叶えた今日、すつかり乾いたので、これまでの数々の辛苦も自然に忘れてしまおうでしょう」とおっしゃるのでした。

七、くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝 其の六（工匠の訴え）

かかるほどに、男ども六人つらねて、庭にいで来たり。一人の男、文挟みに文をはさみて、申す、「内匠寮の工匠、あやべの内麻呂申さく、玉の木を作り仕うまつりしこと、五穀を断ちて、千余日に力をつくしたること、すくなからず。しかるに、禄いまだ賜はらず。これを賜ひて、わろき家子に賜はせむ」といひて、ささげたり。たけとりの翁、この工匠らが申すことは何ごとぞとかたぶきををり。皇子は、我にもあらぬ気色にて、肝消えぬたまへり。これを、かぐや姫聞きて、「この奉る文を取れ」といひて、見れば、文に申しけるよう、

「皇子の君、千日、いやしき工匠らと、もろともに、同じ所に隠れおたまひて、かしこき玉の枝を作らせたまひて、官も賜はむと仰せたまひき。これをこの頃案ずるに、御使とおはしますべきかぐや姫の要じたまふべきなりけりとうけたまはりて。この宮より賜はらむ」と申して、「賜はるべきなり」といふを、聞きて、かぐや姫、暮るるままに思ひわびつる心地、笑ひさかえて、翁を呼びとりていふやう、「まこと蓬萊の木かどこを思ひつれ。かくあさましきそらごとにてありければ、はや返したまへ」といへば、翁答ふ、「さだかに作らせたる物と聞きつれば、返さむこと、いとやすし」と、うなづきををり。かぐや姫の心ゆきはてて、ありつる歌の返し、

まことかと聞きて見れば言の葉をかざれる玉の枝にぞありける

といひて、玉の枝も返しつ。（原文）

*

*

こうしているうちに、男たち六人、連れ立って庭に現われた。一人の男が文挟みに文を挟んで訴えるには、「……内匠寮の工匠、漢部の内麻呂が申し上げます。玉の木を作るのに、五穀を断つて千日余り力を尽くしたことは、並大抵のことではありません。ところが、未だに報酬をいただいております。報酬をいただいて、未熟な弟子に与えたいのです」と言つて、文挟みを捧げる。竹取りの翁は、この工匠たちの申すことは何事かと首を傾げている。皇子は、茫然自失のていで、肝を潰して座っておられる。これをかぐや姫が聞いて、「……この工匠が差し出している文を取れ」と言つて、取らせて、見ると、その文で訴えていることは、「……皇子の君は、千日の間、身分の低い工匠たちとご一緒に、同じ所に隠れ住み、立派な玉の枝を作らせなさつて、でき上がったら官職を授けようとおっしゃいました。このことをこの頃になつて考えてみますと、御側室になられるはずのかぐや姫が御要望なされているとお聞きしましたので、このお邸からいただきましたのです」と、文に書いてあり、口でも、「……当然いただくべきものです」と言っているのを聞いて、かぐや姫は、日が暮れるにつれて、「……皇子と契らねばならぬのか」と思い悩み苦しんでいた心は晴れて、明るく笑つて、翁を呼び寄せて言うには、「……ほんとうに蓬萊の木かと思つていましたが、このようなあきれた偽りごとだったのですから、早くお返ししてください」と言うと、翁が答えるには、「……確かに、作らせたものだとお聞きしました

ので、お返しすることは、いとも簡単なことです」と頷いておられる。かぐや姫の心はすっかり晴れて、さつきの皇子の歌の返し歌として、

本當の玉の枝かと皇子の話を聞いて見ておりましたが、言の葉で飾り立てた偽りの玉の枝でございました、と言つて、歌とともに玉の枝も返してしまわれた。

七、くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝 其の七（皇子のその後）

たけとりの翁、さばかり語らひつるが、さすがにおぼえて眠りを。皇子は、立つもはした、あるもはしたにて、ゐたまへり。日の暮れぬれば、すべりいでたまひぬ。

かの愁訴せし工匠をば、かぐや姫呼びすゑて、「嬉しき人どもなり」といひて、禄いと多く取らせたまふ。工匠らみじくよろこびて、「思ひつるやうにもあるかな」といひて、帰る。道にて、くらもちの皇子、血の流るるまで打ぜさせたまふ。禄得し甲斐もなく、みな取り捨てさせたまひてければ、逃げうせにけり。

かくて、この皇子は、「一生の恥、これに過ぐるはあらじ。女を得ずなりぬるのみにあらず、天下の人の、見思はむことのはづかしきこと」とのたまひて、ただ一所、深き山へ入りたまひぬ。官司、さぶらふ人々、みな手を分ちて求めたてまつれども、御死にもやしたまひけむ、え見つけたてまつらずなりぬ。皇子の、御供に隠したまはむとて、年頃見えたまはざりけるなり。これをなむ、「たまさかに」とはいひはじめける。（原文）

一方、竹取りの翁は、あれほどまで皇子と意気投合していたことが、さすがに気まずく思われて、眠つたような顔をして座っている。当の皇子は、立つのも落ち着かず、座っているのも落ち着かない様子で座っておられる。そして、日が暮れたので、これ幸いと、こつそり抜け出してしまわれた。

あの訴えた工匠を、かぐや姫が呼んで、庭に控えさせ、「……嬉しい人たちだこと」と言つて、ご褒美をたくさんお与えになる。工匠どもはたいそう喜んで、「……期待していた通りだった」と言つて、帰る。その帰り道で、くらもちの皇子が、工匠たちを血が流れるまで打たさせる。工匠たちは褒美を得た甲斐もなく、皇子がみな取り上げて、捨てさせなされたので、無一文になつて逃げ失せてしまった。

さて、この皇子は、「……一生の恥、これに勝るものはあるまい。女を自分のものに出来なかつたばかりでなく、世間の人が自分を見、いろいろと思うのが恥ずかしくてならぬ」とおっしゃつて、ただ一人で、深い山の中に入つてしまわれた。

お邸の執事やお仕えしている人々が、みな手分けをして、お探し申し上げたが、お亡くなりになつたのだから、見つけ申し上げぬままになつてしまった。それは、皇子がご家来の前から自分の姿をお隠しにならうと思つて、何年もの間、姿をお見せにならなかつたのです。このことから、「たまさかる」（魂が抜けたようにぼんやりとしてうつけもののような状態になること）とは言い始めたのです。

*

*

八、阿倍あの右大臣べと火鼠ひの皮衣ねずみの皮衣かわぎぬ

八、阿倍の右大臣と火鼠の皮衣 其の一（皮衣の入手方法）

右大臣安倍御主人は、財豊かに家広き人にておはしけり。その年来たりける唐土船の王けいと言ふ人のもとに文を書きて、「火鼠の皮といふなる物、買ひておこせよ」とて、仕うまつる人の中に、心確かなるを選びて、小野のふさもりといふ人をつけてつかはす。持て到りて、かの唐土にをる王けいに金をとらす。王けい、文をひろげて見て、返りごと書く。

「火鼠の皮衣、この国になき物なり。音には聞けども、いまだ見ぬ物なり。世にある物ならば、この国にも持てまうで来なまし。いと難き交易なり。しかれども、もし、天竺に、たまさかに持て渡りなば、もし長者のあたりにとぶらひ求めむに。なきものならば、使にそへて金をば返したてまつらむ」といへり。

かの唐船来けり。小野のふさもりまうで来て、まう上るといふことを聞きて、歩み疾うする馬もちて走らせ迎へさせたまふ時に、馬に乗りて、筑紫よりただ七日にまうで来た。文を見るに、いはく、

「火鼠の皮衣、からうじて人をいだしめて求めて奉る。今の世にも昔の世にも、この皮は、たやすくなき物なりけり。昔、かしこき天竺の聖、この国に持て渡りてはべりける、西の山寺にありと聞きおよびて、朝廷に申し、からうじて買ひ取りて奉る。価の金少しと、国司、使に申ししかば、王けいが物くはへて買ひたり。いま、金五十両賜はるべし。船の帰らむにつけて賜ひ送れ。もし、金賜はぬものならば、かの衣の質、返したべ」といへることを見て、「なに仰す。いま、金少しにこそあなれ。嬉しくしておこせたるかな」とて、唐土の方に向ひて、伏し拝みたまふ。（原文）

*

*

右大臣安倍御主人は、財産が豊かで、一門が繁栄している人でありました。その年に日本にやって来た唐土の船の王慶という人のもとに手紙を書き、「……火鼠の皮というものを買って送って下さい」と、仕えている人の中から考えのしっかりしている者を選んで、その小野房守という人に手紙を持たせて派遣する。房守はその手紙を持って唐土に到着して、その唐土の王慶に手紙と供に金を受け取らせる。王慶は手紙を広げて見て、返事を書く。「……火鼠の皮衣は、唐土（唐）にはないものです。噂には聞いていますが、まだ見たことがない物です。（もし）世の中に存在する物ならば、天竺（インド）の人たちがこの国（唐）にきつと持って参るでしょう。これは何とも難しい交易です。しかし、（もし産地から）天竺にたまたま持って入国して来るものがあつたら、もしかすると、長者の家などを尋ねて行って求めて見ましよう。もしこの世に無いものであれば、使いの者に金を持たせてお返し申し上げましよう」と手紙に書いてある。

その唐土の船がやって来た。小野房守が日本へと帰国して、都へ上京するということを知り、右大臣は、使者を足の速い馬で走らせて迎えさせようとした時に、房守はその馬に乗って筑紫から何と七日間でやって来た。持参した王慶からの手紙を見ると、次のように書いてある。「……火鼠の皮衣は、やつとのことて人を派遣して手に入れましたのでお届けします。今の世にも昔の世にも、この皮は容易に手に入らぬ物だったので、尊い天竺の聖者がこの国（唐）に持って渡って来られたものが、西の山寺にあると聞いて、朝廷に申して、やつとのことて買い取つてこのように持参するのです。『……代価の金額

が少ない』と、(唐の) 国司が使いの者に申しましたので、この王慶の物(お金)を加えて買ったのです。ですから、もう五十兩の金を頂かねばなりません。船が帰る時、その船に託してお送り下さい。もし、金を頂けないのであれば、あの皮衣をお返し下さい」と書いてあるのを見て、右大臣は、「……何をおっしゃる。あと僅かな金のことだよ。嬉しいことによく送って来てくれたものだ」とおっしゃって、唐土の方に向かって伏し拝みなさる。

八、阿倍の右大臣と火鼠の皮衣 其二(皮衣入れたる箱)

この皮衣入れたる箱を見れば、くさぐさのうるはしき瑠璃を色へて作れり。皮衣を見れば、金青の色なり。毛の末には、金の光し輝きたり。宝と見え、うるはしきこと、ならぶべき物なし。火に焼けぬことよりも、きよらなることかぎりなし。「うべ、かぐや姫好もしがりたまふにこそありけれ」とのたまひて、「あな、かしこ」とて、箱に入れたまひて、物の枝につけて、御身の化粧いとたくして、やがて泊りなむものぞとおぼして、歌よみくはへて、持ちていましたり。その歌は、

かぎりなき思ひに焼けぬ皮衣 袂かわきて今日こそは着め
といへり。(原文)

*

*

右大臣、この皮衣を入れてある箱を見ると、様々な美しい瑠璃を取り混ぜ彩色して作つてある。皮衣を見ると紺青の色であり、毛の先には金色の光りが輝いている。まさに宝物と見えて、他に並ぶべきものもない。火に焼けないということが特徴であるが、何より華麗であることが最高である。右大臣は、「……なるほど、かぐや姫が欲しがりなさるほどの物だわい」とおっしゃって、「……ああ、もつたいたい」と言つて、箱にお入れになつて、何かの木の枝につけ、ご自身の化粧も入念になさり、「……このまま婿としてかぐや姫邸に泊まり込むことになろうよ」とお思いになつて、その木の枝に歌を添えて、お持ちになつている。その歌は、

あなたを限りなく思う「思ひ」の火、その火にも焼けない皮衣を手に入れ、今は涙に濡れた袂も乾いて、今日こそ、着ていただけでしようねと書いてある。

八、阿倍の右大臣と火鼠の皮衣 其三(かぐや姫に見せる)

家の門に持て到りて、立てり。たけとりいで来て、取り入れて、かぐや姫に見す。かぐや姫の、皮衣を見て、いはく、「うるはしき皮なめり。わきてまことの皮ならむとも知らず」。たけとり、答へていはく、「とまれかくまれ、まづ請じ入れたてまつらむ。世の中に見えぬ皮衣のさまなれば、これをと思ひたまひね。人ないたくわびさせたてまつらせたまひそ」といひて、呼び据ゑたてまつれり。

かく呼び据ゑて、このたびはかならずあはむと媼の心にも思ひをり。この翁は、かぐや姫のやもめなるを嘆かしければ、よき人にはあはせむと思ひはかれど、せちに、「否」といふことなれば、えしひねば、理なり。かぐや姫、翁にいはいはく、「この皮衣は、火に焼かむに、焼けずはこそ、まことならめと思ひて、人のいふことにも負けぬ。『世になき物

なれば、それをまことと疑ひなく思はむ』とのたまふ。なほ、これを焼きて心みむ」といふ。翁、「それ、さもいはれたり」といひて、大臣に、「かくなむ申す」といふ。大臣答へていはく、「この皮は、唐土にもなかりけるを、からうじて求め尋ね得たるなり。なにの疑ひあらむ」。「きは申すとも、はや焼きて見たまへ」といへば、火の中にうちくべて焼かせたまふに、めらめらと焼けぬ。「さればこそ、異物の皮なりけり」といふ。大臣、これを見たまひて、顔は草の葉の色にてゐたまへり。かぐや姫は、「あな、嬉しい」とよろこびてゐたり。かのよみたまひける歌の返し、箱に入れて、返す。

名残りなく燃ゆと知りせば皮衣思ひのほかにおきて見ましを
とぞありける。されば、帰りましたにけり。

世の人々、「安倍の大臣、火鼠の皮衣持ていまして、かぐや姫にすみたまふとな。ここにやいます」など問ふ。ある人のいはく、「皮は、火にくべて焼きたりしかば、めらめらと焼けにしかば、かぐや姫あひたまはず」といひければ、これを聞きてぞ、とげなきものをば、「あへなし」といひける。(原文)

*

*

右大臣は、かぐや姫の家の門に、その宝物を持って行って立っていた。竹取の翁が出てきて、その宝物を受け取って、かぐや姫に見せる。かぐや姫が、その皮衣を見て言うことには、「……立派な皮のようですね、でも、これが本物の火鼠の皮衣だという証拠は特にありません」。翁が答えて言うには、「……ともかくも、まず大臣を招き入れて差し上げましょう。この世では見ることができない皮衣みたいですので、これを本物だと思いなされ。あの方をあまり困らせ申し上げなさいますな」と言つて、右大臣を招き入れ、お席をお勧めなさる。

このように席に座らせて、「……今度は必ず結婚することになろう」とも、翁と同じような心に思っている。この翁は、かぐや姫が独り身でいるのを嘆かわしく思つており、立派な人と結婚させようと思ひはかるが、強く「いやだ」と言うことなので、強いことが出来ずにいたので、(今度の)この期待も当然である。

かぐや姫が翁に言うには、「……この皮衣を火で焼いても、焼けなければ、まさに本物だと思つて、あの方のお言葉にも従ひましょう。あなたは、『……この世にまたとない物だから、それを本物だと疑ひなく思ひなさい』とおっしゃるが、でも、やはり、これを焼いて、本物かどうか確かめてみたいと思つのです」と言う。

翁は、「……それももつともなことだ」と言つて、右大臣に、「……このように申しております」と言う。大臣が答えて言うには、「……この皮は唐土にもなかつたものを、やつとの思いで求め、尋ね歩いて手に入れたものです。何を疑うことがございましょう。そうは申しても、とにかく、早く焼いてごらんください」と言うので、火の中にくべてお焼きになると、めらめらと焼けてしまう。「……こうなつたのですから、やはり偽物の皮なのですね」と翁は言う。大臣は、これを御覧になつて、顔は草の葉のように青くなつて座つておられ、かぐや姫は「……ああ、嬉しい」と喜んでおられる。

先刻、大臣がお詠みになつた歌への返歌を、その箱に入れて返す。

あとかたもなく燃えると分かつていたなら、この皮衣など問題にせず、焼かずに火の外に置いて見ましたものと書いてあつた。そこで仕方なく大臣はお帰りになつた。

世間の人々は、「……安倍の大臣は、火鼠の皮衣を持っていらつしやつて、かぐや姫と

結婚なさるといふことだな。ここにおいでになるのか」などと聞く。また、ある人が言うには、「……皮を火にくべて焼いたら、めらめらと焼けたので、かぐや姫は結婚なさらなかったのだ」と言うので、これを聞いてから、遂行できなくなつてがっかりという場合を、「安倍」にちなんで、「あへなし」と言うようになったのである。

*

*

九、
大伴の大納言と龍の頸の玉

九、大伴の大納言と龍の頸の玉 其の一（家来に龍の玉取りを命令）

大伴御行の大納言は、我が家にありとある人集めて、のたまはく、「龍の頸に、五色の光ある玉あり。それを取りて奉りたらむ人には、願はむことをかなへむ」とのたまふ。男ども、仰せの事をうけたまはりて申さく、「仰せのことは、いとも尊し。ただし、この玉、たはやすくえ取らじを。いはんや、龍の頸に玉はいかが取らむ」と申しあへり。大納言ののたまふ、「君の使といはむ者は、命を捨てても、おのが君の仰せごとをばかなへむとこそ思ふべけれ。この国になき、天竺・唐土の物にもあらず。この国の海山より、龍は下り上るものなり。いかに思ひてか、汝ら難きものと申すべき」。男ども申すやう、「さらば、いかがはせむ。難きものなりとも、仰せごとに従ひて、求めにまからむ」と申すに、大納言、見笑ひて、「汝ら、君の使と名を流しつ。君の仰せごとをば、いかがはそむくべき」とのたまひて、龍の頸の玉取りにとて、いだし立てたまふ。この人々の道の糧、食物に、殿の内の絹・綿・銭など、あるかぎり取りいでて、そへて、つかはず。「この人々ども帰るまで、齋ひをして、我はをらむ。この玉取り得では、家に帰り来な」とのたまはせけり。各々、仰せうけたまはりてまかりぬ。（原文）

*

*

大伴御行の大納言は、自分の家にいるありつたけの人を集めて、おっしゃるには、「…龍の頸には五色の光を放つ玉があるそうだ。それを取って献上する者には、願うことを叶えてやるう」とおっしゃる。家来たちは、おっしゃることを承って申すには、「…ご命令は、大変尊重すべきことですが、ただし、この玉は、簡単には取ることが出来ないものです。まして、龍の頸にある玉をどうして取れましようか」と口々に申す。大納言のおっしゃるには、「…主君に仕えている者は、命を捨てても、自分の主君の命令を叶えようと思うべきだ。この国（日本）にはなく、天竺（インド）や唐土（中国）のものでもない。この国（日本）の海や山から、龍は、昇り降りするものだ。お前たちは、どう思つて、それを困難だと申すのか」。

家来たちが申すには、「…そうご命令とあらば、いたしかたありません。たとえ困難であっても、ご命令に従つて探し求めに参りましよう」と申すので、大納言は、家来たちの様子を見ながら笑い、「…お前たちは主君の家来として、世間に知られている。その主君の命令にどうして背けようか」とおっしゃって、龍の頸の玉を取るために家来たちを出発させなさる。

この家来たちの道中の食べ物その他にはお屋敷にある絹、綿、銭など、あるだけすべて取り出して持たせて遣わしになった。「…この連中が帰るまで、わしは齋戒沐浴してしよう。この玉を手に入れることが出来なければ、家に帰って来るな」とおっしゃって、家来たちは、各自、命令を承つて、出発した。

九、大伴の大納言と龍の頸の玉 其の二（家来龍の玉取りに行かず）

「龍の頸の玉とり得ずは帰り来な」と、のたまへば、「いづちもいづちも、足の向きたらむ方へ往なむず」、「かかるすき事をしたまふこと」とそしりあへり。賜はせたる物、各々、分けつつ取る。あるいは己が家に籠りぬ、あるいは己が行かまほしき所へ往ぬ。「親、君

と申すとも、かくつきなきことを仰せたまふこと」と、事ゆかぬ物ゆゑ、大納言をそしりあひたり。

「かぐや姫据ゑむには、例のやうには見にくし」とのたまひて、うるはしき屋を作りたまひて、漆を塗り、蒔絵して壁したまひて、屋の上には糸を染めて色々に葺かせて、内々のしつらひにはいふべきもあらぬ綾織物に絵をかきて、間毎に張りたり。元の妻どもは、かぐや姫をかならずあはむまうけして、ひとり明かし暮したまふ。(原文)

*

*

ところで、実際は、「……龍の頸の玉を取ることが出来なければ帰って来るな」と命令されたので、(仕方なく)、「……どつちでもよい、足の向いた方向へ行つてしまおう」とか、「……こんな物好きなことをなさつて」とか文句を言い合つていたのです……。

賜つたものは、各々で分けて取る。ある者は、自分の家に籠つてしまい、ある者は、自分が行きたいところへ行つてしまふ。「……親や主君とは申しても、このような無理なことをご命令なさるとは」と、簡単に事は運ばぬゆゑに、大納言を非難し合つていたのでした。一方、大納言は、「……かぐや姫を妻に据えるには、いつものままでは見苦しい」とおっしゃつて、立派な建物をお作りになつて、漆を塗り、蒔絵をもつて壁をお作りになり、建物の上には、糸を染めて色々な色彩に葺かせ、室内の装飾は、言葉で言い表せないほどの豪華な綾織物に絵を描き柱と柱の間全体に張り、前からいた妻たちは、かぐや姫を必ず妻にする準備として離縁して、大納言は一人で生活しておられたのでした……。

九、大伴の大納言と龍の頸の玉 其三(海難に遭ふ)

つかはしし人は、夜昼待ちたまふに、年越ゆるまで、音もせず。心もとながりて、いと忍びて、ただ舎人二人、召継として、やつれたまひて、難波の辺におはしまして、問ひたまふことは、「大伴の大納言殿の人や、船に乗りて、龍殺して、そが頸の玉とれるとや聞く」と、問はするに、船人、答へていはく、「あやしき言かな」と笑ひて、「さるわざする船もなし」と答ふるに、「をぢなきことする船人にもあるかな。え知らで、かくいふ」と思ひ、「わが弓の力は、龍あらば、ふと射殺して、頸の玉は取りてむ。遅く来る奴ばらを待たじ」とのたまひて、船に乗りて、海ごとに歩きたまふに、いと遠くて、筑紫の方の海に漕ぎいでたまひぬ。

いかがしけむ、疾き風吹きて、世界暗がりて、船を吹きもて歩く。いづれの方とも知らず、船を海中にまかり入りぬべく吹き廻して、浪は船にうちかけつつ巻き入れ、雷は落ちかかるやうにひらめきかかるに、大納言心惑ひて、「まだ、かかるわびしき目、見ず。いかならむとするぞ」とのたまふ。

梶取答へて申す、「こころ船に乗りてまかり歩くに、まだかかるわびしき目を見ず。御船海の底に入らずは、雷落ちかかりぬべし。もし、幸に神の助けあらば、南海に吹かれおはしぬべし。うたてある主の御許に仕うまつりて、すずろなる死にをすべかめるかな」と、梶取泣く。

大納言、これを聞きて、のたまはく、「船に乗りては、梶取の申すことをこそ、高き山と頼め、など、かくたのもしげなく申すぞ」と、青へどをつきてのたまふ。梶取答へて申す、「神ならねば、何わざをか仕うまつらむ。風吹き、浪激しけれども、雷さへ頂に落

ちかかかるやうなるは、龍を殺さむと求めたまへばあるなり。疾風も、龍の吹かするなり。はや、神に祈りたまへ」といふ。(原文)

*

*

さて、派遣した家来からの連絡を夜も昼も待つておられたが、その年を越えても何の連絡もない。大納言は待ち遠しくなつて、たいそうこつそりと、たった二人の舎人を召継として連れて、粗末な身なりをして、難波のあたりにお出かけになり、お尋ねになることには、「……大伴の大納言殿の家来が、船に乗つて、龍を殺し、その頸の玉を取つたという話は聞かないか」と問い合わせると、船人が答えて言うには、「……不思議な話ですなあ」と笑つて、「……そんな仕事をする船はありませんよ」と答えると、「……意気地のない船人だな。何にも知らないで、あんなことを言うのだ」とお思いになつて、「……私の弓の力は、龍がいたら、さつと射殺して、頸の玉を取つてしまふだらう。遅れてやつて来る家来などを待つまい」とおっしゃつて、船に乗り、あちこちの海を漕ぎまわっているうちに、たいそう遠く、筑紫の方の海にまで漕ぎ出てしまつた。

ところが、どうしたことか、(突然)疾風が吹き出し、あたり一面暗くなつて、船を翻弄する。どちらの方向ともわからず、船を海の中に沈めてしまふほどに風が吹きまわり、波は何度も船に打ちかかつて海中に巻き込むばかりになり、雷は、今にも落ちそうに閃きかかるので、大納言は当惑して、「……今までにこんなに苦しい目にあつたことなどない。どうなるのだ」とおっしゃるのでした。

船頭が答えて申すには、「……長い間、ここらあたりを船に乗つてあちこち動き回つていますが、まだこんなに苦しい目に遭つたことはありません。この船が海の底に沈まなければ、雷が落ちかかるに違いありません。もし幸いに神の助けがあるならば、風に吹かれて南の海に漂着することでしょう。情けない主人にお仕え申し上げて、何とも思いがけない死に方をしそうです」と泣くのでした。

大納言がこれを聞いて、おっしゃるには、「……船に乗つたら、船頭の申すことだけを高い山を仰ぐように頼りにするものなのに、どうしてそんな頼りないことを言うのか」と、青へどを吐きつつかつおっしゃる。船頭が答えて申すには、「……私は神ではないのだから、どんなことをして差し上げられましょうか。風吹き、浪激しく、その上、雷まで頭の上に着ちかかるようなことは、龍を殺そうと探し求めておられるから、こうなるのです。疾風も龍が吹かせているのです。早く神様にお祈りなさつてくだされ」と言うのでした。

九、大伴の大納言と龍の頸の玉 其の四 (帰航へ)

大納言、「よきことなり」とて、「梶取の御神聞しめせ。をぢなく、心幼く、龍を殺さむと思ひけり。今より後は、毛の一筋をだに動かしたてまつらじ」と、よきことをはなちて、立ち、居、泣く泣く呼ばひたまふこと、千度ばかり申したまふ験にやあらむ。やうやう雷鳴りやみぬ。少し光りて、風は、なほ疾く吹く。梶取のいはく、「これは、龍のしわざにこそありけれ。この吹く風は、よき方の風なり。悪しき方の風にはあらず。よき方に面向きて吹くなり」といへども、大納言は、これを聞き入れたまはず。

三四日吹きて、吹き返し寄せたり。浜を見れば、播磨の明石の浜なりけり。大納言、南海の浜に吹き寄せられたるにやあらむと思ひて、息づき臥したまへり。船にある男ども、国

に告げたれども、国の司まうでとぶらふにも、え起きあがりたまはで、船底に臥したまへり。松原に御筵敷きて、おろしたてまつる。その時にぞ、南海にあらざりけりと思ひて、からうじて起きあがりたまへるを見れば、風いと重き人にて、腹いとふくれ、こなたかなたの目には、李を二つつけたるやうなり。これを見たてまつりてぞ、国の司も、ほほみたる。(原文)

*

*

大納言は「……それはよいことだ」とおっしゃって、「……船頭がお祭りする神様、お聞き下さい。愚かにも、大人げなくも龍を殺そうと思いました。今から後は、龍の毛一本すら動かし申すことはありませんまい」と、誓願の詞を放つて、立ったり座ったり、泣く泣く神様に呼びかけなされることを、千度ほど申し上げなされたからであろうか、やつのことで雷が鳴り止んだ。しかし、まだ少し光つて、風はなお早く吹いている。船頭が言うには、「……やはりこれは龍の仕業であつた。いま吹いている風は、よい方向に吹く風だ。悪い方向へ吹く風ではなく、よい方向に向かつて吹いているようだ」と言うけれども、大納言は、その言葉もお耳に入らないような様子である。

三、四日、順風が吹いて、船を陸地に吹き返し寄せた。浜を見ると、それは播磨の明石の浜であつた。大納言は、これは南海の浜に吹き寄せられたのであらうと思ひ、息も荒く、伏せておられる。船に乗っていた家来たちが国府に報告をしたが、国府が参上してお見舞いするにも、起き上がることもお出来にならず、船底にべつたりと伏せておられる。

松原に御むしろを敷いて、船から下し申し上げる。その時になつて、「……南海ではなかつたのだ」と思ひ、やつとのことで起き上がりなかつたのを見ると、風邪に酷くかかつた人のようになり、腹はたいそう膨れ、こちらあちらの目には、李を二つつけたやうに真っ赤になつている。これを拝見して、国府もさすがにやにやしていたのです。

九、大伴の大納言と龍の頸の玉 其の五(邸へ帰る)

国に仰せたまひて、手興作らせたまひて、によふによふ荷はれて、家に入りたまひぬるを、いかでか聞きけむ、つかはしし男ども参りて申すやう、「龍の頸の玉をえ取らざりしかばなむ、殿へもえ参らざりし。玉の取り難かりしことを知りたまへればなむ、勘当あらじとて参りつる」と申す。

大納言起きあて、のたまはく、「汝ら、よく持て来ずなりぬ。龍は鳴る雷の類にこそありけれ、それが玉を取らむとて、そこらの人々の害せられむとしけり。まして、龍を捕へたらましかば、また、こともなく我は害せられなまし。よく捕へずなりにけり。かぐや姫てふ大盗人の奴が人を殺さむとするなりけり。家のあたりだにいまは通らじ。男どもも、な歩きそ」とて、家にすこし残りたる物どもは、龍の玉を取らむ者どもに賜びつ。

これを聞きて、離れたまひし元の上は、腹を切りて笑ひたまふ。糸を葺かせて作りし屋は、鳶、鳥の、巢に、みな食ひ持ていにけり。

世界の人のいひけるは、「大伴の大納言は、龍の頸の玉を取りておはしたる」、「いな、さもあらず。御眼二つに、李のやうなる玉をぞ添へていましたる」といひければ、「あな、たへがた」といひけるよりぞ、世にあはぬことをば、「あな、たへがた」とはいひはじめける。(原文)

* * *

国府に命令を發し、手輿をお作らせなさつて、うめきうめき担われて家にお入りになるのを、どうして聞きつけたのだろうか、派遣された家来たちが参上して申すには、「……龍の頸の玉を取ることが出来なかつたので、お邸へも参上出来ませんでした。しかし、今は、玉を取ることが困難なことをお知りになったので、お咎めもあるまいと存じ参りました」と申しあげる。

大納言が、起き上がり座つておっしゃるには、「……お前たち、龍の頸の玉をよくぞ持つて来なかつた。龍は空に鳴る雷と同類であつたぞ。その玉を取ろうとして、多くの人々が殺されようとしたのだ。まして、龍を捕らえたりしようものなら、難なく、私は殺されていただろう。よくぞ捕らえずにおいてくれたことだ。かぐや姫という大悪党めが、人を殺そうとして、こんな難題を出したのだつた。あの家の周辺すら、今はもう通るまい。家来たちもその周辺を歩いてはならぬ」とおっしゃつて、家に少し残つていた財産などは、龍の玉を取らなかつた家来たちにお与えになつた。

これを聞いて、離縁された元の奥方は、腸がちぎれるほどにお笑いになつた。糸を葺かせて造つた屋形は、鳶や鳥が巢を作るためにみなくわえて持つて行つてしまつた。世間の人が言うには、「……大伴の大納言は、龍の頸の玉を取つていらつしやつたのか」、「……いや、そうではない。御眼二つに、李のような玉をつけていらつしやつた」と言つたので、「……ああ、その李は食べがたい」と言つたことから、世間の道理に合わぬ常識外れのことを、「ああ、たへがた」（ああ、堪えがたい）と言ひ始めたのである。

*

*

十、石上いそのかみの中納言と燕つばめの子安貝こやすがい

十、石上の中納言と燕の子安貝 其の一（燕の巣場所を求める）

中納言石上鷹足の、家に使はるる男どものもとに、「燕の、巣くひたらば告げよ」
とのたまふを、うけたまはりて、「何の用にかあらむ」と申す。答へてのたまふやう、「燕
の持たる子安貝を取らむ料なり」とのたまふ。男ども答へて申す、「燕をあまた殺し
て見るだにも、腹になき物なり。ただし、子をうむ時なむ、いかでかいたすらむ、侍んな
る」と申す。「人だに見れば、失せぬ」と申す。また、人の申すやう、「大炊寮の飯炊く屋
の棟に、つかの穴ごとに、燕は巢をくひはべる。それに、まめならむ男ども率てまか
りて、足座を結びあげて、うかがはせむに、そこらの燕子うまざらむやは。さてこそ取
らしめたまはめ」と申す。

中納言よろこびたまひて、「をかしきことにもあるかな。もつともえ知らざりけり。興
あること申したり」とのたまひて、まめなる男ども二十人ばかりつかはして、麻柱にあ
げ据ゑられたり。（原文）

*

*

中納言石上鷹足は、その家に使われている家来たちのもとに、「……燕が巢を作つた
ら知らせよ」とおっしゃるのを、家来たちはうけたまわつて、「……何にお使いになるの
ですか」と申し上げる。中納言が答えておっしゃるには、「……燕が持っている子安貝を
取ろうとするためだ」とおっしゃる。家来たちが答えて申すには、「……燕をたくさん殺
して見る時でさえも、子安貝は（普段）その腹の中にはないものです。ただ、それは子を
産む時に、どのようにして出すのかと問えば、それは腹から（子安貝）は出て来るのです」と
申し上げる。また、「……人を一人でも見ると、いなくなつてしまいます」とも申し上
げる。また、他の人が申し上げるには、「……大炊寮の飯を炊く建物の棟にある、束の穴
ごとに燕は巢を作つております。そこに忠実だと思われる家来たちを連れて行って、足
場を高く組み、そこに上げて覗かせれば、たくさんの燕が子を産んでいるはず。そ
うして取ることがお出来になりました」と申し上げる。中納言は、お喜びになつて、「……
興味深いことだ。少しも知らなかつたよ。素晴らしいことを言ってくれた」とおっしゃ
つて、忠実な家来たち二十人ほどを大炊寮に派遣をして、高い足場の上に登らせて配置
させた。

十、石上の中納言と燕の子安貝 其の二（子安貝の取り方を聞く）

殿より、使ひまなく賜はせて、「子安の貝取りたるか」と問はせたまふ。燕も、人
のあまたのぼりたるに怖ぢて巢にもぼり来ず。かかる由の返りことを申したれば、聞
きたまひて、「いかがすべき」と思しわづらふに、かの寮の官人くらつまると申す翁申
すやう、「子安貝取らむと思しめさば、たばかりまうさむ」とて、御前に参りたれば、中
納言、額を合せて向ひたまへり。

くらつまろが申すやう、「この燕の子安貝は悪しくばかりて取らせたまふなり。さ
ては、え取らせたまはじ。麻柱におどろおどろしく二十人の人のぼりてはべれば、あれ
て寄りもうで来ず。せさせたまふべきやうは、この麻柱をこほちて、人みな退きて、ま
めならむ一人を、荒籠に乗せ据ゑて、綱を構へて、鳥の子うまむ間に、綱を吊り上げ

させて、ふと子安貝を取らせたまはむなむ、よかるべき」と申す。中納言のたまふやう、「いとよきことなり」とて、麻柱をこほち、人みな帰りまうで来ぬ。

中納言、くらつまろにのたまはく、「燕は、いかなる時にか子うむと知りて、人をば上ぐべき」とのたまふ。くらつまろ申すやう、「燕子うまむとする時は、尾を捧げて、七度めぐりてなむうみ落すめる。さて七度めぐらむをり、引きあげて、そのをり、子安貝は取らせたまへ」と申す。中納言よるこびたまひて、よろづの人にも知らせたまはで、みそかに寮にいまして、男どもの中にまじりて、夜を昼になして取らしめたまふ。

くらつまろのかく申すを、いといたくよろこびて、のたまふ、「ここに使はるる人にもなきに、願ひをかなふることのうれしき」とのたまひて、御衣ぬぎてかづけたまうつ。「さらに、夜さり、この寮にもうで来」とのたまうて、つかはしつ。(原文)

*

*

さて、中納言は、御殿から使者をしきりに遣わして、「……子安貝は取ったか」と質問させなさる。燕も、人が大勢登つているのを怖がつて、巢にも上がつて来ない。このよな内容の返事を申し上げたところ、それをお聞きになられて、「……どうしたらよいだろう」と思い悩んでいる時に、その大炊寮の官人で、倉津麻呂という名の翁が申し上げるには、「……子安貝を取ろうとお思いならば、作戦を差し上げましょう」と言つて、御前に参上したので、中納言は、その者と額を合わせるようにして対面なさつた。

その倉津麻呂が申すには「……今の燕の子安貝の取り方は、悪い作戦で取つていらつしやるようです。これではお取りになれないでしょう。高い足場に仰々しく二十人も人が登つていますから、燕は遠のいてそばへ寄つてこないのです。私がお教える『なすべき方法』は、この高い足場を壊し、人もみな退いて、忠実だと思われる人を一人荒籠に乗せて座らせ、すぐに綱を吊り上げることが出来るように準備しておいて、鳥が子を産もうとしている間に綱を吊り上げさせて、さつと子安貝をお取らせになるのがよいでしょう」と申し上げる。中納言がおっしゃるには、「……たいへんよい方法だ」とおっしゃつて、高い足場を壊し、家来の人々は、みなお邸へと帰つて来た。

中納言が、倉津麻呂におっしゃるには、「……燕は、いったいどのような時に子を産むと判断して、人を上に上げたらよいのか」とおっしゃる。倉津麻呂が申すには、「……燕が子を産もうとする時は、尾を差し上げ、七度まわつて卵を産み落とすようです。ですから、そのようにして七度まわる時に、綱の付いた荒籠を引き上げて、その瞬間に、子安貝をお取りなさいませ」と申し上げる。中納言は、お喜びになつて、「このことは」誰にもお知らせにならないで、密かに大炊寮にお出かけになつて、家来たちの中に混じつて昼夜を問わず、(家来たちに) お取らせになるのです。……

中納言は、倉津麻呂がこのように申し上げたのを本当にひどくお喜びになつて、おっしゃるには、「……私の邸で使われている人でもないのに、願いを叶えてくれるのは、本当に嬉しい」とおっしゃつて、自ら着てこられた御衣装を脱いで褒美としてお与えになつた。「……もう一度、夜になつた頃、この大炊寮に出頭せよ」とおっしゃつて、家へお帰しになる。

十、石上の中納言と燕の子安貝 其の三(自ら燕の巢に手を入れる)

日暮れぬれば、かの寮におはして見たまふに、まことに燕巢つくれり。くらつまろの申すやうに尾浮けてめぐるに、荒籠に人をのぼせて、吊り上げさせて、燕の巢に手をさし入れさせてさぐるに、「物もなし」と申すに、中納言、「悪しくさぐればなきなり」と腹立ちて、「誰ばかりおぼえむに」とて、「我のぼりてさぐらむ」とのたまひて、籠に乗りて吊られのぼりてうかがひたまへるに、燕尾をささげて、いたくめぐるに合せて、手をささげてさぐりたまふに、手に平める物さはる時に、「我、物にぎりたり。今はおろしてよ。翁、し得たり」とのたまへば、集りて、とくおろさむとて、綱を引きすぐして綱絶ゆるすなはちに、やしまの鼎の上のけざまに落ちたまへり。

人々あさましがりて、寄りて抱へたてまつれり。御目は、白目にて臥したまへり。人々、水をすくひ入れたてまつる。からうじて息出でたまへるに、また鼎の上より、手とり足とりして、下げおろしたてまつる。からうじて、「御心地はいかが思さる」と問へば、息の下にて、「物はすこしおぼゆれど、腰なむ動かれぬ。されど、子安貝を、ふと握り持たれば、うれしくおぼゆるなり。まづ紙燭して来。この貝の顔見む」と御ぐしもたげて、御手を広げたまへるに、燕のまり置ける古糞を握りたまへるなりけり。それを見たまひて、「あな、かひなのわざや」とのたまひけるよりぞ、思ふに違ふことをば、「かひなし」といひける。(原文)

*

*

日が暮れたので、中納言は、例の大炊寮にいらつしやつて御覧になると、本当に燕が巢を作っている。倉津麻呂が申し上げたように、尾を上へ上げてまわっているので、荒籠に人を乗せてから綱で吊り上げさせて、その燕の巢に手を入れてさせて探らせるが、「……何もありません」と申し上げるので、中納言は、「……さぐり方が悪いから無いのだ」と腹を立てて、「……私以外の誰が分かるうか」と言い、「……私が上がって探ろう」とおつしやつて、籠に乗り、綱で吊り上げられて、巢の中を覗きなさんと、燕が尾を上へ上げて、ひどくぐるぐる回っている。それに合わせて、手を差し出してお探りになると、手に平たい物が触った。その瞬間、「……わしは物を握った。もう下ろしてくれ。翁、やつたぞ」とおつしやるので、家来たちが集まって、早く下ろそうとして、綱を引つ張り過ぎて綱がなくなつた瞬間に、八個の鼎の上に、仰向けにお落ちになつた。

人々はあきれて、そばに寄つて、抱きかかえ申しあげる。見ると、中納言は、御目を白目にして倒れていらつしやる。家来たちが水を飲ませて差しあげる。やつとのことで生き返られたので、また、鼎の上から、手とり足取りして、下げおろし申しあげる。「……ご気分はいかがでございますか」と問うと、やつとのことで、虫の息で、「……意識は少しあるが、腰が動かない。しかし、子安貝をさつと握つて、そのまま持っているから、嬉しく思っているのだ、まず、とにかく紙燭をつけてこい。この貝の顔を見よう」と、御頭をもたげて、御手を広げなさんと、それは子安貝ではなく、燕がたらしてあつた古糞を握つていらつしやるのでした。中納言は、これを御覧になつて、「……ああ、貝がないことだ」とおつしやつた時から、期待に反することを、「かひなし」(甲斐なし)と言うのである。

十、石上の中納言と燕の子安貝 其の四(その結末は……)

貝にもあらずと見たまひけるに、御心地も違ひて、唐櫃の蓋の入れられたまふべくもあらず、御腰は折れにけり。

中納言は、わらはげたるわざして止むことを人に聞かせじとしまひけれど、それを病にて、いと弱くなりたまひにけり。貝をえ取らずなりにけるよりも、人の聞き笑はむことを日にそへて思ひたまひければ、ただに病み死ぬるよりも、人聞きはづかしくおぼえたまふなりけり。

これを、かぐや姫聞きて、とぶらひにやる歌、

年を経て浪立ちよらぬ住の江のまつかひなしと聞くはまことか

とあるを、読みて聞かす。いと弱き心に、頭もたげて、人に紙を持たせて、苦しき心地にからうじて書きたまふ。

かひはかくありけるものをわびはてて死ぬる命をすくひやはせぬ

と書きはつる、絶え入りたまひぬ。これを聞きて、かぐや姫、すこしあはれとおぼしけり。それよりなむ、すこしうれしきことをば、「かひあり」とはいひける。(原文)

貝では無いと、それを御覧になったために、今ではご気分もずっと悪くなり、唐櫃の蓋がなかなかぴたりと合わないように、御腰折れたままで、うまくつながらない。

中納言は、子供っぽいことをして、失敗に終わったことを人に聞かせまいとなさつていたが、結局それが病の元になって、たいそう弱くなってしまわれた。貝を取ることが出来なくなったことよりも、他人がこの話を聞いて笑うであろうことを、日が経つに連れてだんだんと気になさるようになったので、ただ普通に病気で死んでしまうよりも、外聞が恥ずかしいとお感じになるのです。

この様子をかぐや姫が聞いて、お見舞いに送る歌、

長い間、お立ち寄りにもなりません、貝が無かったので、私の方も待つ甲斐がないという噂ですが、ほんとうでしょうか、と書いてあるのを、おそばの者が読んで聞かせる。中納言は、たいそう心は弱っていたが、頭をもたげて、人に紙を持たせて、苦しい気分のまま、やつのことお書きになる。

(貝は無くも、このようにお手紙をもらい) 甲斐はたしかにありましたよ。すっかりみすばらしくなって死んでしまう命を救ってくださいませんか、と書き終えると、息が絶えてしまわれた。これを聞いて、かぐや姫は、少し気の毒にお思いになった。それから、少し嬉しいことを、「かひあり」(甲斐あり)と言うようになったのである。

*

*

十一、みかど帝とかぐや姫

十一、帝の使者に会わず

さて、かぐや姫のかたちの、世に似ずめでたきことを、帝みかど聞しめして、内侍ないしなかとみ中臣なかとみのふさ子こにのたまふ、「多くの人の身をいたづらになしてあはざなるかぐや姫は、いかばかりの女メぞと、まかりて、見て参れ」とのたまふ。ふさ子、うけたまはりて、まかれり。

たけとりの家に、かしこまりて請こじ入れてあへり。媼おうなに、内侍ないしののたまふ、「仰せごとあほに、かぐや姫のかたち、優いにおはすなり。よく見て参るべきよし、のたまはせつるになむ、参りつる」といへば、「さらば、かく申しはべらむ」といひて、入りぬ。

かぐや姫に、「はや、かの御使おんつかひに対面たいめんしたまへ」といへば、かぐや姫、「よきかたちにもあらず、いかでか見ゆべき」といへば、「うたてものたまふかな。帝みかどの御使おんつかひをば、いかでおろかにせむ」といへば、かぐや姫の答ふるやう、「帝みかどの召めしてのたまはむこと、かしこしとも思はず」といひて、さらに見ゆべきもあらず。うめる子のやうにあれど、いと心はづかしげに、おろそかなるやうにいひければ、心のままにもえ責せめず。(原文)

*

*

さて、かぐや姫の容貌ようぼうの世に比べようもなく美しいことを、帝みかどがお聞き遊ばして、内侍ないし中臣なかとみのふさ子こにおっしゃるには、「……たくさんさんの人の身を滅ほろぼす程ほどに尽くさせても結婚けっこんをしないとかぐや姫とは、一体、どれほどの女メなのか、出かけて行って、見て参れ」とおっしゃるので、ふさ子は承うけつて、(その場を)退出しゅつでいした。

竹取たけとの翁おきなの家では、恐縮おそそくして内侍ないしを招き入れてお会いする。内侍ないしが媼おうなにおっしゃるには、「……帝みかどは、『かぐや姫の容貌ようぼうが(殊ことに)すぐれていらつしやるとのことで、よく見て参るよ』と、おっしゃられましたので参りました」と言いうと、媼おうなは、「……それは、そのように申しました」と言いつて、かぐや姫のいる所へと入いり行いった。

かぐや姫に向むかひ、媼おうなは、「……早く、あの御使おんつかひの方に対面たいめんなさいませ」と言いうと、かぐや姫は、「……私はすぐれた容貌ようぼうなどではございませぬ。どうして勅使ちやくしに見ていただくけましようか」と言いうので、媼おうなは、「……困こったことをおっしゃる、帝みかどのお使つかひをどうしておろそかにできましようか」と言いうと、かぐや姫が答こたへるには、「……帝みかどが召めすよにおつしやることは恐れ多いとも思おもいません」と言いつて、いっこうに内侍ないしに会いそうにもない。媼おうなも、日頃ひごろは自分の産うんだ子このようにしているが、この時ときばかりは、こちらが気兼ねきかねさせられるほどにそつけない様子ようすで言いうものだから、自分の思おもいのままに強制きやくせいもしかねるのでした。

十二、使者、かぐや姫に逢えずと帝に告げる

媼おうな、内侍ないしのもとに帰りいでて、「口惜くちせきしく、この幼せまき者は、こはくはべる者ものにて、対面たいめんすまじき」と申ます。内侍ないし、「かならず見たてまつりて参れと仰せごとありつるものを。見たてまつらではいかでか帰り参らむ。国王こわうの仰せごとを、まさに世にすみたまはむ人のうけたまはりたまはでありなむや。いはれぬことなしたまひそ」と、言葉ことばはづかしく言いひければ、これを聞ききて、まして、かぐや姫聞きくべくもあらず。「国王こわうの仰せごとをそむかば、はや、殺ころしたまひてよかし」といふ。

この内侍ないし、帰り参りて、この由よしを奏そうす。帝みかど、聞きしめして、「多くの人殺ころしてける心こころぞか

し」とのたまひて、止みにけれど、なほ思しおはしまして、この女のたばかりにや負けむと思して、仰せたまふ。「汝が持ちてはべるかぐや姫奉れ。顔かたちよしと聞しめして、御使賜びしかど、かひなく、見えずなりにけり。かくたいだいしくやは慣らはすべき」と仰せらるる。翁、かしこまりて、御返りごと申すやう、「この女の童は、絶えて宮仕へつかうまつるべくもあらずはんべるを、もてわづらひはべり。さりとも、まかりて仰せ賜はむ」と奏す。これを聞しめして、仰せたまふ、「などか、翁の手におほしたてたらむものを、心にまかせざらむ。この女、もし、奉りたるものならば、翁にかうぶりを、なか賜はせざらむ」。(原文)

*

*

嫗は、内侍のいる所へ戻つて来て、「……残念なことです、この小さい娘は、強情者でございまして、お会いしそうにもございせん」と申し上げると、内侍は、「……必ずお会いして来いとのご命令がありましたのに、お会い出来ぬままでは、どうして帰参いたせましようか。国王のご命令をこの世に住んでいられる人が、どうしてお受け申し上げなされないでいられますようか。筋の通らぬことをなさつてはいけません」と、相手が恥ずかしくなるほど(これは殊更に)威厳ある態度で言つたので、これを聞いて、なおさら、かぐや姫は承知するはずもなく、「……私が国王のご命令に背いたのであれば、早く殺してくださいませ」と言うのでした。

この内侍は、内裏へ帰参して、この様子を奏上すると、帝はそれをお聞きになつて、「……それが大勢の人を殺してしまつた強い心なのだね」とおっしゃつて、その時はそのままになつてしまつたけれども、やはり、かぐや姫のことを思つていらつしやつて、「……この女の計略に負けられようか」とお思いになられて、竹取りの翁を召し出されて、ご命令を下される、「……お前が持つているかぐや姫を献上せよ。容貌がすぐれていると聞いて、使いを遣わしたが、その甲斐もなく、得ることが出来ないままになつた。このようにうまくいかないままにしておいてよいものか」とおっしゃる。翁は、恐縮して、ご返事を申し上げるには、「……この小娘は、まつたく宮仕えに奉仕をしそうにもございせんので、それを持て余して悩んでいるのでございます。それにしても、家に戻り、帝のご命令を何とか拝受させましよう」と奏上する。これをお聞きになつて、帝がおっしゃるには、「……翁の手で育て上げたであらうに、どうしてまた、思うようにならないのか。この娘を、もし、宮中に献上したならば、翁に五位の位をどうして授けないことがあるうか」とおっしゃるのでした。

十三、翁の宮使いへの説得

翁、よろこびて、家に帰りて、かぐや姫に語らふやう、「かくなむ帝の仰せたまへる。なほやは仕うまつりたまはぬ」といへば、かぐや姫答へていはく、「もはら、さやうの宮仕へつかまじらじと思ふを、して仕うまつらせたまはば、消え失せなむ。御官冠仕うまつりて、死ぬばかりなり」。翁いらふるやう、「なしたまひそ。冠も、わが子を見たてまつらでは、なにかせむ。さはありとも、なか宮仕へをしたまはせざらむ。死にたまふべきやうやあるべき」といふ。

かぐや姫、「なほそらごとかと、仕うまつらせて死なずやあると、見たまへ。あまたの

人の心ざしおろかならざりしを、むなしくなしてこそあれ。昨日・今日帝ののたまはむことにつかむ。人聞きやさし」といへば、翁答へていはく、「天下のことは、とありとも、かかりとも、御命の危きこそ、大きな障りなれば、なほ仕うまつるまじきことを、参りて申さむ」とて、参りて申すやう、「仰せの事のかしこさに、かの童を参らせむとて仕うまつれば、『宮仕へにいだしたてば死ぬべし』と申す。みやつこまろが手にうませたる子にてもあらず。昔、山にて見つけたる。かかれば、心ばせも世の人に似ずはべり」と奏せさす。(原文)

*

*

翁は、喜んで家に帰って、かぐや姫に相談するように言うには、「……帝がこのようにおっしゃたのだ。それでもやはり宮仕えはなさらぬのか」と言うと、かぐや姫が答えて言うには、「……そのような宮仕えは全くいたすまいと思っておりますが、強いて宮仕えをおさせになるのなら、私は消え失せてしまいたいという気持ちです。翁がご官位を賜るように宮仕えをしておいて、あとはただ死ぬだけです」と言うと、翁が答えて言うには、「……そんなことをなさってはいけません。官位もわが子が見れなくなつたのでは何になりましょう。それにしても、どうしてそんなに宮仕えをなさらないのか。どうしてまた死になさるわけがあるのですか」と聞く。

かぐや姫は、「……死ぬなどと言うのは、やはり嘘だろうと、一応、私に宮仕えをさせなさつて、死なないでいるかどうか、ご覧なさい。たくさんの人たちの私に対する愛情が並大抵でなかったのを、すべて無駄にしてしまったのですよ。それなのに、昨日今日、帝がおっしゃることに従うという事は、世間への聞こえの悪いことでしょう」と言うと、翁が答えて言うには、「……世間のことはどうあろうと、こうあろうと、お命の危険が最大の問題なのだから、やはり、お仕え申し上げそうもないということ、参内して奏上しましょう」と言つて、参内して、申し上げるには、「……お言葉のもつたいなさに、あの娘(を何とか)入内させようと努めました、が、『もし、宮仕えに差し出すなら、死ぬつもりです』と申すのです。

あの子は、この造曆呂の手で産ませた子ではありません。昔、山で見つけたものでございませぬ。それで、心の持ち方も、世間一般の人たちとは似つかないのをごさいます」と奏上するのでした。

十四、帝、狩りに出る

帝仰せたまはく、「みやつこまろが家は山もと近かなり。御狩の御幸したまはむやうにて見てむや」とのたまはす。みやつこまろが申すやう、「いとよきことなり。なにか。心もとなくてはべらむに、ふと御幸して御覽せば、御覽ぜられなむ」と奏すれば、帝、にはかに目を定めて御狩にいでたまうて、かぐや姫の家に入りたまうて、見たまふに、光満ちてきよらにてゐたる人あり。これならむと思つて、逃げて入る袖をとらへたまへば、面をふたぎてさぶらへど、初めよく御覽じつれば、類なくめでたくおぼえさせたまひて、「ゆるさじとす」とて率ておはしまさむとするに、かぐや姫答へて奏す。

「おのが身は、この国に生れてはべらばこそ使ひたまはめ、いと率ておはしましがたくやべらむ」と奏す。帝、「なかさあらむ。なほ率ておはしまさむ」とて、御輿を寄

せたまふに、このかぐや姫、きと影かげになりぬ。はかなく口惜くちをしと思おぼして、げにただ人にはあらざりけりと思おぼして、「さらば、御供おんともには率みて行かじ。元の御もとかたちとなりたまひぬ。それを見てだに帰かへりなむ」と仰あはせらるれば、かぐや姫、元もとのかたちになりぬ。帝みかど、なほめでたく思おぼしめさるること、せきとめがたし。(原文)

*

*

帝みかどがおつしやるには、「……造磨みやつこまろ呂りの家は山のふもとに近いそうだね。狩りに出かけるふりをして、かぐや姫を見る事が出来るだろうか」とお聞きになさるので、造磨みやつこまろ呂りが申し上げるには、「……それは大へん結構なことです。いや、なかに、かぐや姫がほんやりしているような時に、急にお出でかけになさって御覧ごらんになられたら、御覧ごらんになることが出来ましよう」と奏上そうじょうすると、帝みかどは、急に日程を決め狩りに出でかけになられ、かぐや姫の家にお入りなつて御覧ごらんになると、家の中全体に光ひかりが満ちあふれるまでにすばらしい様子で座すわっている人がいる。「……これがあのかぐや姫であろう」とお思いになり、逃げて奥へ入るかぐや姫の袖そでをとらえなさると、顔を袖で隠して、おそばに控ひかえているけれども、はじめよく御覧ごらんになつていたので、類たぐいなくすばらしい女性だと思おぼいになつて、「……放しはしないぞ」とおつしやつて、連れていこうとすると、かぐや姫が答えて奏上そうじょうする。「……私の身は、もしこの国で生まれたものであれば、宮仕みやつかえさせることは出来ましようが、そうではございませんで、連れていらつしやるのは、とても難むずかしゅうございませう」と奏上そうじょうする。帝みかどは、「……どうしてそのようなことがあるうか。やはり連れていくつもりだ」とおつしやつて、御輿みこしを邸にお寄よせになると、このかぐや姫は、急に影かげのようになつて姿を消してしまつた。「……はかなくも消えてしまつたことよ、残念だ」とお思いになり、「……本当に普通の人ではなかつたよ」とお思いになり、「……そうであれば、供として連れていくわけにはいくまい。だから、元のお姿すがたになつてください。せめてその姿をもう一度見てから帰ろうぞ」とおつしやると、かぐや姫は元もとの姿すがたに戻かへつたのです。帝みかどは、このようなことにはなつたが、やはりすばらしい女性だと思おぼいになる気持ちを止とめることが出来なかつたのです。

十五、帝との歌のやり取り

かく見せつるみやつこまろを、よろこびたまふ。さて、仕うまつる百官あるじの人に饗あいかめしう仕うまつる。帝みかど、かぐや姫をとどめて帰かへりたまふことを、あかず口惜くちをしく思おぼしけれど、魂たましひをとどめたる心地こころちしてなむ、帰かへらせたまひける。御輿おんこしにたてまつりて後に、かぐや姫に、

帰かへるさのみゆき物憂ものうれくおもほえてそむきてとまるかぐや姫ゆゑ

御返おんかへりごと、

むぐらはふ下したにも年は経へぬる身のなにかは玉のうてなをも見む
これを、帝みかど御覧ごらんして、いとど帰かへりたまはむ空そらもなく思おぼさる。御心みこころは、さらにたち帰かへるべくも思おぼされざりけれど、さりとて、夜を明あかしたまふべきにあらねば、帰かへらせたまひぬ。つねに仕うまつる人を見たまふに、かぐや姫のかたはらに寄よるべくだにあらざりけり。異人ことひとよりはきよらなりと思おぼしける人も、かれに思おぼし合あすれば、人にもあらず。かぐや姫のみ御心みこころにかかりて、ただ独ひとり住すみしたまふ。よしなく御方おんかた々がたにも渡わたりたまはず。かぐや

姫の御もとにぞ、御文を書きてかよはせたまふ。御返り、さすがに憎からず聞えかはしたまひて、おもしろく、木草につけても御歌をよみてつかはず。(原文)

*

*

このようにしてかぐや姫を見せてくれた造磨呂を、帝は嘉(褒めて褒美を)遣わす。一方、翁も、帝に仕えている百官に対して、盛大な饗応でもてなした。帝は、かぐや姫をそこに残してお帰りになることを、不満のまま口惜しく思っておられたが、自分の魂は、かぐや姫のもとに置いてきたような気持ちのままお帰えりになられたのです。御輿にお乗りになられた後で、かぐや姫に(次のような歌を詠まれた。)

帰り道の御幸(お出かけ)が物憂く思われて、つい後ろを振り向いてしまうような私、それもこれもすべて勅命に背いて出仕しないかぐや姫、そなたゆえなのですよ。

かぐや姫、その歌の返しとして、

葎はふ(雑草の生い茂っている)ような貧しい家で過ごしてきた私が、どうして今更、金殿玉楼を見て暮らせましょう。

これを、帝が御覧になって、(歌のすばらしさに)一層お帰りになる場所もないようなお気持ちになられる。御心(お気持ち)では、まるで帰ろうともお思いにならなかったのであるが、だからと言って、ここで夜を明かすようなことが出来るはずもないので、仕方なくお帰りになられたのです。

さて、宮中において、いつもおそば近く仕えている女性を御覧になると、かぐや姫のかたわらに寄ることのできそうな人すらとてもいなかった。今までは他の人よりはすばらしいと思っておられた女性も、あのかぐや姫と思い比べるならば、人並みにも思われない。それゆえ、かぐや姫のことばかりが御心にかかって、ただ一人で暮らしていらつしやる。理由もなくご婦人方のほうにもお渡りになられない。かぐや姫のところだけに御文を書いてお送りになる。そのご返事は、さすがに情が込められやり取りなさるので、趣深く、季節それぞれの木や草などにつけたりして、帝は歌を詠んでかぐや姫にお送りなさるのでした。

*

*

十六、かぐや姫、この頃ごろ、月を見て嘆なげく

十六、かぐや姫、この頃、月を見て嘆く

かやうにて、御心をたがひに慰めたまふほどに、三年ばかりありて、春のはじめより、かぐや姫、月のおもしろういでたるを見て、つねよりも、物思ひたるさまなり。在る人の、「月の顔見るは、忌むこと」と制しけれども、ともすれば、人間にも、月を見ては、いみじく泣きたまふ。

七月十五日の月にいでて、せちに物思へる気色なり。近く使はるる人々、たけとりの翁に告げていはく、「かぐや姫、例も月をあはれがりたまへども、この頃となりては、ただごとにもはべらざめり。いみじく思し嘆くことあるべし。よくよく見たてまつらせたまへ」といふを聞きて、かぐや姫にいふやう、「なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見たまふぞ。うましき世に」といふ。かぐや姫、「見れば、世間心細くあはれにはべる。なでふ物をか嘆きはべるべき」といふ。

かぐや姫の在る所にいたりて、見れば、なほ物思へる気色なり。これを見て、「あが仏、何事思ひたまふぞ。思すらむこと、何事ぞ」といへば、「思ふこともなし。物なむ心細くおぼゆる」といへば、翁、「月な見たまひそ。これを見たまへば、物思す気色はあるぞ」といへば、「いかで月を見ではあらむ」とて、なほ月いづれば、いであつづ嘆き思へり。夕やみには、物思はぬ気色なり。月のほどになりぬれば、なほ時々はうち嘆き、泣きなどす。これを、使ふ者ども、「なほ物思すことあるべし」と、ささやけど、親をはじめて、何事とも知らず。(原文)

*

*

このように、お互いに御心を慰め合わせているうちに、三年ほどが過ぎ、ある年の春の初め頃から、かぐや姫は、月が趣きある様に出ているのを見ては、普段よりも物思いに耽っておられる様子である。傍にいる人が「……月の顔を見るのは不吉なことですよ」と、お止めになつても、ともすれば、人目のない間にも、月を見てはひどくお泣きになさる。

七月十五日の月に、かぐや姫は縁側に出てすわり、ひどく物思いに耽っている様子である。かぐや姫の近くでお仕えする人々が竹取の翁に告げて言うには、「……かぐや姫は、ふだんでも月を見て、しみじみ心を動かされているようですが、この頃では、ただごとではないご様子で、ひどく思い嘆かれることがあるに違いありません。よくよく気をつけて見て上げて下さい」と言うのを聞いて、翁がかぐや姫に言うには、「……どのような心地がすれば、このように物思いに耽った様子で月を見られるのですか。すばらしい世の中なのに」と言う。かぐや姫は、「……月を見ると、世の中が心細くしみじみとした気持ちになるのです。そのほかに何のために物思いに耽って嘆いたりしましうか」と言うのでした。

しかし、翁がかぐや姫のいる所に実際に行つてみると、やはり物思いに耽っている様子である。これを見て、「……私の大切な人よ、何事を思い悩んでいるのですか。思つておられることは何事ですか」と聞くと、「……思い悩むことは何もありません。ただ何となく心細く思うだけです」と言うので、翁は、「……月を見てはいけません。これを見ると、どうも思い悩む様子がありますよ」と言うので、「……どうして月を見ないでいられますしうか」と言つて、やはり月が出れば、縁側に出てすわり、物思いに嘆いている。夕方でも、月が出ていない頃には物思いのない様子ですが、月が出る頃になると、やはり時々

はため息をついたり、泣いたりする。これを見て、仕えている人々は、「……やはり何かお悩み事があるに違いない」と囁き合うが、親をはじめ、誰もその理由を知らない。

十七、八月十五日が近づく

八月十五日ばかりの月にいでゐて、かぐや姫、いといたく泣きたまふ。人目も、今はつみたまはず泣きたまふ。これを見て、親どもも、「何事ぞ」と問ひ騒ぐ。かぐや姫、泣く泣くいふ、「さきさきも申さむと思ひしかども、かならず心惑はしたまはむものぞと思ひて、今まで過ごしはべりつるなり。さのみやはとて、うちいではべりぬるぞ。おのが身は、この国の人にもあらず。月の都の人なり。それをなむ、昔の契りありけるによりてなむ、この世界にはまうで来たりける。今は、帰るべきになりにければ、この月の十五日に、かの元の国より、迎へに人々まうで来む。さらずまかりぬべければ、思し嘆かむが悲しきことを、この春より、思ひ嘆きはべるなり」といひて、いみじく泣くを、翁、「こは、なでふことをのたまうぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大ききおはせしを、わが丈立ちならぶまでやしなひたてまつりたる我が子を、なにびとか迎へきこえむ。まさ

にゆるさむや」といひて、「我こそ死なぬ」とて、泣きののしること、いと堪へがたげなり。かぐや姫のいはく、「月の都の人にて父母あり。かた時の間とて、かの国よりまうで来しかども、かくこの国にはあまたの年を経ぬるになむありける。かの国の父母のこともおぼえず。ここには、かく久しく遊びきこえて、慣らひたてまつれり。いみじからむ心地もせず。悲しくのみある。されど、おのが心ならずまかりなむとする」といひて、もろともにいみじう泣く。使はるる人も、年ごろ慣らひて、立ち別れなむことを、心ばへなどあてやかにうつくしかりつることを見慣らひて、恋しからむことの堪へがたく、湯水飲まれず、同じ心に嘆かしがりけり。(原文)

*

*

八月十五日に近い頃の月になると、縁側近くに出てすわり、かぐや姫は、とてもひどくお泣きになる。人目も今は気にせずお泣きになる。これを見て、親たちも、「……一体、どうしたのです」と騒いでたずねる。かぐや姫が泣く泣く言うには、「……前々から申し上げようと思っておりましたが、申し上げたら、必ず思い悩まれることになると思つて、今まで黙つて過ごしていたのです。でも、いつまでもそうはいかないと思ひ打ち明けていたのでございます。私の身は、この人間世界のものではございません。月の都の人なのです。それなのに、前世の宿縁によつて、この世界に参上したのでございます。今はもう帰えらねばならぬ時になりましたので、この月の十五日に、あの以前にいた月の国から、人々が迎えに参上しようとしているのです。

避けることができず、どうしても行つてしまわなければなりません。あなた方がお嘆きになるのが悲しいことですので、この春以来、私もそれを思い嘆いていたのでございます」と言つて、ひどく泣くのを見て、翁は、「……これはまた、何ということをおっしゃるのですか。竹の中から見つけて差し上げましたけれども、その時はわずかに菜種ほどの大ききでおられたのを、今では私の身の丈と並ぶほどまでにお育て申しあげた私の子を、誰がお迎え申し上げるのでしょうか。絶対に許しません」と言つて、「……もし、そんなことになるなら、私の方こそ、死んでしまいたい」と言つて、泣き騒ぐのを見ると、(か

ぐや姫も) ひどく耐えられない様子である。

かぐや姫が言うには、「……私には月の都の人としての父母があります。わずかな間だと申して、あの月の国からやって参りましたが、このようにこの国において多くの年を経たしまったのでございます。あの月の国の父母のことも覚えておりません。この地上では、このように長い間滞在させていただきまして、お親しみ申し上げているのです。ですから、故郷へ帰ると言っても、嬉しい気持ちはいたしません。悲しい気持ちでいっぱいです。でも、自分の心ではどうにもならぬままに行ってしまうおうとしているのです」と言つて、翁や姫と一緒にひどくお泣きになる。使用人たちも、何年もの間慣れ親しんで、氣立てなでも高貴で可愛らしかったことなど見慣れているので、別れてしまうのだと思うと、恋しい気持ち堪えきれそうにもなく、湯水も喉に通らない有様で、翁、姫と同じ心で嘆き合うのでした。

十八、帝、翁に使いを出し昇天を確かめる

このことを、帝、聞しめして、たけとりが家に、御使つかはせたまふ。御使に、たけとりいであひて、泣くことかぎりなし。このことを嘆くに、鬚も白く、腰もかがまり、目もただれにけり。翁、今年は五十ばかりなりけれども、物思ひには、かた時になむ、老いになりけると見ゆ。御使、仰せごととて、翁にいはく、『いと心苦しく物思ふなるはまことにか』と仰せたまふ。たけとり、泣く泣く申す。「この十五日になむ、月の都より、かぐや姫の迎へにまうで来る。尊く問はせたまふ。この十五日は、人々賜はりて、月の都の人まうで来ば、捕へさせむ」と申す。御使、帰り参りて、翁の有様申して、奏しつることも申すを、聞しめして、のたまふ、「一目見たまひし御心にだに忘れたまはぬに、明け暮れ見慣れたるかぐや姫をやりて、いかが思ふべき」。〔原文〕

このことを帝がお聞きになられて、竹取の家へ御使者を派遣なされた。翁は、その御使者にお会いし、ただ泣くことばかりである。このことを嘆くので、鬚も白くなり、腰も曲り、目もただれてしまった。翁は、今年で五十ばかりであったが、かぐや姫と別れる苦しみのために、短期間で一気に老けてしまったように見える。御使者は、帝のお言葉として、翁に言うには、「……たいそう心を苦しめ悩んでおられるというのは本当か」とおっしゃる。翁が泣く泣く申し上げるには、「……この十五日に、月の都から、かぐや姫をお迎えするために参り来るとのことです。恐れ多くもお尋ねくださいましたが、この十五日には、ご家来の人たちを派遣していただき、月の都の人がやって来たならば、捕らえさせたい」と申し上げる。御使者は、内裏に帰参して、翁の様子を帝に申し、また、翁の奏上した言葉を申し上げると、それをお聞きになり、おっしゃるには、「……一目見ただけの心にも忘れることが出来ないのに、明け暮れ見慣れているかぐや姫を月にやったら、翁はどう思うだろうか」。

*

*

十九、天人のお迎えとかぐや姫の昇天

十九、ついに八月十五日に……

かの十五日、司々に仰せて、勅使、中将高野のおほくにといふ人を指して、六衛の司あはせて、二千人の人を、たけとりが家につかはす。家にまかりて、築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々多かりけるにあはせて、あける隙もなく守らす。この守る人々も、弓矢を帯して。母屋の内には、媼どもを、番に下りて守らす。

媼、塗籠の内に、かぐや姫を抱かへてをり。翁も、塗籠の戸鎖して、戸口にをり。翁のいはく、「かばかりまもる所に、天の人にも負けむや」といひて、屋の上にをる人々にいはく、「つゆも、物、空に駆ければ、ふと射殺したまへ」。守る人々のいはく、「かばかりして守る所に、かはほり一つだにあらば、まづ射殺して、外にさらさむと思ひはべる」といふ。翁、これを聞きて、たのもしがりをり。(原文)

*

*

その十五日に、帝は、それぞれの役所にご命令になつて、勅使に中将高野大国という人を任命して、六衛の役所合わせて二千人の人を、竹取りの家に派遣される。家に到着して、竹取りの翁の家の土塀の上に千人、屋根の上に千人、翁の家の使用人などはもともと多かつたのに合わせて、空いている隙間もないほどに守らせる。この使用人たちも兵士と同じく弓矢を持って武装している。その一部を屋根の上から下ろし、建物の中では、当番として、おんなたちを守らせる。

媼は、塗籠の中でかぐや姫を抱えてじつと座っている。翁も塗籠の戸に鍵をかけて、戸口に座っている。翁が言うには、「……これほどまでに守っている所に、天の人にも負けるはずがない」と言つて、屋根の上にいる人々に言うには、「……ちよつとも物が空を飛んだら、さつと射殺してください」。守る人々が言うには、「……このようにして守っている所で、蝙蝠一匹なりともいたならば、真つ先に射殺して、見せしめとして外に晒してやろうと思つていますよ」と言う。翁は、これを聞き、頼もしく思つて控えている。

二十、一方、かぐや姫の言うことには

これを聞きて、かぐや姫いふ。「鎖し籠めて、守り戦ふべきしたくみをしたりと、あの国の人をえ戦はぬなり。弓矢して射られじ。かく鎖し籠めてありとも、かの国の人來ば、みなあきなむとす。あひ戦はむとすとも、かの国の人來なば、猛き心つかふ人も、よもあらじ」。翁のいうやう、「御迎へに來む人をば、長き爪して、眼をつかみつぶさむ。さが髪をとりに、かなぐり落とさむ。さが尻をかきいでて、ここのら朝廷人に見せて、恥を見せむ」と腹立ちをり。

かぐや姫のいはく、「声高になのたまひそ。屋の上をる人どもの聞くに、いとまきなし。いますがりつる心ざしどもを、思ひも知らで、まかりなむとすることの口惜しうはべりけり。長き契りのなかりければ、ほどなくまかりぬべきなめりと思ひ、悲しくはべるなり。親たちのかへりみを、いささかだに仕うまつらでまからむ道もやすくもあるまじきに、日頃も、いでゐて、今年ばかりの暇を申しつれど、さらにゆるされぬによりてなむ、かく思ひ嘆きはべる。

御心をの迷惑はして去りなむことの、悲しく堪へがたくはべるなり。かの都の人は、

いとよきに、老いをせずなむ。思ふこともなくはべるなり。さる所へまからむずるも、いみじくはべらず。老いおとろへたまへるさまを見たてまつらざらむこそ恋しからめ」といへば、翁、「胸いたきこと、なのたまひそ。うるはしき姿したる使にも、障らじ」と、ねたみをり。(原文)

*

*

これを聞いて、かぐや姫が言う、「……私を塗籠に閉じ込めて、守り戦う準備をしたところで、あの月の国の人と戦うことは出来ません。弓矢をもつても射ることが出来ないでしょう。このように鍵をかけて閉じ込めても、あの月の国の人が来たならば、みな自然に開いてしまうでしょう。戦い合おうとしても、あの国の人が来たならば、勇猛心を振るう人も、よもやありますまい」と。

翁の言うことには、「……お迎えに来る人を、長い爪をもって、目の玉をつかみつぶしてやろう。そいつの髪をつかんで、(空から)荒々しく引き落としてやろう。そいつの尻をまくり出して、多くの役人に見せて、恥をかかせてやろう」と腹を立てている。

かぐや姫の言うには、「……大きな声でおっしゃいますな。屋根の上にいる人たちが聞いたら、たいそうみつももないことですよ。これまでのご愛情をわきまえもせず、出て行ってしまうことが残念でなりません。長い宿縁が無かつたために、このように間もなく出て行かなければならないのだと思い、悲しんでいます。両親へのお世話を少しもいたさないまま出かけてしまう道中であれば、当然、安らかではありますまいから、日ごろも縁側に出て、月の国の王に、せめて今年だけでもとお暇の延長をお願いしましたが、どうしても許されず、このように嘆き悲しんでいるのでございます。

ご両親の御心ばかりを感わせて去ってしまふことが、悲しくて堪えがたいのでございませぬ。あの月の都の人は、とても清らかで美しく、年を取りませぬ。また、悩み事もないのです。でも、そのような所へ行こうとしていまして、今の私には嬉しくありません。ご両親の老い衰えなざる様子を見て差し上げられないことこそ、なによりも悲しいことです」と言うと、翁は、「……胸が痛くなるようなことをおっしゃいますな。立派な姿をした天の使いが来られても、問題はないのだから」と、嫉み(恨んで)おるのでした。

二一、迎えの天人来たる

かかるほどに、宵うちすぎで、子の時ばかりに、家のあたり、昼の明さにも過ぎて、光りたり。望月の明さを十合せたるばかりにて、在る人の毛の穴さへ見ゆるほどなり。大空より、人、雲に乗りて下り来て、土より五尺ばかり上りたるほどに立ち連ねたり。内外なる人の心ども、物におそはるるやうにて、あひ戦はむ心もなかりけり。からうじて、思ひ起こして、弓矢をとりたてむとすれども、手に力もなくなりて、萎えかかりたり。中に、心さかしき者、念じて射むとすれども、ほかさまへいきければ、あひも戦はで、心地、ただ痴れに痴れてまもりあへり。

立てる人どもは、装束のきよなること物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に、王とおぼしき人、家に、「みやつこまる、まうで来」といふに、孟く思ひつるみやつこまるも、物に酔ひたる心地して、うつぶしに伏せり。(原文)

*

*

こうしているうちに、宵も過ぎて、夜中の十二時頃になると、家の周辺が昼の明るさ以上に光り輝いた。満月の明るさを十も合わせたほどの明るさで、そこにいる人の毛穴さえ見えるほどである。大空から人が雲に乗って下りて来て、地面から五尺（約七・五尺）ほど上がった高さの所に立ち並んだ。それを見て、家の内外にいる人たちは、何か物の怪に襲われたような気持ちになって、戦い合おうという心もなくなったのである。かろうじて思い起こし、弓に矢をつがえようとするが、手に力も入らなくなり、だらっと物に寄りかかっている。その中に気丈な者が我慢して矢を射ようとするが、あらぬ方向へと飛んでいくので、激しく戦うこともなく、気持ちはただぼんやりとして、お互いに顔を見合わせるばかりであった。

地上から五尺ほど上に立っている人たちは、その衣装のすばらしいこと、たとえようもない。飛ぶ車を一つともなっている。その車には、薄絹を張った天蓋が差しかけてある。その中に王と思われる人が、家に向かって、「……造鷹呂出てこい」と言うと、今まで猛々しく構えていた翁も、何かに酔ったようになって、うつぶせにひれ伏している。

二二、天人の王の言うには

いはく、「汝、幼き人。いささかなる功德を、翁つくりけるによりて、汝が助けにとて、かた時のほどとくだししを、そこらの年ごろ、そこらの黄金賜ひて、身を変へたるがごとかりたり。かぐや姫は罪をつくりたまへりければ、かく賤しきおのれがもとに、しばしおはしつるなり。罪の限りはてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き嘆く。あたはぬことなり。はや返したてまつれ」といふ。

翁答へて申す、「かぐや姫をやしなひたてまつること二十余年になりぬ。『かた時』とのたまふに、あやしくなりはべりぬ。また異所にかぐや姫と申す人ぞおはしますらむ」といふ。「ここにおはするかぐや姫は、重き病をしたまへば、えいでおはしますまじ」と申せば、その返りごとはなくて、屋の上に飛ぶ車を寄せて、「いざ、かぐや姫、穢き所に、いかでか久しくおはせむ」といふ。立て籠めたる所の戸、すなはちただあきにあきぬ。格子どもも、人はなくしてあきぬ。媪抱きてゐたるかぐや姫、外にいでぬ。えとどむまじければ、たださし仰ぎて泣きをり。（原文）

*

*

天人の王の言うには、「……汝、未熟者よ。少しばかりの善行をお前が為したことによって、お前の助けにしようとして、ほんのわずかな間と思つて、かぐや姫を下界に下したのだが、長い年月の間、たくさんのお金を賜わつて、お前は生まれ変わったように金持ちになった。かぐや姫は天上で罪をなされたので、このように賤しいお前の所にしばらくいらつしやつたのである。かぐや姫の「罪の償い」の期間が終わつたので、このようにお迎えに来たを、お前は泣いて嘆く。かなわぬことだ。早くお返し申せ」と言うのである。

媪が答えて申し上げるには、「……かぐや姫を養い育てること、二十余年になりました。それを『少しの間』とおっしゃいましたので、疑わしくなりました。また別の所にかぐや姫という申す人がおいでになるのですしょう」と言う。「……ここにおいでになるかぐや姫は重い病気にかかつておられるので、外にお出にはなれないでしよう」と申し上げると、それへの返事はなく、屋根の上に飛ぶ車を寄せて、「……さあ！ かぐや姫、こんな穢な

いとところに、どうして長い間いらつしやるのですか」と言う。閉じ込めてある塗籠の戸も、即座にすべて開いてしまう。また、閉じてあった格子なども、人が開けないのに自然に開いてしまう。嫗が抱いていたかぐや姫も外に出してしまう。留めることが出来ないのも、嫗は、ただそれを仰ぎ見て泣いている。

二三、昇天する前に、置き手紙を……

たけとり心惑ひて泣き伏せる所に、寄りてかぐや姫いふ、「ここにも、心にもあらでかくまかるに、のぼらむをだに見送りましたまへ」といへども、「なにしに、悲しきに、見送りがたてまつらむ。我をいかにせよとて、捨ててはのぼりたまふぞ。具して率ておはせね」と、泣きて、伏せれば、御心惑ひぬ。「文を書き置きてまからむ。恋しからむをりをり、取りいでて見たまへ」とて、うち泣きて書く言葉は、

この国に生れぬるとならば、嘆かせたてまつらむほどまで侍らむ。過ぎ別れぬること、かへすがへす本意なくこそおぼえはべれ。脱ぎ置く衣を形見と見たまへ。月のいでたらむ夜は、見おこせたまへ。見捨てたてまつりてまかる、空よりも落ちぬべき心地する。と、書き置く。

天人の中に、持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。またあるは、不死の薬入れり。一人の天人いふ、「壺なる御薬たてまつれ。穢き所の物きこしめしたれば、御心地悪しからむものぞ」とて、持て寄りたれば、いささかなめたまひて、すこし、形見とて、脱ぎ置く衣に包まむとすれば、在る天人包ませず。御衣をとりいでて着せむとす。(原文)

* 竹取りの翁が心を乱して泣き伏している所に寄って、かぐや姫が言う、「……私自身も心ならずも、このように行ってしまうのですから、せめて昇天するのを見送ってください」と言うが、翁は、「……どうして悲しいのにお見送り申し上げましょう。私を一体どうせよというつもりで、捨てて昇天なさるのですか。一緒に連れて行ってください」と泣いて、伏しているの、かぐや姫の御心は乱れてしまう。かぐや姫は、「……手紙を書き置いてお暇しましょう。私を恋しく思い出された時には、取り出して読んでください」と言うて、泣きながら書く言葉は、

私が、この人間の国に生まれたのならば、ご両親を嘆かせ奉らぬ時まで、ずっとお仕えすることも出来ましょう。ほんとうに去って別れてしまうことは、返す返すも本意に思われます。脱いでおく私の着物を形見としていつまでも御覧ください。月が出た夜は、私の住む月をそちらから見てください。それにしても、ご両親を見捨て申し上げるような形で出て行ってしまうのは苦しく、空から落ちそうな気がいたします。と書き置きをする。天人の中の一人に持たせてある箱がある。その中には天の羽衣が入っている。また、別の箱には不死の薬が入っている。一人の天人が言うには、「……壺に入っている薬をお飲みください。穢い地上の物をお食べになられたので、ご気分が悪いことでしょう」と言つて、薬を持って傍に寄ると、かぐや姫は少しお舐めになって、少しの薬を形見として、脱いで残しておく着物に包もうとすると、そこにいる天人が包ませない。天の羽衣を取り出して、かぐや姫に着せようとする。

二四、その時、かぐや姫は、

その時に、かぐや姫、「しばし待て」といふ。「衣着せつる人は、心異になるなりといふ。物一言いひ置くべきことありけり」といひて、文書く。天人、「遅し」と、心もとながりたまふ。かぐや姫、「物知らぬこと、なのたまひそ」とて、いみじく静かに、朝廷に御文奉りたまふ。あわてぬさまなり。「かくあまたの人を賜ひてとどめさせたまへど、許さぬ迎へまうで来て、取り率てまかりぬれば、口惜しく悲しきこと。宮仕へ仕うまつらざるなりぬるも、かくわづらはしき身にてはべれば。心得ず思しめされつらめども。心強うけたまはらずなりにしこと、なめげなるものに思しとどめられぬるなむ、心にとまりはべりぬる」として、

今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいできる

とて、壺の薬そへて、頭中将呼び寄せて、奉らす。中将に、天人とりて伝ふ。中将とりつれば、ふと天の羽衣うち着せたてまつりつれば、翁を、いとほし、かなしと思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、のぼりぬ。(原文)

*

*

その時に、かぐや姫は、「……しばらく待て」と言う。「……天の羽衣着た人は、心が常の人とは変わってしまうという事です。一言言っておかねばならぬことがあるのでした」と言つて、手紙を書く。天人が「……遅い」と言つていらんなさる。かぐや姫は、「……わからぬことをおっしゃるな」と言つて、はなはだ静かに、帝にお手紙を書き申し上げる。あわてず落ち着いた様子である。

このようにたくさんのご家来をお遣わしいただき、私をお留めなされようとなされましたが、避けることの出来ない迎えが参り、私を捕らえて連れて行きますことゆえ、口惜しく悲しいことです。お傍にお仕え申し上げられなくなりましたのも、このように常人とは異なった面倒な身の上ゆえのことです。わけのわからぬこととお思いになられたことでしょうか、私が強情に命令に従わなかったことにつき、無礼な奴めとお心におとどめなさっていることが、今も心残りになっております。と書いて、

今はもうこれまでと天の羽衣着る時になりあなた様のことをしみじみと想い出しているのをごさいます。と歌をつけ加えて、その手紙に壺の中に入った不老の薬を添えて、頭中将を呼び寄せて、帝に献上させる。まず、かぐや姫の手元から天人が受け取って、中将に手渡す。中将が壺を受け取ったので、天人がかぐや姫にさつと天の羽衣着せて差し上げると、翁を「……気の毒だ、不憫だ」と思つていた思いも消えてしまった。この天の羽衣着た人は、物思ひが消滅してしまうので、そのまま飛ぶ車に乗って、百人ほどの天人を引き連れて月の世界へと昇って行くのでした。

二五、帝、「いづれの山か天に近き」と問う

その後、翁・媼、血の涙を流して惑へど、かひなし。あの書き置きし文を読み聞かせけれど、「なにせむにか命も惜しからむ。誰がためにか。何事も用なし」とて、薬も食はず、やがて起きもあがらで、病み臥せり。

中将、人々引き具して帰り参りて、かぐや姫を、え戦ひとめずなりぬること、こまごまと奏す。薬の壺に御文そへて参らす。ひろげて御覧じて、いとあはれがらせたまひて、物もきこしめさず、御遊びなどもなかりけり。

大臣・上達部を召して、「いづれの山か天に近き」と問はせたまふに、ある人奏す、「駿河の国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近くはべる」と奏す。これを聞かせたまひて、

あふこともなみだにかぶ我が身には死なむ薬も何にかはせむ

かの奉る不死の薬壺に文具して御使に賜はす。勅使には、つきのいはがさといふ人を召して、駿河の国にあなる山の頂に持てつくべきよし仰せたまふ。峰にてすべきやう教へさせたまふ。御文、不死の薬の壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せたまふ。そのよしうけたまはりて、士どもあまた具して山へのぼりけるよりなむ。その山を「ふじの山」とは名づけける。その煙、いまだ雲の中へ立ちのぼるとぞ、いひ伝へたる。

(原文・完)

*

*

その後、翁と嫗は血の涙を流して思い乱れるけれど、どうにも仕方がない。あのかぐや姫が書き残した手紙を周囲の人たちが読んで聞かせるけれども、「……何をするために命を惜しむのだ。誰のために命を惜しむのだ。何事も意味がないのだ」と言って、薬も飲まない。そのまま起き上がることもなく、病床に臥せている。

中将は、翁の家に派遣された人々を引き連れ、内裏に帰参して、かぐや姫を戦い留めることが出来なかったことを、こと細かく奏上する。不死の薬が入った壺に、かぐや姫の手紙をつけ加えて帝に差し上げる。帝は、それを広げて、御覧になって、ひどくしみじみとした気分になられ、何もお食べにならない。音楽の演奏などもなさらないのでした。大臣や上達部を召して、「……どの山が天に近いか」と帝がお尋ねになると、ある人が奏上する。「……駿河の国にあると言われる山が、この都からも近く、天にも近うございませう」と申し上げる。帝は、これをお聞きになって、

もう二度と逢うことも出来ず、そのために溢れる涙に浮かぶわが身には、不死の薬など何の役に立とうぞ、と、奉った不死の薬の壺に手紙を加えて、御使にお渡しになる。勅使には、つきのいはがさという人をお呼びになって、駿河の国にあるという山の頂上を持って行く旨をご命令になる。そして、その山頂でなすべき方法をお教えになる。お手紙と不死の薬の壺とを並べて、火をつけて燃やすべきことをご命令になる。その旨をうけたまわって、つきのいはがさが多くの兵士たちをたくさん引き連れて山に登ったことから、その山を「土に富む山」(つまり「富士の山」と名づけたのである)。

そして、その不死の壺を焼く煙は、今でも雲の中へ立ち昇っていると、言い伝えている。(完)

*

*

「参考文献」

- ※底本 「分福茶がま」 楠山正雄訳（「青空文庫」）
- ※底本 「浦島太郎」 楠山正雄訳（「青空文庫」）
- ※底本 「金太郎」 楠山正雄訳（「青空文庫」）
- ※底本 「かちかち山」 楠山正雄訳（「青空文庫」）
- ※底本 「さるかに合戦」 楠山正雄訳（「青空文庫」）
- ※底本 「舌切りすずめ」 楠山正雄訳（「青空文庫」）
- ※底本 「こぶとり爺さん」 楠山正雄訳（「青空文庫」）
- ※底本 「桃太郎」 楠山正雄訳（「青空文庫」）
- ※底本 「一寸法師」 楠山正雄訳（「青空文庫」）
- ※底本 「花咲かじいさん」 楠山正雄訳（「青空文庫」）
- ※底本 「笠地蔵」（日本の昔話Ⅲ） 関敬語編（「岩波文庫」）
- ※底本 「鶴の恩返し」（ウエブサイト等を参照）
- ※底本 「御伽草子」 市古貞次校注（「岩波文庫」）
- ※底本 「日本古典文学全集・竹取物語他」（「小学館」）